逸話集

u_

（私の直ぐ前は女で、女の直ぐ前は男だった…）

私の直ぐ前は女で、女の直ぐ前は男だった。男は、円く浅い盆に張られた灰色の水を、啜ろうとしていた。干涸らびて硬そうな唇には、深く刻まれた溝が入り組んでいて、そんな唇で幾ら水を吸っても、水は口から逸れて、頬や顎を濡らすばかりかも知れない。盆が少し傾いて、薄っぺらく見えた。女も男も、そこの私に背を向けている。少し離れた誰かが、私達三人を横から見上げていて、その見上げられる三人の一列に固まった姿が、私には見えていた。僅かに覗く盆の裏側は、地面の色を映すに違いないが、その色は抜け落ちて、何処かへ透けて行くようだった。

私の鼻は、直ぐ前の女の項の辺りの、蛇の息のような匂いを嗅いでいる。その匂いがゆっくりと喉の奥に流れ込んで、喉を詰まらせた。私の片手は、空を掴んで、音を立てて、ただ五本の指を擦り合わせていた。蛇口を捻って、そこ

から水を流せば、詰まった喉も、元に戻るのではないか。そう考えている私を、女の顔が笑おうとしている。笑いは、女の面長の顔を下から抉って剥がすように、額の生え際まで攀じ登った。私の片足の爪先は忙しく地面を蹴っていて、そこに埋まっていた蛇口の端を覗かせ、それは、捲れ上がる小さな銀紙のようにキラキラと光った。私独りでそれを見詰めていたかったが、それはもうずっと遠くから見て取られ、その煌めきに向かって、虫のようにゴソゴソと動く、影のように軽そうな丸い塊が、地肌を剥き出した山腹を、こちらへ登ってくる。登るに連れ、それは幾つかに割れて、青っぽい、七、八人の姿になった。その足取りに引き寄せられるように、微かな低い陽がその斜面に色を差し、彼らの背中の輪郭を細く輝く線で浮き立たせた。そして遂に、斜面全体が薄明るい階調を描き出すと、私は目を逸らした。その薄明るさが、穢れているように見えたからだった。

　素速く目を逸らした積もりだが、それでも、穢れを落とすために、冷たい水で目を洗いたくなった。それとも、逸らした目は直ぐに戻って、舐めるようにその穢れを弄っていただろうか。蛇口の端を蹴る爪先が痺れるように痛んだが、その爪先も蛇口も、何処かに紛れて見えなくなった。女の肩越しに、私の目は、蛇行して息をしているような細い道を追っていて、道は、藪の下に潜り込んで消えている。女が左に退き、その前の男が右に退いて、私の痛くない方の足が、

その道に向かって踏み出した。女は、骨張って硬そうな汚い足で、地面を激しく蹴り続けている。足は、ヒラヒラと舞うようにも見えた。それを眺めるのは男の目に任せ、私は直ぐに、道の方に向き直り掛けた。角張った男の顔が掠めた。薄い唇の形は分かったが、顔の中の何処にも目の輝きがない。代わりに、盆に張られた灰色の水の縁が、目の縁のように輝いた。その傾いた盆が、男の目なのかも知れない。男は、水を啜ろうとしているのではなく、顔を水に近付け、その水を通して女の姿を見て取ろうとしているのではないか。その水に、誰かの顔の下半分が映り込んだ。微かに開く唇の奥に、燃えるように白赤く輝く歯が覗いている。私が口を結ぶと、その水の上の白赤い輝きは消えた。私の歯が映っていたのなら、私は、歯が白赤く熱を帯びるまで、何か硬い物にずっと翳り付いていたに違いない。

真っ黒だった藪が、煙が湧き出すように、少しずつ濃い灰色から薄い灰色へと斑に変わってゆく。灰色は、或る薄さになると、思い直すようにまた暗い色に翻った。その色の移り変わりはどうやら、私の吐く息のせいらしい。確かめようと、口と鼻をそっと掌で覆ってみた。上体だけが、力が抜けて前のめりになり、捩れた腹で体は二つに千切れたかも知れず、胸から上だけが、左の藪に転がり込んで消えたようだった。腹から下は、右の藪に向かおうとするまでもなく、二本の腕が競うように腰に回されて、そちらへ引き寄せられた。その腕

は、二本とも左腕で、青い方が白い方の影のようだった。私は、後ろから誰かに、優しく耳朶を揉まれていた。耳は初め冷たかったが、直に温かくなった。丹念に揉まれている内に、千切れたかも知れずに冷え切っていた腹が、段々と温かくなった。

　藪の中で、その奥に向いた体を翻すと、茨越しに、尚も地面を蹴り続ける、ヒラヒラと舞う女の片足が見えた。足の色は、傾いた盆の灰色の水に映った歯の色にそっくりで、燃えるように白赤い。骨が輝いて、それが肌を透けるようだ。離れてもいるし形も違うが、私の歯と女の足の骨は、何処かで繋がっているに違いない。他にも色々見えた。しかし他は、茨の枝枝の、微かな風に揺れて互いに擦れ合う音の上っ面に現れては消える、色の流れに過ぎないようでもある。腰を何度も撫で回して、体が一つにくっついているのを確かめた。唇をしっかり結んだ男が、両腕を伸ばし、手にした盆を、女の上に翳している。男の髪は、柔らかそうに拗っていた。離れている筈なのに、手を伸ばせば、その髪を撫でられそうだ。いきなりそれが掻き上げられ、左の耳が現れた。青白い耳朶は、扁平な割りに、真ん中辺りが目立って尖って見えて、今にも壊れそうで、最後に聞き取れる誰かの遠い声に向けて、神経を研ぎ澄ますようでもある。巻き毛がぼやけて、少しずつ風に溶け、その溶けた先で、絡まり合うように何処かに束ねられてゆく。

それとも、その耳が聞き取りたいのは、私の声だろうか。試しに声を出したいが、恐らく私の歯はまだ、女の足と同じに白赤く輝くままだろう。口を開ければ、歯の白赤い輝きで、斜面を登る者達にわざわざ私の居場所を知らせるようなものだ。私は逆に、唇を固く結んだ。ただ、藪の中からは、斜面は見えないし、それがどちらの方向かも分からない。片方の爪先だけが、ジンジンと焼けるように熱い。地面を蹴り続ける女の足の痛みと、取り違えてでもいるのか。しかしそう考えただけで、却って足元から骨の焦げる匂いが立ち上りそうだ。その爪先に熱を奪われるかのように、私の歯は芯から冷えて、歯茎の感覚をなくした。

男の巻き毛を掻き上げたのは、骨のように滑らかで細い女の白い手だった。私は、閉じた唇の奥で、微かに溶け出すような感触の歯の上と下を、そっと打ち当てた。斜面を登る者達が、その歯の音を聞き取った。彼らが、私の口の中で鳴った音に惹き付けられて先を競うのが、急かされるような彼らの足音から分かる。しかし先頭に立つ者から順に、その足元は怪しくなって斜面に倒れ込み、ザラザラの斜面に擦り付けられた体は骨まで削れて、その肉と骨が、木屑のように舞い上がっていないだろうか。それも、私と女と男を、少し離れて横から見上げるのと同じ目に映っていないだろうか。一人が、やっとの事で、斜面を登り切った。遅れていた者ほど、仲間の肉と骨のお陰で、ザラザラの斜面

に直に触れず、傷を負わずに済むようで、全身、仲間の肉片や骨片に塗れている。その者の前に、森は、楔を打ち込んだように裂けている。或いは書き割りの森かも知れず、そこに踏み入った途端、何もない裏側に転げ落ちそうでもある。ひょっとして、私の潜んでいる藪も、似たようなものか。

　斜面を登り切った者は、その森の裂け目の縁に立ち尽くしていて、それを追い越した微かな低い陽が、森の裂け目の奥まで、濁った陽の色を流し込んだ。その陽の色を嫌うのか、女と男は、水に押し流されるように何処かに遠ざかった。私は、更に歯を擦り合わせて、よりはっきりと音を立てた。その音に触れて、斜面を登り切った者の体を覆う肉片や骨片は、サラサラと灰になって、斜面の方へ散ってゆく。その灰のふわりと風に舞う中に、青い一筋の光りが露わになった。低い陽とはまた別の、細かく揺れる鋭い光りが、高くから差して来ている。その青い光りの降りる端を掴めば、そこから高い方へ昇って行けないだろうか。昇って行けないまでも、ここからでは見通せない高い方を見上げられるかも知れない。もう長い事、目の高さより高い方を見ていない。私は、藪を飛び出した。

　藪はやはり、薄っぺらな書き割りでしかなかったようで、私は、何処か見当も付かない所を転げ落ちていた。ただ、そうしていながら、私の懐に次々に何かが転がり込んでくるのが分かった。どれも、私の体に触れると青く光る玉に

なった。粘り気があるのか、転がり続ける私の体から離れない。指に絡み付いたものを一つ、試しに噛んでみようと唇を開くと、ずっと機会を窺っていたらしく、私の舌と喉は、踊り狂うように、引き延ばされるままの入り組んだ発音の長い叫び声を打ち鳴らし、それを私はどうにも出来なかった。しかし、それは本当に叫び声だろうか。その声の届いている辺りに目を凝らすと、一条の透き通った光りの筋が見えてくる。私の口は、聞き取れる声ではなく、目に見えるその光りの筋を、吐き出しているのか。

　背中に柔らかいものが当たり、私の体は、そこで跳ねて漸く止まった。私は、肉の厚い濃い緑の丸い大きな葉っぱの上に、きつい胃液の匂いのする青い小さな粒を幾つも吐いていた。叫び声も光りの筋も消えていた。吐いたものは、ヌルヌルして見える一盛りの塊になって、下を向いた葉っぱの先から今にも零れそうだった。それを下から口で受けようと、私は、伸ばした首を捻って、渇いた口の中から酸っぱい舌ビラを出した。無理な姿勢が祟ったのか、懐に溜め込んだ青い玉が一斉に外に零れ出て、その転がる一つ一つが、細く鋭い光りを、それぞれ一本ずつ真っ直ぐに突き出すので、青く輝く長い剣が何本も入り乱れて、私の周りをデタラメに振り回されるようで、私の目を眩ませた。それを避けようと、直ぐ側のもっと大きな葉っぱの陰に隠れた。

　しかし、葉っぱの陰に隠れたくらいでは、光りは避けられない。何が見えて

いるのか分からなくなってしまった目で、もっと増しな避難場所はないか、振り返ろうとすると、また背中に柔らかいものが当たった。振り返りざま咄嗟にそれを掴むと、引き戻されようとする女の冷たい片足だった。女と男が、私の直ぐ側に戻って来ている。二人は、一枚の葉っぱの陰に身を寄せ、易々と光りを退けてジッとしていて、そうしていられるのが、どことなく嬉しそうにだった。どうせなら、冷たい足ではなく、地面を蹴る白赤く焼ける方の女の足を掴めれば、その足元に蛇口を見付けられるかも知れない。それでも目を洗いたいのか、渇いた喉を潤したいのかは、分からなかったが、兎に角、水の姿を見たい。

冷たい足の位置から見当を付けて探ったが、私の両手は、何も掴み取れないどころか、蛇の息のような女の足の匂いを、私の鼻に向けて扇いでいるようで、先程よりもっとひどく喉が詰まった。その匂いを避けようと体を捩ると、思い掛けず女の腰にしがみ付いていた。しかし、他に逃げ場があっただろうか。男が、そっと身を退けた。これから始まるかも知れない私と女の取っ組み合いに巻き込まれて、盆の水を零したりしたくないのだ。しっかりしがみ付いた積いもりでも、私の掌は、それを嘲笑うように全く勝手に、私の鼻先へ女の足の匂いを運んでくる。それはただ匂うだけでなく、顔面をヒリヒリさせた。女の腹の薄い肉に、隙間なく顔を埋めるしかない。そう思う内に私は、知らず知らず、女の腹に深々と噛み付いていた。女の肉の熱が、私の冷たい歯の芯に素速

く伝わってきて、纏わり付くようだった。

　女の両手が、優しく私の背中をさするようだが、その手は刃物のように薄く、大して痛みも感じないまま、私の背中は、次から次に深い傷を負わされているのではないか。男が翳す盆を覗けば、恐らくは、私の背中の有り様を確かめられるだろうが、私の目に映るのはまた、誰かに横から見上げられる三人の姿で、その角度からでは、女の体に覆い被さられて腰を折る姿勢の私の背中は、見える筈もなかった。その私達の方に、低い陽の濁った色が迫ってくると、私達を見上げる目は、少しずつ私達から離れ、見る位置も少しずつ高くなって行き、やや見下ろす程になった。それなら私の背中も目に入る筈だが、もう遠すぎて三人の姿は虫のようで、輪郭が分かるだけだった。その私の背中の輪郭は、抉れたような曲線を描いていないだろうか。それなら背中はもう、すっかり切り取られてしまっているのだ。その抉れた部分を埋めるには、遠目には、舌ビラくらいの肉がちょうど良さそうに見えた。そう見えてしまうと、口の中の私の舌ビラも、女の手で傷だらけにされてゆくようで、急にヒリヒリしだして、こびり付いていた酸っぱさが、嫌な苦味に変わった。そして、虫と見分けの付かないその私達の姿は、その苦味の中にぼやけて消えたのかも知れない。

　また吐きたいが、果たして口を開けて良いものか。切羽詰まったような足音と息遣いで、男が、私と女の周りをよろよろと動き回っているのが分かる。盆

の水を零さないためなら身を捨てる覚悟もあるらしいが、男を脅かすのは、何なのだろう。今更また、振り回される青い光りの剣が男を隙なく囲んで、男を襲おうとでもしているのか。

　男の声が、私の片方の耳の穴にジリジリと押し込まれてくる。こんな事になって、取り返しがつかない、と言うような事を、抑揚を付けて繰り返している。私の耳の穴の奥を覗き込んで、そこに、ひどく男の気に障るものでも見付けたらしい。声は、荒げようとされても途切れ途切れになり、近くなったり遠くなったりしだした。言葉を聞き分けられたのは初めだけで、後になる程ただの雑音になった。なかなか已まないが、多分男の声はずっと同じ調子なのだろう。悪いのは私の耳なのだ。恐らく、私の耳に聞き分けられる男の言葉の量は限られていて、それもほんの僅かに違いない。

　弾む女の声が、女の腰から響いて私の顔を直に痺れさせた。何かを見付けたような事を、女は言っている。それを聞いて私は、何もかも分かったような気になった。しかしそうなら、この二人から離れられる方法も分かりそうなのに、却って力を奪われ、ずっと女の細い体にしがみ付いていなければ、私の体は、胃液に塗れた青い粒粒のように、ヌルヌルと何処かに零れ落ちてしまいそうではないか。分かったのは、そんな事だけだろう。女の声が女の腰を震わせたせいで、私の顎はひどく歪められたに違いない。次にまた女が声を出せば、私の

顎は、女の肉に捩切られてしまうかも知れない。女の足が蹴っている蛇口に拘って、蛇の息のような女の足の匂いを嗅がされるなら、蛇口の事を忘れるしかない。私は、そのままの姿勢で、自らの爪先で地面を蹴っていた。幾ら強く蹴っても、爪先が軽く地面に触れる感じしかせず、或いは少しも蹴っていないのかも知れないが、そうする他に、蛇口を忘れるために出来る事はなさそうだった。

「肺が充血してるが、…中毒ではないか。」と、男の声であるらしい雑音から、それだけが聞き取れた。声は、何処か少し高い辺りへ薄っぺらく伸び上がった。「中毒」の前の言葉は聞き取れなかった。男が、私の肺を眺めているのだ。私の背中は、刃物のような女の手で、肺を剥き出すまでに、すっかり肉を削がれたらしい。左右どちらの手でも構わないが、その肺に直に触れてみたい。冷たいのか温かいのか。すると、どちらか片手が、女の冷たい足をまた掴み、もう片方の手は、何処か水の中に浸されてゆくようで、その水の底に、私の背中を探り当てた。撫でてみると、切れ味鋭い女の手は、私の背中に、彫りの深い鬼のお面でも彫ったかのようだ。そうして私の手が、蛇の息の匂いを扇ぐのを已めたのなら、もうそれに煩わされずに済みそうだが、女の腹から顔を離し、苦いものを一気に吐いたりして、その衝撃で、肺に穴を開けるような事も避けるべきだ。男は、鬼のお面に気付いているのか、いないのか。

　私達に迫っていた低い陽の濁った色が消えると、遠くからの目は、また元の位置まで戻って、私の背中が黒い布で覆われるのを、横から見上げた。男の翳す盆が、逆さを向いている。それでも灰色の水が零れないなら絵に描いた水だが、濡れた目のように縁を輝かせて、ちゃんと私の背中を映した。黒い布は、血が染みるのか、幾らか沈み込んで、その上っ面にお面の顔を透かした。彫りは深いが、鬼と見るにはやや穏やかな表情が浮かんだ。女は、私の体に被さるようにして、その浮き出た顔の唇に軽く口付けした。私の喉はすっかり詰まって、口の中の苦味は泡立って破裂しそうだった。それとも、ずっと息を出来ずにいるのだから、破裂しそうなのは肺だろうか。

　深く刻まれた真っ赤な溝を何本も入り組ませた、輪郭の定まらない奥行きが、暗い目の前にいきなり切り開かれ、その奥行きが、そのまた奥の奥行きを呼び出して、真っ赤な溝はどれも、段々と深くなる程細くなって、忙しく絡まりながら、奥へ奥へ転げ込み、盛んに私を誘っているように見えた。誘いに乗っても構わないが、私は、私の姿を見失っていた。

　纏っていた肉片や骨片は、全て灰になって舞い散ったが、斜面を登り切った者は、その自らの体までが灰になり掛けて、森の裂け目の真ん中辺りまで来た所で蹲っていた。次にまた、全身の肉や骨を剥き出して、辛うじて人の形を保つ者が、斜面を登り切り、森の裂け目を見渡せるその縁に立って、地を這う風

に流される蹲る者からの灰を浴び、それを皮膚のように身に纏う。微かな低い陽を背に受け、すらりとした逆三角形の上半身の輪郭が、糸のように細い紫色の線で描かれた。そのまま広い肩を揺らし、もう殆ど灰になって姿をなくして蹲る者を踏み越え、森の裂け目の一番奥の狭い方へ進む姿は、それと並んで歩く者の目によって捉えられていた。脚ばかり長い薄い一本の影は、消えてしまいそうでも、その者が姿を見せてからずっと、森の裂け目を縦断していた。

　森の裂け目の、楔の先そっくりに狭まって行き止まった所だけは、真っ白くて、解けずに残る雪にも見える。いや、今も森の中にだけ降る雪が、ゆらゆらと迷い出て、その辺りを舞っていた。掌を差し出すと、細かな白い粒が次々と落ちて、ころころと零れて行く。森の中は、耐え難い冷気に満ちているに違いなく、引き返すしかなさそうだった。その向きを変えようとする足元に、私と女と男は、それぞれに転がっていた。藪から低い茨の枝が延びて、私達はまだ、その枝の先の、一際大きな一枚の葉っぱの陰に隠れてもいるだろうか。森の奥へ進む灰色の姿と並んで歩く者の目は、その私達をまた、横から見上げていた。

　叫んでいるに違いない。私の舌は、踊りながらずっと激しく震えていた。そのせいで叫びの発音は入り組み過ぎて、声としても聞き取れないし、目を凝らしたところで、その声が届きそうな辺りに、光りの筋が見えて来そうにもない。代わりにそれは、ただ真っ直ぐに突き出される熱を持って、濃い緑の大きな葉

っぱの裏側を焦がし、それを真ん中から二つに裂いたのではないか。いや、その肉の厚い葉っぱの裂け目を灰色の手が左右に掴んでいて、どうやらそれを裂いたのは、灰を纏う者のようだ。その裂けた葉っぱの陰のそれぞれに、女と男は隠れるまで、真ん中の私だけが、灰を纏う者と面と向かった。灰を纏う者は、私の背中の黒い布を剥がし、裏返しにして、それで自らの全身を包んだ。それでも、私の片手だけは、女の冷たい片足を掴んで離さずに、葉陰に隠されている筈だ。では、もう片方の手は何処だろう。冷たい足を掴む手で、その見付からない手を探り取りたいが、女の足を離してしまえば、全く無防備な姿を晒してしまう事になる。葉陰に隠された手が、唯一つの秘密の切り札でもありそうだった。見付からない方の手は、もうどうにかされてしまったかも知れず、深追いして、全身丸ごと、その手と同じ目には遭いたくはない。

　片方の葉っぱの裏から、水を啜ろうとする音が聞こえる。多分まだ啜ってはいない。盆の水が絵に描いた水なら、男が、唇の奥で唾を鳴らして、啜るような音を出しているだけだ。叫び声をそちらに向けて、その葉っぱを、また灰色の手で二つに裂いて欲しかったが、ほんの少し顔の向きを変えるだけの事が出来なかった。黒い布で全身を覆った者が近付いて来て、私の額と頬と顎を撫でた。私の顔は、向けたい方と逆に向かされた。その手が私の顔から離れると、その指の股から灰の零れるのが見えた。私は、頬に灰が付いていないか、手を

当てた。その手は、女の足を掴む手ではない。それなら、見付からなかった私のもう片方の手なのだ。直ぐにその手の指が柔らかく拗って、私の顔を探った。灰は付いていないようだが、私の顔にしては、彫りが深過ぎないか。しかしそうして顔の形を弄っている内に、元々私の顔は、案外彫りが深かったのだとも思えてきた。

　黒い布で全身を覆った者が、頭だけ出して、その頭を向こうに向けて仰向けに倒れている。その灰塗れの顔も彫りが深かったが、黒い布の下の体は、ひどく薄っぺらくて、僅かの肉と骨しか残っていないようにも見えた。私はそこへ、私の顔の形を弄っていた手を伸ばした。黒い布がはだけ、その下の灰色の胸と腹は、真ん中から、縦に綺麗に割れている。額も真ん中から縦に割れていた。彫りが深く見えたのは、その割れた額のせいだった。黒い布も縦に断たれていて、私の背中に彫られた鬼のお面のような傷口の血痕もまた、下腹の辺りで縦に切り裂かれていた。他に誰も居ないのだから、私の声にならない叫びに応えて、恐らくは自らの手で、そのように自らを縦に裂いたに違いない。その腹の裂け目から、青い玉が溢れ出て、その転がる一つ一つが、真っ直ぐに延びる青い光りの剣を振り翳してくる。次々に繰り出される光りの剣は、私の叫びの熱と切り結んでいるに違いない。そうして、熱ばかり持って声にならない叫びなど、初めからある筈はないかのように、私の叫びは直に已んだ。やっと踊るの

を已めた私の舌は、芯まで熱く焼けて、軽く歯に触れただけで歯を焦がしそうで、だらしなく口を開けているしかなかった。尚も腹の裂け目から溢れる青い玉は、隙間なくジリジリと地面に拡がって、左右の葉陰に潜り込んでゆく。その入り込んだ光りが、葉っぱの表へ青く透けた。

　その葉っぱの下から、男が転げ出た。巻き毛を振り乱し、更に何処かに走って逃げようとする構えだった。縺れる脚は、意外と細く短くて、青い筋が何本も焼き付けられている。脚だけでなく、全身が青く染まって見えて、脚の傷跡は特に青かったので目に付いた。盆は持っていない。手が延びて、その男の片足を掴んだ。私の顔の形を弄った手に違いなかったが、どうしてそこまで私の手が届くんだろう。それは、私の手ではなかった。

　もう片方の葉陰から女が出て来ないのは、逃げる間もなく、光りの剣に全身を焼き切られたからだろうか。しかし、掴んでいる女の冷たい足の感触に変わりはなく、その足を引っ張っても、ただ柔らかいだけでビクともしない。女に被さっている青く光る葉っぱを払い除けたいが、そのための手がない。灰塗れの割れた下腹から溢れる青い玉が、やっと止まった。下腹は、私の口のようにだらしなく真ん丸の穴が開いたままで、その穴の縁に片手が添えられていた。青い玉は勝手に溢れ出ていたのではなく、その手が掻き出していたに違いない。引き寄せると、私の手だった。火傷だらけで疲れ果てて強張り、暫くは使い物

になりそうにないが、地面を這わせるくらいは出来そうだ。

　男が隠れていた方の葉陰に、その手を伸ばした。盆の円い形は探り当てたが、掴む力はない。その表面に指を這わせても、水の感触はない。女を覆っていた葉が少し捲れて、女の横顔を斜めに覗けた。顔は笑っていた。盆の上を這う私の指の感触を擽ったがっているようにも見えて、試しに指を浮かせると、女の顔は曇った。また指を盆に這わせようとしたが、指はザラザラと地面を這うだけだった。疲れた指で無理にも地面を撫でると、女の顔は、顎の下から面の皮が剥がされるように、笑っているのか分からないまでに崩れた。その顔の向こうの少し奥から、緩く熱い風が、私の開きっぱなしの口に流れ込み、カラカラに渇いた喉に、蛇の息のような匂いを張り付けた。直ぐにも水を飲まなければ、私は、喉の痛みで気を失うだろう。たとえ絵に描いた水でも剥がして飲みたいが、盆を掴み取ろうと幾ら探っても、乾いた硬い土を引っ掻くだけのようだ。私は、力を振り絞り、その手で女を覆う葉っぱを払い除け、女のもう片方の白赤く焼けている筈の足を探した。何がどうなっても、その女の爪先だけは、ずっと地面を蹴っているのだと思えた。青い光る玉は、もう何処かに行ってしまって一つも見当たらない。掴んでいる女の足が、益々冷たくなってゆく。

　水は諦めて、最後に大きな息を一つ、吸い込もうとした。却って、蛇の息のような匂いで喉が捩切れるのも覚悟したが、息はスルスルと肺に抜け、肺は漣

のように震えて、静かに笑うようだった。剥き出しの肺の表面が微かな低い陽を受けて、池の漣のキラキラ輝くのとそっくりなのを、私は、横から見上げる者の目で見た。その煌めきを集めて地面に垂らせば、蛇口そっくりに輝きそうだ。葉っぱを払った手を、その煌めく背中に回そうとすると、その手が、女の横っ腹に手首まで埋まっている。大きな傷口が、私の手を銜え込んでいた。女の腹に顔を埋めていた私が、顔をそこから離す時、その女の肉を噛み切ってしまって出来た傷かも知れない。喉の痛みは少しも変わらない。喉を通って、それで蛇の息のような匂いが飲み下せるなら、女の腑でも構わない。私は、尖らせた唇を、女の傷口の縁に付け、女の腹の中の柔らかいものを、腹の中の指で送り出しながら啜った。女は身を起こし、私の上に覆い被さるように私の背中を抱いて、剥き出しの私の肺に口付けし、そこに漲るものを啜った。それで喉の悶えは嘘のようになくなって、何の匂いもしない涼しい空気が喉から肺に満ち、震えの止まった肺は、全く静かになった。唇から溢れる私の唾が少しは効くのか、横っ腹の傷口は、私の手を銜えたまま、ジリジリと塞がってゆくらしい。

女の前歯が、私の背骨の真ん中辺りをコツンと噛んで、直ぐに離れた。弾みで私も、女の腹から口を離した。彫りの深い私の顔の跡が、傷口を囲んで女の肌に残り、頬の痩けた赤鬼のお面が、裏返しに女の横っ腹に食い込んでいるか

のようで、その裏向きの歪んだ口の端が、私の片手を銜え込んでいた。私は、ヌルヌルした青い小さな粒を幾つも吐いた。それを受けたのは、女の冷たい足をずっと掴んでいた手で、その掌は強張っていた。その青い粒の表面から、灰色の水がゆっくりと滲み出て、掌から溢れて足元に滴り、そこに真ん丸い灰色の水溜まりを作り、水を張った盆にそっくりになった。水の滲むのが止まると、女の口の、私の背中を啜る音も已んでいた。私の肺の表面からも、同じような水が浮いていたのだろうか。それを女は啜っていたのだろうか。私は、女の腹の傷口に銜えられていた手を、静かに引き抜いた。手は細く真っ白で、指の節も殆ど消え、どの指も剥き出しの一本の骨のように凹凸がない。

　それからゆっくり身を起こした。女が目の前から消えてゆく。私の背中にのし掛かっていた女の体は、私の真後ろへ振り上げられて、逆様になっているのかも知れない。しかし背中には、僅かな重みしか感じられない。女の重みではなく、背中そのものの重みではないか。それでも、背筋がムズムズして、何かが少しずつ、私の背中をずり落ちて行くのは感じられた。それが女の体なら、逆様に振り上げられている筈の両脚を別にすれば、頭から全て、私の背中に収まってしまっているだろうか。少しして、背筋が何も感じなくなった。女は、私の剥き出しの肺の表面に溶けて消えたのかも知れないし、そのまま私の肺を静かに覆っているのかも知れないが、どちらでも構わない。白赤く焼けて地面

を蹴っていた女の足も、虚しく宙を蹴って冷えて行くだけなら、それを掴みたいとも思わない。足元の灰色の水溜まりの上に、彫りの深いお面が浮かんでいる。お面は透き通っていた。

私は、白い手でお面を取り上げ、その裏側に、もう片方の掌の上に吐いた、青い粒を塗り込んだ。そちらの手は、手の甲まで真っ青になって、微かに光ってヌルヌルして見えた。そして、その青い粒を塗り込んだ裏側を、しっかり顔に押し付けて、お面を被った。相変わらず緩く熱い風が吹いていたが、お面を通して吸う息は、甘い水が、綿雪のように柔らかく肺に満ちるようだ。両手の色を比べると、白い手の方が翳って見える。

人の声のような物音に聞こえたが、ただ何も聞こえないのを、誰かが呟くような物音に聞き違えたのかも知れない。耳を澄ますと、人の声も何も聞こえない中に、遠い向こうへ逃げ去ろうとして、宙に浮いたまま、伸び上がって強張っている叫び声の残響が、針の揺れるように聞き取れた。それでもそれは、人の喉から絞り出される、生々しく湿った響きをしっかりと伝えている。それと比べると、先程の私の叫びなどは、生きた声とはまるで別の、物音に聞き違えられる事さえなさそうな、何処にも届かない、ただ宙に引かれた一本の線のようなものだろうか。それでも私は、また同じように叫び返そうとした。舌も喉も、震えているかどうか分からなかったし、声らしきものは、全く聞き取れな

い。青と白の二枚の手が、目の前をヒラヒラ舞ってから、結び目のように一つに組まれ、その掌の何ヶ所かに、引っ掻かれるような痛みを覚えた。両手が何かを掴み取っている。光りの筋に見えた。私の叫びが、光りの筋になっているに違いない。聞こえてくる叫びに叫び返しては、掴んでいる光りの筋の輪郭を際立たせ、両手を順々に先へ送って、聞こえてくる声の方へ進んだ。掌の痛みは焼けるようだが、その痛みによって叫び続けていられるなら、帳尻は合う。傾いた藪が、のろのろと近付いた。つまり私は、少しも進んでいないのだった。藪から延びる一本の茨の枝が、叫びの光りの筋に見えて、掌を傷だらけにして、その茨の枝を力任せに引っ張っていただけだ。幾らかでも、藪を引き寄せただろうか。何処までが藪で、森とどう繋がるのか見極めようと、私は、叫ぶのを已め、肺の音を虚ろに響かせて、藪に向かって強く息を吐き続けていた。私の息は、蛇の息の匂いがして、藪全体がそれを嫌がって、震えているようだった。

　巻き毛を振り乱す男の姿が、ぼんやりと見えてきた。私の息の匂いを嫌がるのは、茨の枝枝に手足を取られ、力なく体を捩らせる、この男かも知れない。その体の輪郭は、立ち昇ってゆく煙のような形を取ろうとして、その片足を掴む誰かの手がなければ、そのまま煙になってしまっていたかも知れない。私は、青い方の手で藪を掻き分けた。そうして見ると、男の片足を掴むのは、手ではなく、何重にも巻かれた茨の枝だった。それが結び目のように脹らんで、拳に

見えていたのだ。光りの筋に見えていた茨の枝を、白い方の手でまた引き寄せると、その枝は他の枝を払って、男の白い左の耳を剥き出した。耳だけでなく左の肩から腕まで剥き出しになって、男は、自由になった左手で耳を隠そうとする。私がそちらへ身を乗り出そうとすると、周りの枝がどれも、鉄の棒のように重い。

私も藪に捕らわれたらしい。そして、吐き続けた私の息が、藪の深くまで届いているのが分かった。その蛇の息の匂いに引き寄せられるかのように、チラチラと細かな雪の降る様子が、微かな明るみを伴って暗い奥から見えて来る。森にしては、木の枝も幹も見当たらない。雪は、或る所まで来て止まり、今にも引き返しそうな気配を見せて、明るみも急に衰えた。目を凝らすと、雪の一片一片が、示し合わせたかのように、空中で一斉に私に背を向ける。雪片そっくりの、小さな虫の一群かも知れない。私が蛇なのかどうかを、確かめに来たのだろうか。枝の重みに逆らって、森の裂け目の奥から迷い出る雪の方を振り返ろうとすると、足元の灰色の水溜まりを跨いでいて、片足だけ焼けるように熱く、足の裏が地面に溶け込んだように両足とも動かない。熱い方の脚を、白い二本の筋が、水が伝うように降りて行く。それは、脹ら脛を撫で下ろして、足首で止まった。女の両手が、私の足首を掴んだのだった。その私の足は、女の両手によって、易々と振り上げられてから、爪先を地面に叩き付けられた。

女を振り落としたいが、体を揺すれなかった。
　女は、私の足を篦か何かのように扱って、地面に穴を掘ってゆく。小石が混じる土の中から、キラキラした蛇口の端が覗いた。独りでに私の歯がガチガチと鳴って、硬い地面にでも齧り付かなければ、収まりそうにない。それが腹の底まで伝わって、体の震えが止まらなくなり、恐らくそのせいで、女は、私の背中から逆様に藪に投げ出された。それでも女の手は、私の足を離さずに、穴を掘り続ける。足元の蛇口はすっかり剥き出され、捻って水を出すだけだが、私は、棒立ちのまま見下ろすしかなかった。そこに青と白の二枚の手が重ねて添えられ、蛇口を捻った。手はどちらも左手で、私のものではない。私の手を探したが、見付からなかった。蛇口は、嗄れた喉が激しく息を吐くような音を立て続けに立てて、いきなり水を弾き出したが、勢いの割りに僅かで、直ぐにまた息を吐くような音だけになった。それを怖がるかのように、女は、私の足首を離し、茨の枝枝に背中を擦り付けて後退ろうとする。水は同じように何度か弾け出たが、地面は少しも濡れず、これもまた絵に描いたようでもあった。しかし、熱い方の足を蛇口に差し出すと、爪先は直ぐに冷えた。青い手が、女の片足を掴もうとしていて、女の足は、その手を振り払って激しく蹴っている。蹴られた青い手の手首を白い手が掴むが、掴む度に振り解かれる。女は少しずつ追い詰められ、動けない男の胸に身を預けるような形になって、もうそ

れよりは後退れなくなった。

　女の横っ腹に穴が開いている事を、誰かが声に出して言ったのかも知れない。青と白の二枚の手が、その声に振り返るように向きを変え、私の顔に襲い掛かった。被ったお面は剥がれそうで剥がれず、ガチガチと踊りたがる歯を食い縛るのもままならずに、私は、首がもげそうなのを堪えた。女がその隙に、男の足を縛っている茨の枝を、一枚の刃物のような薄い手で、次々に断ち切ってゆく。足が自由になれば、後はただ枝を払って、女は男を解き放った。直ぐに藪を抜け出そうとする男の左の耳朶に、茨の枝が巻き付いているように見える。その枝にいきなり引っ張られて、男は仰け反り、女はその下に敷かれて動けなくなった。茨の枝は耳から解け、巻き毛を貫く光りの筋が、男の耳の穴の中まで真横に差し込んで、耳の白さを際立たせた。青と白の二枚の手は、私の顔のお面を剥がすのを諦めたのか、それを盛んに弄りだした。二枚の手の感触が、お面を通して私の顔の皮膚にも伝わってくる。どうやら、お面の目からも鼻の穴からも口の中からも、頬や額や顎からも、茨の枝が生えて出ているらしい。左の耳からだけは生えていない。お面にも耳はあって、私の耳ではない。

　男の下から這い出そうとする女が、前歯をなくした口を開けて笑っている。私の胸を、青と白の二枚の手が突いて、私は、茨の枝ごと地面に倒された。藪全体が傾いて、少し歪になったかも知れない。地面に擦り付けられた方の耳に、

地下の何処か一ヶ所に流れ込む物凄い水の音が、残り少ない時を刻むように響いてくる。その水の底では岩盤がビリビリと震えて、そこはもう何時破裂してもおかしくないのだ。蛇口をいっぱいに開けて、直ぐにも水を汲み出さなければ間に合わない。それも、絵に描いた水では何ともならない。歯は、しっかりと食い縛っていた。何本もの茨の枝を生やした彫りの深い透き通った顔が、影のように宙に浮かぶのが見上げられた。倒れた弾みで、私の顔から、お面が剥がれたのか。そこに生える茨の枝を、女の白く薄い手が、手際よく削いでゆく。女の顔からは笑いが消え、お面の顔の彫りの深さに張り合うように、眉間に皺を寄せている。お面の顎を掴んで、その顔を見詰める女の目は、ジッと見開かれて真ん丸のまま動かなかった。宙に浮くお面には、耳が左右共、削ぎ落とされている。それは直ぐに見付かった。女の足元で、光りの筋に見える茨の枝の細かな切れ端に混じって、転がっていた。

　茨の枝が全て綺麗に削がれ、お面が女の手から離れると、その耳の削げたのを誰かに知らせようとする男の声がし掛けた。放り出されたお面は、上を向いてクルクル回っていて、耳がないのが辛うじて見て取れた。男の声は途中から、歪な藪が微かな風にもざわめいてしまうような音にすり替わったが、それが繰り返される度に、女は、自らの顔の彫りの深さを打ち消し、のっぺりした冷たい顔付きを益々白くして、脅すように、私の方に向かって片手を縦に大きく振

り翳して来る。お面の顔にはもう目もくれないが、女の目は、固まったように真ん丸のままだった。唸りを上げるその刃物のような手で、私を縛る茨の枝が断ち切られてゆく。出鱈目に振り回されるようだが、私には、女の手の動きが易々と読めて、少しも恐くはなく、体を捩ったり傾けたりすれば、断ち切って欲しい枝から順に、女の方に差し向けられた。薄い女の手の縁が、少しずつ白赤く輝き出すと、また私の歯が鳴り出して、その音で女の手を操っているようでもあった。急に大きく私が身を躱すと、女は、蹌踉けて私の直ぐ脇に倒れ込んだが、最後に振り下ろされた手刀が、私の喉を掠め、私は、喉仏の直ぐ下に微かな傷を負い、歯を食い縛ると、喉から血の一筋が斜めに走る感じがして、血は小さく煙のように足元に散ったようだった。

　茨の枝の細かな切れ端の幾つかが、僅かな赤味に染まって光った。その切れ端の下に埋もれ掛けて、削ぎ落とされた耳は血を浴びていない。その透き通ったままの耳を、青と白の二枚の手が、一つずつ拾って握り締め、ゆっくりと揉み始めた。耳は初め冷たかったが、二枚の手の中は段々と温かくなった。それを感じているのは私なのだ。私はそうして、自らの左右の手を取り戻せた。その青と白の両手を開くと、掌の上の揉みくちゃの二つの耳は、耳の形をなくしていたし、人の肉のようでもなく、何で出来ているのか分からなかった。さっき私の胸を突いた、私のものではない青と白の二枚の手は、他に誰も居ないの

だから、息を合わせた男と女のものであるより他ない。そう思い当たって、二人の手に目を遣ろうとしたが、目は、何処かへ逸れるばかりだった。

　クルクル回っていた顔は、そこに貼り付いたかのように動きを止め、少し仰け反って、本当の影のように消え掛かりそうだったが、地面の色が下から透け、影とはまるで違っても見えて、それが私の顔から剥がれたお面であるのかどうか、怪しくなった。或いは、私はまだ、お面を被ったままなのか。しかし、自らの顔を撫で回したところで、何も確かめられそうにない。私の左右の手は、もうその使い途を全て定められているに違いなく、私の思う通りには働いてくれそうにない。私の顔と私の両手とは、もう二度と触れ合えない程に、隔たっていないだろうか。

　影のようではなくなって、それでも影のような色をして、土から浮き出たような仰向けの顔に、女が口付けしようとしている。女は、私の腰に、横から両腕を回してしがみ付いていた。その唇は、深く刻まれた細く真っ赤な溝を何本も入り組ませて、鋭く輝いている。そんな、細かな刃物を入り組ませたような唇で口付けされたら、相手の唇は傷だらけにされてしまうだろう。女はしかし、その唇を、押し返された。仰向けの顔の唇の冷たさに驚いて、思わず顔を上げてしまったようでもあった。仰向けの顔から彫りの深さは消え、のっぺりして、微かに笑うようだった。女の目だけが、真ん丸のまま変わらない。その目に見

詰められる内に、仰向けの顔の笑うような唇は、段々と薄くなって、地面に沈んで行く。それに気を取られていて、私は、揉みくちゃの耳を二つ共、男に奪われた。男は、私から引き継ぐように、それを片手に一つずつ握って丹念に揉み出した。男の両手は真っ青で、微かに光っていた。女の白い手が、男の巻き毛を掻き上げて、男の左の耳を剥き出した。その耳に差し込む細く真っ直ぐな光りの筋も、真っ青だった。女の唇は、男の、扁平な割りに真ん中辺りの尖った白い耳に、狙いを定めたのかも知れない。腕だけは伸ばしたり曲げたりするが、男の体は、殆ど仰向けに倒れたままだった。

私は、四つん這いになって、獲物を狙うように、蛇口の方を向いていた。剥き出した歯は、唸るように鳴って、白赤く輝いているに違いない。しかし、両手が、水溜まりの灰色の水に浸かってしまったのが分かると気が挫け、一気に飛び掛かるにも、女の体が邪魔だった。女の片腕が、蛇が拗るように私の腰を締め付ける。蛇口は、向こうを向いていて、水が出ていても見えないが、何の音も届かない。女の指が、青い光りの筋を遮らないように、男の白く輝く左の耳を撫で回し、それに応えるように、男は、左の拳を突き出した。拳は、煙のように揺れた。男の耳を離れた女の手が、その男の拳を包むように掴んで、揺れるのを止めに掛かった。拳の揺れは止まったが、替わりに、男の腕から全身までが、煙のように揺れ出した。男はどうやら、叫び声を上げ、全身を強張ら

せて、その揺れを止めたいらしいが、効き目は少しも見えない。先ず、叫び声がまるで聞こえない。ただ青い光りの差し込む男の左の耳だけが、硬い石のように固まって際立っていた。その青い光りを使って、男の体の揺れを止められないものか。女もそう考えたのか、奥まで光りが届いて金色に輝いている男の耳の穴を覗き込んでから、ギラギラした唇を、男の耳に近付けていった。女の唇の先が青い光りに触れそうになると、入り組んでいた細かな刃物が、唇の表面から一斉に起き上がるようだった。女の片腕が、私の腰からゆっくりとずり落ちてゆく。

　灰色の水に浸かった手を抜くと、水溜まりから、乾いた細かな灰が煙のように舞った。水溜まりは、すっかり乾いて灰になっていた。それを見詰める私の目も、灰になって、サラサラと頬へ零れ落ちてしまいそうで恐かったが、蛇口の煌めきを直ぐ側に見て取れる事が慰めになった。それで私は、女の体を押し退けながら、蛇口に近付いた積もりだったが、私の首は、女の汚れた片足に向いていた。その足は骨張って硬そうだが、またヒラヒラと舞うようで、それに近寄る男の両足も、足の裏を上に向けて同じようにヒラヒラ舞おうとするらしい。しかし、女の足がほんの少し白赤く輝いたように見えただけで、男の足は、少し透き通り掛けて、煙のようにゆらゆらと地面を這うだけになった。女の足が誘うような動きをしても、男の足は、洗ったばかりのように綺麗なまま、同

じ所を揺れるだけになって、それを嫌うかのように、女の足は向きを変えた。その女の足は、水溜まりだった所に踏み込んで、灰を掻き回した。灰色の煙が立ち昇り、チクチクする細かな灰が私の目に入った。

　彷徨うように揺れる男の二本の足だけが、涙の向こうに滲んで、灰の煙を避けるには、私は、四つん這いで、その足の方に近付いて行くしかなかった。左手が、スベスベした手触りの冷たい突起に触れた。蛇口に違いなかった。弄って、直ぐに握り締めて捻ったが、もう一杯まで開いているのか、少しも動かない。女の蛇の息のような匂いが近付いて来て、湿った指が私の瞼を拡げ、私の目は、暗く生温かいもので塞がれた。女の舌が、私の目を舐めているのだった。目の中の灰は、女の唾で洗い流された。女の蛇の息のような匂いは、少しも苦にならなかった。ゆっくりと女の顔が離れて行く。女の目はもう、真ん丸に見開かれてはいない。唇は、青い光りに立ち向かったのが祟ったのか、色褪せて、すっかり肉が薄くなっていて、何も傷付けそうにないし、殆ど唇のようにも見えなかった。女の指が、私の喉元の小さな傷痕に触れたが、指は、カサカサに乾いていた。

　その女の姿を、改めて見直そうとすると、女は、掴んでいた男の拳をそっと離した。男の左の拳は、耳障りなガサガサと籠もった音を微かに一つ鳴らして落ち、力なく指を開いた中は、耳も何も握っていないように見える。私は、横

向きに横たわる男の体にのし掛かるようにして、もう片方の男の拳を、男の腹の下から探り出して拡げた。掌が、微かに光るのが分かった。男の二枚の掌を並べると、そこには確かに、横から青い光りが差して来ていた。それを男に伝えられないものかと、男の顔を見た。顔の中の何処にも目の輝きはないが、暫くそのまま見詰めていた。その顔の何処かに収まっている筈の目から、男もまた、私を見詰め返していないだろうか。しかし、その見詰め返す目はどうやら、男の顔の中ではなく、男の顔の下にあるようだった。男の頭は、右の耳を下に隠して、横向きに、灰色の水を張った盆の上に乗せられている。その絵に描いたらしい灰色の水に、男の落ち窪んだ小さな目が映っていないだろうか。立ち昇る煙のように揺れていた男の片腕が、急に力を得て、女の肩を抱き寄せ、女にも、灰色の水の中の男の目を覗けるように仕向けたが、女の曇った顔付きからして、女が見て取ったのは、ただ自らの、歪んだ唇をした蛇に似た汚れた顔でしかなさそうだった。

女は、男の頭の下から灰色の盆を引き抜こうとした。盆は半分位しか出て来なかったが、女はそれを力を込めて少しずつ回し、そこに映る自らの顔を溶かして消したいかのように、そこに何度も、激しく息を吐き掛けた。細い骨が順々に裂けるような明るい音が立て続けにして、灰色の水が、盆の表面から削がれてゆく。宙に弾け出た灰色の水は、小さな水煙になり、その度に、その中を

横に貫いて走る青い光りの筋が映り込んだ。その光りの筋の明るさに目が慣れたせいか、私達の周りを、青い光りの筋が何本も差して来ているのが見えて来た。その絡み合って一つに束ねられて行く方を見ると、雪のように白く小さな虫の群が、明るみを伴って近付いてくる。さっきのように、私との間には藪はなく、それは直ぐに私達を取り囲むようだったが、私達を取り囲んだのは、ただ明るみだけで、それはしかし、却って私達の周りを暗く沈ませて見せた。私達の居る所が、どれ程、暗いのか明るいのか、私達を横から見上げる目で確かめたかったが、見渡しても、その誰かの目はもう、先に何処かに行ってしまったらしい。

　灰色の水が大方削がれ、そこが透き通ると、盆は土の色になっていた。しかし土の色とは、どんな色だろう。土に色などあるだろうか。蛇口から、透き通った水が静かに流れ出ていて、横たわる男の体が、溢れる水の下に沈んで行く。薄っぺらく見える男の体は、水の下でも、煙のように揺れて、その煙は、水に溶けて行きそうだった。その煙の色が、土の色だろうか。硬い石のように左の耳だけが際立つ事もなくなった。そこに差していた青い光りの筋は、真っ先に水に溶けたらしい。替わりに水の底では、ヌルヌルして見える青い玉が、幾つも転げ回っていて、それらは、そこに届いた青い光りの筋が、透き通った土の色の中に映し出されているようでもあった。何処から何処までが、男の体か分

からなくなった。

　何処からか微かな低い陽が差して、女の背中の、艶のあるやや暗い色の肌の薄明るさは、誤魔化しようもなく、穢れて見えた。私の望みはただ、蛇口の水で目を洗う事だったのではないか。女の指が、私の背中を撫で回し、私の背骨に突き刺さるままの、女の前歯を探り当てた。それから、その手は、私の髪を掻き上げて、私の左の耳を剥き出した。女の冷んやりした息が、耳の穴に吹き込まれ、遠く、クネクネした女の声が聞き取れた。奥へ行く程広くなる、私の耳の穴の底で、緩い弧を描いて尖る私の歯の根が、並んで白赤く輝き、その歯の根は、順々に更に奥深くまで伸びて蜷局を巻き、ヒラヒラと舞う女の片方の足の骨にまで繋がっている。そんな事を、女は、私に囁いているのかも知れなかった。何もせず黙って聞いていると、女は、私の体に纏わり付くのを已め、水に片手を深く差し入れて、そこから透き通った盆を取り上げた。のっぺりした土の色をした仰向けの顔が、掬い取れた。似てはいないが、男の顔に違いなかった。（二〇〇三年七月二日）

*

*

*

（そこにもし拾われた石が置かれてあるなら…）

　そこにもし拾われた石が置かれてあるなら、それは、私が拾わなければならなかった。しかし私でない誰に、その石を拾えるだろうか。誰の事も思い浮かばない内に、私は、石を見失おうとしているし、その石の置かれるべき所はもう見失っている。そして、石というものがどんなものであるのかも、見失えるのなら見失ってしまおうと、あらぬ方に目線は彷徨い始めている。なぜ、石が拾われなければならないのか。その石の置かれるべき所へ出向こうとした事もなく、何も知らされないまま、ここへ連れて来られたらしい。それとも、私はずっとここに居て、そうと分かっていなかっただけで、元からここは、私が石を拾うために設えられた所だったのか。そうであるなら、ここがどんな所か分かっていようといまいと、どれ程の違いもない。しなければならない事を分かっていたのに、そうせずにいられただけだとしても、まるで何も分からずにいたのと変わらない。或いは何も分からずにいる方が、そうせずにいられなくなっていたかも知れない。そしてここは、ただ拾われた石の置かれるべき所でしかなくて、そんな所に私が居続けられるのは、私だけが、その石を拾わなければならなず、他に代われる者がいないからではないか。その私は、そんな事か

ら目を背けてさえいれば、ここに何時までも何もせずに居られるのを知っていて、高を括っていたのか。つまり、触れるどころか、見ようともしなかった石のお陰で、私は、こうして何もせずにいられたとも言えそうだ。それならと、私は改めて目を背けた。しかし、何処から何処へ。見失ってばかりいて、何処へ目を背けられるのか。その背ける先先で、見失ったからには、また見出さなければならないものに、先回りされているだろう。石を拾って、その置かれるべき所に置かなければならないままである限り、眠ってでもいるように立ち尽くすしかなかったが、体に潜む眠気が、その端々まで払い除けられているようでもあり、そうして眠りと懸け離れる程に、どんな深い眠りの底よりも深い所を、ぼんやり眺め回すしかなさそうでもあった。

　それでも体は動こうとし、その動きが、訳ありげでなければ間が持たないかのように、灯りの方を向こうとする。夜遅くて閉ざされた部屋であっても、ここは暗闇とは違う。それなら目は必ず光りを捉える筈で、或いは、その光りに惹かれて、ここに迷い込んだのかも知れず、それに照らされてだけ私は、人の姿をしていられるようでもある。そして、その灯りの向きを見定めれば、灯りと私の間にある、何かの影の一つも目に留まるだろうし、それは、私を丸ごと招き入れたがる底の見えない裂け目のように、私に向かって拡がって来るだろう。その拡がりに身を添わせてみよう。それでもう消えたも同じだ。私を人の

姿に見せている、纏わる影を全て振り払って、その灯りの下に埋もれて忘れ去られれば、眠りもせず眠らずもせずに済むだろう。そんな事を目論見ながら立ち尽くすしかない所で、私は、ただ独楽のようにクルクル回っているらしかった。ただ足元の何かの影に倣って、ただ全く音も立てず、僅かの風も起こさずに。そして、そのように振る舞えたのなら、石というものがどんなものであるのかを、見失うばかりか、すっかり忘れてしまえたのだとも信じられた。敢えて再び思い起こそうとすれば、石とは、拡げたばかりの指の間の僅かな温かみの、冷たく乾き果てながらも纏わり続ける何ものかだった。その纏わるものを拭い取ってしまえば、石と石に係わる一切は、もう決して私の前に現れないのではないか。

　と、そんな事を望んでも何がどうなる訳でなく、もし独楽であるなら、或る一点の上に乗せられて、ほんの僅かも動けないのに変わりはない。回り続ける私を止められるのは、私に代わって石を拾ってしまった者だろうか。それとも、私をここから立ち去れないようにしている、また別の見ず知らずの誰かだろうか。しかし、見ず知らずというなら、石を拾ったらしい者も、石を拾われてしまった私さえも、私には見ず知らずのようではないか。どうしたら、石を拾われてしまった私を、私の見知っている私であると、確かめられるだろう。しかし、確かめられたとして何になるだろう。見ず知らずであろうとなかろうと、

ここから逃れられないなら、そんな私の何が知れたところで、何も付け加わりはしない。それに、見知っている私が見出されたところで、見知らぬ私に見出されるしかないなら、それによってまた、見知らぬ者になるしかない。それとも、その見知らぬ私の方が、ずっと変わらずにいた私であって、それを見知らぬ者と思う私の方こそ、今初めて現れた、私であるしかない筈なのに、誰とも分からぬ者のようではないのか。それなら別に、見知らぬ誰かの力を借りるまでもなく、見知らぬかも知れない自らの力で、クルクル回る体を止めに掛かっても構わない。しかしそもそも、そんなクルクル回るような体など、持ち合わせていたのか。拡がって来るどころか鋭く逸れて途切れる細い影に倣って、体は、身を縮めようと出来るだけではないか。そうしてやっと、私は、足元の低い方を、目で探り当てたに違いない。ひょっとして、石がまだ拾われていないなら、その辺りに落ちていないだろうか。

　と、そんなありもしない事を見込むだけ虚しい。もし石が私の目に映るなら、それは必ず、もう拾われていて、他の何とも係わりを絶って、私に向けて示されるだけの石であるだろう。それを見失ったか、見失おうとしているだけで、どうしてそれを退けられるのか。それでも目は、低い方へ低い方へと誘われるままで、私は、その為すに任せようとしていた。そうして、そんな私の態度について語る、誰かの声を聞かされるようだった。それは、諫めるようでもあり、

庇うようでもあり、口調は、低く穏やかに囁くようで、そんな声の出し方は聞いた事がなかったが、声には聞き覚えはあった。何人かの人の、棒を立てたような姿が、浮かぶようで、傾き消え掛かる。その人達は直ぐ側に居て、時々途切れる声と声の間に、声でない物音を差し込ませた。まるで、その声ではなくその物音を、私の耳に届かせようとしているようだ。物音は単調で、声よりその物音の方が、耳に馴染み易いと分かって来て、そうなると、声のする方から身を逸らそうとしなければいられなくなった。声の途切れている間は、段々と長くなって、声は、何も示さず表情もなくし、愈愈消え入りそうに、語るためにではなく、目の前の何かに、ずっと向き合っていなければならないために、已むに已まれず出されているように聞こえた。その人達の姿は、どれも何処か似ていて、その似ているという絆で繋がっていると見え、その絆は、彼らの向き合うものにまで結ばれ、そうであるなら、その結び目から、私にまで届いているのは明らかだった。その向き合うものではなく、先ず彼らのために、私は、その絆を認めた。私の中の結び目で、絆は閉じ、閉じた中に、その向き合うものが囲われたなら、私もまたそれに向き合えるのかも知れなかったが、そうして向き合おうとすると、その向き合っているものの側で、絆は、弱々しく解れてしまうようでもあった。結び目の役割を果たせない弱さが、そこで際立った。私が加わって、絆が閉ざされたせいだろうか。それとも、その絆に耐えられな

い弱さが、絆を閉ざし、私達がそれと向き合わされているのは、その弱さのせいだろうか。

　単調な音を出している物が、絆の直ぐ脇にある。人の背程はありそうで、そこに突き立てられているか、宙吊りにされているか、恐らくどちらかではありそうで、何だか分からない形をしていたが、直ぐにそれが、どうでも良い、見掛け倒しのただの慰みのようなものだとは分かった。或いは、その中の青緑の小さな窓に映る赤い波線の動きから、細かな数字が読み取られ、それを書き写した手紙が、私をここへ呼び立てるために届けられたにしろ、その手紙もまた、インクの染みた紙屑でしかないと分かっていた。となれば、その音を立てる物など、目障りなだけで全くここには要らない。いやそうでもない。お陰で、私との距離を測れる物が、初めて目に入ったのだ。私の周りには、四人居て、四人とも背が高く、肩と肩が触れそうで、狭苦しそうに私には見えたが、彼らにはそうでもないらしく、それは、四人の心臓が全く同じ鼓動を拍っているからだとも思えた。そうなるには恐らく、それなりのかなりな時間が要っただろうが、その時間の中に私を加えようとは、彼らは少しも考えなかったようだ。それぞれが、それぞれ自らの耳にだけ向けて囁くような、籠もって丸みを帯びた呟きを、切れ切れに洩らしていた。私もまた、彼らと同じような声を出さなければならないのかも知れなかったが、声は出なかった。心臓の鼓動に至っては、

真似る気も起きない程、私のそれとは懸け離れ、静かに研ぎ澄まされていて、一瞬彼らの声が、それに引き替え、私の心臓からは、汚い雑音ばかりが鳴り出すようだ。一瞬彼らの声が、刺々しい細かな粒のような感じに変わったが、それは、出来の悪い心臓を持つ私の耳にだけ、そう聞こえるに違いない。それでも私の唇は動いて、それを、私を囲む四人は、身動き一つせずに正確に見て取れて、暫く黙り込んでから、何かの打ち合わせを、ただ目と目を見交わすだけでしてから、私から少しずつ遠ざかり、重なりながら姿を消そうとするのだった。

　私の他に、一人だけが、姿を消しそうになかった。四人とはまた別の人で、独りだけ腰を下ろしていて、私とだけは似ていたが、四人とは似ておらず、誰が何処へ行こうと、その人だけは最後まで残るしかなさそうだった。その人が、私が拾わなければならない石を拾って、そこに置いたのだし、私や他の者達を呼び集めたに違いなかった。その拾われた石が、はっきりと見えた。私は、立ってこそいたが、その人の側に、ぴったり寄り添っていて、二人で石を見詰めていた。石は、確かに息をしていて、それに合わせて揺れていた。息は、少しムラがあっても強く鋭く吐かれて、その息の強さを、私達二人に見せ付けようとでもするのか、その身を無理にも揺らすようだった。寄り添う人の顔を覗くと、その肌の奥までを染め抜いているのは、僅かな温かみの、冷たく乾き果てそうに纏わり続けるもののようだった。そしてそれは、石の色にも似て見えて

いるのだと、思えて仕方なかった。一体それは何なのか。なぜその人の顔が、そのようなものに似るのか。それについて、直ぐにもはっきりした答えを見付けなければならなかったが、考えは何処にも辿り着かず、徒に切羽詰まるだけだった。それは、私によって拾われなければならなかった石について知るのと、何処かで繋がっているに違いない。そしてそうであるなら、その顔についても、見失おうとするしかないのか。

　それでも恐らくは、何かを知ろうとするために、私は、その人を離れ、石の向こう側へ回り込もうとでもしていた。そうしながらも私は、その人の顔を覗き込むままで、その覗き込む中に、その人の顔を見失ったのかも知れない。身を揺らす石は、回り込もうとする私の喉元辺りに向かって、温く汚れた水の脹らんで流れて来るように、その形を伸ばして来た。その先端の表面は、一つ一つそっと抓んでみたくなる程に細かく分かれ、カサカサに乾いてポロポロと零れそうだったが、汚れ一つなく真っ白だった。私の目の前で、それもまた左右に揺れた。何処か弱々しげで、私に、手に取って欲しいかのようだった。布の擦れるような、石の息の音が聞こえて来て、その音を頼りに、石の先から更に奥へと回り込めた。そうして、行き止まりの狭い所に、石の方を向いて真っ直ぐに立つと、背骨の上から下までが、重力の向きと寸分の狂いもなく垂直で、私の胴体も、天と地を貫くものに含まれているのだと感じ取れた。身を細かく

揺らして横たわる石を、透き通るような壁を背にして、斜め横から見下ろしていた。

　伸ばされた石の端は、こちらからは遠い側になって、向こうを向いている。そしてそれを、見失われたままの顔の人が、手に掴んで引き寄せた白く柔らかそうな布で、覆い隠そうとしていた。その人の手は、石の端を向いてはいなくて、なぜか僅かに上を向くのだった。ここが壁に閉ざされた部屋であるにしても、その手の向く方にだけは、壁は立ち塞がってはいないのかも知れなかった。その手を照らす光りも、私を人の姿に見せる灯りとは別のものかも知れなかった。そして、壁の替わりに何があって、何処からの光りがその手に届いているのかを、私は決して、見て取ろうとさえしてはいけないのだと分かった。その人と私が似ていたとしても、それは、その人だけが見て取ろうと出来る秘密に違いなかった。その手から白い布の端が滑り落ち、揺れる石の端が隠されると、その手の、翻されるゆっくりした動きは、あらゆる向きからの羽のように軽そうな光りに晒されるようだった。壁は全て吹き払われたかのようだった。しかし、そう私の目に映るのは、それに乗じて私が、透き通るような壁の向こうの、また別のもう少し明るい灯りで夜の闇を退けている、ここよりも広く、更に別の空間へと通じる部屋へと、自らの身を放り込みたいからではないか。そして、その部屋で黙って仕事をしている手近な誰かを掴まえて、その着ている物を剥

ぎ取り、その者に成り済ましたいからではないか。その剥ぎ取った衣服と肌を剥き出した肉体は、何と若々しい匂いを立てて捩れようとするのだろう。その匂いの後ろに走り込めば、私はもう、二度とここを振り返らず、ただ騒がしく見通しの利かない欲得ずくのあれやこれやの中に、また紛れ込んで行けるだろうか。そんな私の姿を追って行く、自らの目付きの醜さと危うさを、振り払おうとしていると、白い布の上のその人の手は、少しも動いていなかった。替わりに、紙のように薄く透き通った幅の広い刃物が、波打ちながら、私の喉元を、繰り返し掠めるようだったが、それらしきものを見て取れたのでも、その唸る音を聞き取れたのでもない。それなのにそれは、部屋いっぱいに振り回され、私の体を後ろの壁に押し付けた。

　そんな中に、見失われたその人の顔が、また見出された。それはまるで、その上に石の影の落ちている石のようではないか。そして、部屋いっぱいに振り回される透き通った刃物は、その石の影から滲み出る尖った小さな艶のような、その人の釣り上がった両の目ではないのか。いや、そんな妙な考えに、捕らわれていてはいけない。微睡みへの誘惑を、自らに仕掛けているようなものだ。そんな事が通用する時ではない。そんな考えはどうしても振り切らなければならないが、そう出来たかどうかを、どうして知れるだろう。たとえその顔が、石の影の落ちている石のようであっても、その影を落とす石そのものでさえな

ければ良いのだと、決め込んでしまおうか。そして、その人の両の目は、その奥にまで、その石の影が差し込むせいで虚ろに見えて、その虚ろな中を波打つ刃先のような鋭さを、私がただ徒に恐れただけだと、決め込んでしまおうか。しかし、そう決め込むしかない私こそ、独楽のようにクルクル回って、後ろの壁と同じに透き通って、その壁の色の中に姿を溶かし込ませなければ、ここに居てはいけない者ではないだろうか。勿論、そんな事は出来ない。だからこそ私は、ここに居なければならない。そんな私が助けを求められるとすれば、私の目の前で、温く汚れた水の脹らもうとするように、息をして身を揺らす、真っ白な石の姿の他にはあり得ない。

逆にその石こそ、私に助けを求めている。そうであるからこそ、私からも、その石の姿に助けを求めようと出来る。そう気付いて、直ぐ手の届く所にある石の縁を、撫でずにはいられなくなった。そのやや角張って丸い縁だけは、白く柔らかい布から食み出ていた。石の表面は、微かに濡れて、掌にそっと張り付いて来る。思った通り、それは温みを持っていた。その湿り気と温みを掌に移し取ろうと、暫く掌を押し付けていたが、その湿り気と温みは、直に掌をそこから離れさせ、二度とそれを触れられなくさせるようだった。血の通う掌が触れて良いのは恐らく、それよりも必ず、熱いか冷たいか、乾いているか濡れているかしなければならないのかも知れない。いや、もっと数限りない条件が

あるのだ。それらどの条件にも当て嵌まらない、あってはならない感触を、掌は移し取ってしまって、それは何時までも掌に残りそうだったし、残っても欲しかった。

その自らの掌に押し返されて、私の体は後退っていた。何か短く話し掛けられ、それに何か短く応えていた。その一人しかいない話し相手のその人の顔は、もう石のようではなかった。顔の表面は、鏡のようで、つい今まで、その面と向かっていた石の肌理が、そこに映り込んでいたに違いなく、その替わりに今は、私の姿が映ろうとしていた。それを知ってか知らずか、顔は僅かに背けられた。そうして顔は何も映さなくなった。いや、その上っ面に映らなくなっただけで、それで却って、その人の顔色そのものを映していないだろうか。その顔色が、つまり、何も映さない鏡のようなのだ。私が拾わなければならない石を、その人が拾わなければならなかったばかりに、そうなってしまったのは明らかではないか。他に何があるのか。いやそれとも、ただ私がその石を拾わなかっただけで、そうなってしまったのか。しかし、私が拾わなければその人が拾うしかないのであれば、私がその人に石を拾うように仕向けたのであって、それこそが、その人の顔色を、何も映さない鏡にしてしまったのか。それともそうでさえなくて、石が拾われなければならなくなっている事だけが、他の一切に先立って力を振るったのであって、私の振る舞いなどは、後で取って付け

れば済むようなものだろうか。どの途、私が石を拾わなければならないのなら、私は、その石のための、ただの付き物に過ぎないようでもある。

　その人の顔だけではなく、部屋の中の全てが、何も映さない鏡で覆い尽くされていた。ただ私と石だけが違っていて、私が鏡のこちら側にいるとしたら、石はその向こう側だった。或いは、私にそう分からせるために、部屋中が何も映さない鏡になるのかも知れない。そうであるなら、その人の顔色が、私にそう分からせようとしている訳だ。そしてそのせいで、私の全身を、私を取り囲む鏡よりもずっと、決して何も映そうとしない鏡に見せていた。見せているだけではなく、元々そうである私の姿を、隅々まで暴き立てていないだろうか。いや、何も映そうとしない鏡を、鏡と呼べる筈もない。それは、上っ面を何も映さない鏡のように塗り固めた、鏡の振りをするだけのものであり、そんな私の姿が暴かれたのだ。一方、この部屋でただ一つ、その身を揺らす石だけが、鏡とは決して何の係わりもないものに見えた。それもただそう見えるのではなく、そのようなその石の元々の姿が、何も映さない鏡によって、隅なく剥き出しにされているのに違いない。鏡によって剥き出されながら、その石の姿は、鏡によって守られてもいて、私だけが、その鏡の外に押し出されていた。或いは、何も映さない鏡は、私から、石を守ろうとしているのではないか。私の他に、石でも鏡でもないものは、ここには何もないのだから。そうして石は、そ

の置かれるべき所に、独りで置かれているのではなくなった。それは、私と一対になってだけ、そこにあり得た。

　しかし、その石は、一体どのようなものか。部屋中の鏡は、もう何も映さない。石を映し出そうと出来るのは、たとえ鏡より更に何も映し出せないと分かっていても、鏡の振りをする私しかいない。私がそう思うだけで、何も映さない部屋中の鏡は、私を石に近付けていた。私が近付く程、石は、鏡によって堅く守られるようだった。或いは、それがいけなかったのかも知れない。石が見えなくなった。と言うより、石と見えていたものは、少しも変わらず身を揺らすままだが、なぜそれが石なのか、分からなくなった。石など、何処にもない。この部屋にないだけでなく、私の知っている世界の何処を探してもないだろう。あるとすれば、石などないとしつつも、石を探そうとし、それを見付けて、石が何であるかを問おうとしている私こそが、石のようではないか。何処にもない石なら、初めからそれは何ものでもなく、その欠片も見付からない筈なのに、それを「石」と言い表し、改めて何処にもないと言い直す者こそが、石に係わる者であり、他には石は表わされようがないなら、その者自らが、石と成り、石であるしかない。少なくとも、そう受け入れるしかない。そうして再び見えてきたかも知れないその石を、私は、より確かなものにしようと、静かに拾い上げようとし、拾い上げた振りをした。役割を終えたように、鏡は、私の周り

から跡形なく退いた。それに替わって、石の置かれるべき所だけがあり、拾った石は、元々そこから生まれて来て、全く汚されていないかのように、すんなりそこに置かれたので、辺りは、そのただ一つの石で満ちて、そこに宙に浮くようにぴたりと収まるのは、その等身像であるかのような私だった。

　すると、そこには何も置かれていないように見えたが、それが石であり、石だけがあり、石は石を映していた。映された石は何ものでもなかったが、そのように石に映される事によって、石になっていた。そして、そうして石になったものだけが、石だった。そんな厄介なものに、誰が触れようとするだろうか。

　空を掴もうとするばかりの白く痩せた片腕だけが、その満ちた石の中へと突き立てられていた。それは、ずっとそうしていたのだ。身を揺らして横たわる者の腕だった。空を掴みたい筈もないが、石の中には何もない。私は、石が何であるかを、知れたように思えた。石とは、その身を揺らす者の望みに一切応えようとせず、空っぽである程、そこにのし掛かって行く重みではないか。それに圧し潰されそうなその身は、そのために設えられた限られた狭い所で、藻掻き続けるしかない。それでも腕を突き上げるのは、そこがただ空っぽなのではなく、彼の望みに応えようとする何ものかが、必ずそこにある事を、空っぽな石のために、証し立てようとしているからに違いない。にも拘わらず、それに応えようとしないからこそ、石は石であるしかない。それを変えられるのは、

私しかいない。いや或いは、望みを捨てようとしない身を揺らす者こそ、石を変えられるただ一人の者で、私は飽くまでそれに抗って、石を石のままにしようとしていないだろうか。石のままどころか、私はずっと、身を揺らす者をも、石にしてしまおうとして来たではないか。それを、その石として置かれるべき所に置こうとするのは、石としての私の望むところで、それに抗うためにこそ、横たわる者の身は、揺らされるのではないか。

　私から見る限り、二人で一つの石なのだ。一方は、それに為す術なく空っぽで居続けようと立ち尽くし、もう一方は、ただ見下ろされて、空っぽが決して空っぽのままであり得ないのを望みながら、何一つ得られないでいる。二人は、こんな所に来て、二人切りで何をしようとしているのか。少なくとも、為す術ない私は、何をしたいのだろう。ずっとこの二人のまま、ここにこうして居続けられれば、恐らく私は、他に何を望む事もない。一方、私に見下ろされるだけの者は、明らかに、私がそれとは別の事を望むのを、待っているに違いない。別の事とは、私が空っぽで居続けるのを已める事でしかないだろう。しかし私は、たってと願って、自ら空っぽになったのではなかったか。そのためにだけ、様々なものに背を向け、私に授けられた力を、残りなく注ぎ込んだのだ。そうして私は、その私の体から抉り出したもの全てを、辱められた汚れた物として、闇夜の空の向こうにでも委ねた筈だ。他に私に何が出来ただろう。

　その辱められた汚れた物に、私が見下ろしている者の姿は、そっくりだった。自ら抉り出した物に、仕返しでもされているようだ。それでも、もう決して目を逸らせないと分かっていた私は、それならと、却ってそれを、あからさまに目の奥に映し取ろうとするしかなかった。しかしそれは、そうしていれば、その内にそれを、闇に委ねてしまえると、私の体から汚物を抉り出した先の経験から、学んでいたからだ。ずっとこの二人のままでは居られない、その覚悟を少しずつ決めていた私には、そのようにして、見下ろす者を捨ててしまおうとするしかなかった。ただ眺めてさえいれば、目は、愈愈それを忘れ難く事細かに描き出し、遂にはそれは、一個の汚物となって抉り取られ、吐き出されるように、ここからは見えない何処かへと、捨て去られるだろう。私もまた、待つだけだった。それは、見下ろされる者が待つのを已めるのを、待つ事だった。それでよいのか、と私は、何度も問うていただろうか。そうかも知れない。但し、決して待つ事を已めずに。

　それでも尚、二人で一つの石なのだろうか。私が眺めなければならないのは、片方ではなく、二人揃っての、対になった姿ではないのか。しかし、それなら私は、二人を、一纏めに汚物として捨ててしまいたいのか。それも、そうかも知れない。しかしそんな事は、叶う筈はない。今、捨てられようとされているのは一人で、残るもう一人、私が、それを捨てるのだ。それこそが、私がここ

で知らなければならない事で、それを知らされるために、私はここへ呼び出されれ、離れ離れになるしかない。二人は、それぞれに辱められ、汚物となって、互いの前から姿を消すしかない。石など初めから何処にもなかったし、私に見下ろされる者は、それをただ私に伝えようとする姿しか、最早、私に見せる事を許されてはいない。だからこそ、私は、私一人を救い出すために、拾わなければならない石などを独りで思い描き、それを独りで拾おうと身構えなければならなかったし、そのようにして、私に救えたかも知れないもう一人を、救おうともしなかった。そうして私は、誰も救えなかった。私の体の中にまた、抉り出した筈の辱められた物共が、圧し戻されているのが分かった。それは、私の知りようもない、闇夜の空の向こうに満ちていたであろう汚れに塗れてしまっていて、再びそれを私の中から抉り出そうとするには、それは途方もなく捉え難そうで、それによって私は、闇夜の向こう側からも、辱められなければならないに違いなかった。

　それでも、見下ろされる者は、身を揺らすのを已めない。今更、私がどうであったところで、何の係わりも及ばない。それなら私にはもう、その者の姿は、手に取るまでもない何処にでも転がっていそうな石と、同じなのではないか。どうなる訳でもないと分かってはいたが、それを確かめずにはいられなかったのか、私は、身を屈めようとした。見下ろすのを已めて、それと同じ目線にな

れば、何か見付かるかも知れない。それで、身を揺らす者とぴったり真正面に向き合える位置を探していると、石が、私に眼差しを向けた。私は、身を屈めようとも出来なくなった。石は、直ぐ側に私が居るのに気付いたのか。その眼差しは、見知っている私の姿がいきなり現れて、それを直ぐには信じられず、その真偽を探るようでもあり、私とは分からず全く見知らぬながらも、何かの繋がりを持つ者の姿を探るようでもあった。ただ、眼差しの眺めているのが、その見知っている私だと認めているにしても、その私の姿は、何処かしら謎めいているらしかった。眼差しは、その謎を追って、謎を解こうとしていた。そして、直ぐ次の瞬間に、それは行き止まったのかどうか。謎が晴れ、そこに、確かな私の姿を捉えたのかどうか。それを私は、棒のように立ち尽くし、身を硬くして、何も見ていないし何も感じてもいないかのように、上から静かに見返すばかりだった。

応えようとも出来ただろうか。出来たなら、私達は今ここで、こんな向き合い方をしていない。私の姿を捉えたかも知れないその眼差しの、その晴らされた謎の更に奥まで進もうとする僅かな煌めきの、私に向けて投げ掛けられようとするのを、私は、自らの瞼をわざと重くし、決して動じない、強く冷たい淀んだような眼差しで応じ、私に係わろうとする、最後かも知れないその眼差しの動き掛けるのを、容赦なく封じた。訳ない事だった。石の眼差しは、直ぐに

弱々しく背けられ、石はまた、私の及ばない所へと、愈愈ただ一人だけの戦いへと、赴かなければならないようだった。石の眼差しを、私がはっきりと拒んだ事だけが残った。その私には、何処にも赴くべき所がない。それはしかし、私の方こそが、その眼差しによって、とことん容赦なく拒まれた証しではないか。私の眼差しは、放り捨てられ曇るばかりで動きが取れず、一方、私を拒んだ石の眼差しは、そんな私など疾っくに置き去りにして、その眼差しだけが飛び過ぎて行けるずっと彼方に、向けられていないだろうか。ただ、私に知らされたのは、その遠過ぎる眼差しの、余りに軽々とした、余りの冷たさだった。その冷たさは、私を救えたかも知れない時が絶えたのを、繰り返し繰り返し、ただ示そうとしていた。それでもまだ私は、二度と甦らないその時を、幾ら虚しかろうと求めようと出来る、ささやかな愚かさを頼りにも出来た。しかし、その軽過ぎる冷たさを追い始めたかも知れない私の眼差しは、吹き払われる小さな羽よりも弱々しく、途端に背けられ、くるりと向きを変えて真っ直ぐに戻されて来るしかない。見下ろされるままの石は、その強く吐かれる息に合わせて、変わらずに身を揺らすばかりだった。

　私はまた、似たような遣り方で、僅かに違う色合いの石でも探し始めていただろうか。しかしもう、赴くべき所のない私なのだ。石の幻は二度とそれらしき像を結ばず、それに代われるものも現れず、まだ残っているらしい時を、ど

う遣り過ごそうにも叶わず、忘れられる限り、時のなかなか終わりの来ないのを、忘れてしまおうとしていたに違いない。（二〇〇四年二月十四日）

*　　*　　*

（男は居なかったが、その男の母親からの手紙が…）

男は居なかったが、その男の母親からの手紙が、楕円の傾いた白い板の上に拡げられていて、文面によれば、その母親は、人前では犬としか口を利かず、それを繰り返し息子に自慢していた。それを読んでしまっては、目を塞がれたような閉じ込められた気分で、庭へ走り出さずにはいられない。どちらが庭かは見えて来ないが、走り出してしまえば、そちらに向かってはいるし、どんな庭かも分かる。分厚く丸っこいざらざらした石の勾配のある壁に隔てられて、側を通っても誰も壁の向こうが庭だと気付かない。その庭について知ったのは、仲間に殺められた男が、最期にその出自の秘密を打ち明けたからだ。男の死体を始末出来るのは、男の生まれ故郷のその庭でしかない。もう後には引けない。

砂埃で汚れた死体が一列にずっと並んでいて、その傍らに、それを運んで来た旅姿のままの近親者が、それぞれ一人ずつ傅いていた。互いに口を利いてはいけない筈なのに、彼らは平気な顔で喋っている。その最後尾に付いて、秘密を打ち明けた男の死体を置き、何時から待っているのか隣に尋ねると、答えは、百年前からで、何故なら、この壁は百年は経っている。百年前は、見事に角張った磨かれた石の壁だった。それなら俺達は、殆ど壁の一部のようなものだな、と誰かが言ったかも知れない。その声の反対側から、ガサガサと音がした。そこは壁の一箇所だけ崩れて窪んだ所で、棘のある厚い葉の生け垣で塞がれ、痩せた色黒の裸の男が潜り抜けて来て、掲げた黄色い布に火を付けた。薄い青い炎が移ったが、それは、橙色の火花をパチパチと弾かせるだけで、布の縁からなかなか拡がらない。列の者達が誰も口を噤み、その炎を見詰めた。一番近くの死体の顔が紫色に映えて、蝋のように溶け出しそうだ。いきなり裸の男が身を翻し、黄色い布も裏返ると、布の裏はすっかり火が回り、赤くドロリとした絵の具を塗り込めたようで、灰色の裏地の上を細かくクネクネと舐め回り、行き場を探しているようだった。

　涙を流さないのか、と壁の向こうの何人かの弾んだ声が言った。涙とは何だったろう。已みそうで已まない笑い声の事か。一斉に潜めるような笑い声が起こって、止まらなくなった。それも壁の向こうからだったが、初めの弾んだ声

とは、壁で隔てられていないだろうか。すると、涙の事など、誰も言わなかったと分かった。黙って死体を布でくるめ、と言われたのだ。ただ私だけが。確かに他の死体は、どれも黄色い布で全身を覆われていて、事情を知らない者には、それが死体だとは分からないだろう。布を忘れたと呟くと、そう言い終わらない内に、列の一番前まで引っ張り出されそうになった。抗おうとする私の手にはもう、与えられた黄色い布の端が握られていて、転げそうになるような体勢で、それで男の死体をぐるぐると覆った。何人もの笑い声を聞いたように思えた。馬鹿げた事をしている私を笑うのか。それとも私の辿々しい手付きを笑うのか。いや、ぐるぐる巻きにされる死体への嘲りなのではないか。百年なんて、あっという間だ。百年前の壁も、磨かれてなんかいなかった。ずっと変わらず、今と同じにざらざらと古びていた。だから死体は侮られるのだ。お前一人が詰まらない夢を見ているんだな。いやいや、死体に言っているんだぞ。なあ、そうだろう。壁の向こうで、笑い声の数が、どんどん増して行って波打ち、壁を追い越すのが分かった。笑いに加わりたくはないが、確かに、あっという間の百年を前をすると、時間の中に取り残されて動こうともしない死体は、幾らか滑稽ではあり、笑いに包まれる方が座りが良さそうにも見えた。

　しかし、笑うような奴らは、どうせ通りすがりのお気楽な余所者だ。この辺りの連中なら、一日中、犬のように黙りこくっている筈だ。黙りこくったまま、

姿も見せない。姿を見せるとしたら、全身を黒く塗り、黒い尻尾を付け、犬そっくりの小さな真ん丸の目と濡れた鼻で、四つん這いで怖ず怖ずと現れるに違いない。それで犬と見分けが付かないなら、本当に犬かも知れない。身を翻した瘦せた色黒の裸の男は、四つん這いになって、私が死体をぐるぐる巻きにした黄色い布の端を銜え、後ろ向きに棘のある厚い葉の生け垣に入り込もうとしていた。紛れもなく、ここら辺りの人間だ。安心して付いて行ける。生け垣を掻き分けると、後ろから、点呼する男女の声が聞こえた。死体に傅く者達が、私抜きの列を組み直しているのだ。或いは、新入りも何人か加わっただろうか。一列でなく、一列が二列、二列が四列と、扇のように拡がりながら、何処までも延びて行く気配だった。その差配を任された赤くドロリとした炎が、人の姿を真似て、解き放たれたように踊り回るだろうか。列が何処までも続くなら、踊る炎はもう、壁から遙か遠ざかっているだろう。

　見掛けより深い生け垣は、壁の厚みの更に奥まで続く。生け垣ではなく、棘のある厚い葉の低い木がずっと密生している。そのくねくねした細い枝に手足を取られて動けないが、それは私ではなく、黄色い布を銜えた犬そっくりの瘦せた男の方で、私は枝と一緒になって、その男を押さえ付けている。男が唾だらけの口をだらりと開き、替わりに私が黄色い布の端を銜えると、逆に男の方が、私を押さえ付けようと、黒い体を起こして来た。重なる葉と葉の間に隠さ

れていたらしい沢山の小石が、その体に降り懸かり、その重みによって開かれた枝と枝の隙間に身を滑らせた私は、布を巻いた死体と共に、やっと生け垣から抜け出せた。男の体は小石の下にすっかり埋もれた。蹴ると、黒く短い毛に覆われた、犬の細長い腹が剥き出された。やはり百年が経っていた。百年前に、葉と葉の間にせっせと小石を潜ませた者を探せ。などと誰かに命令した積もりになって、私は身を翻した。

　何度塗り直せば気が済むんだ。どれだけ塗り直しても、汚れは誤魔化せないぞ。百年前まで見通せる目にはな。お前らが汚れてるんだ。汚れてる者らに汚れが消せる訳がないが、どうやら、木で出来た人形共に話し掛けているのかも知れない。動く度にカラカラと音を立てる連中だ。他の場所とは違う。管理する者が居る筈だ。母親からの手紙で頭が一杯で、仕事をほったらかしてるな。いや、私に全て任されているらしい。私の言葉に聞く耳を持つ者など一人も居ないのだから。先ず布を全て剥がした。死んだばかりのような綺麗な体だ。他が皆、百年前でも、死体だけは、抱けばこちらの冷えた体を暖めてくれて、節々の強ばりを解してくれそうな程に新しい。剥がした布を焼く火を探さなければ。仰ぎ見さえすれば、都合良く火が降って来そうだが、地面ばかりを見続けるしかないのは、目を離した隙に、天地がひっくり返って、足を掬われそうな気がするからだ。そのせいでか、地面は凍り付いた。その凍った表面は、笑っ

ているようだった。死体を。笑うんなら私を…、いや。

　笑うんなら連中を笑え、無能な木偶人形共を。代わりに私が笑ってやろうか。しかし、どうやって。笑い方など疾っくに忘れた筈だ。仕方なく掌を見ると、小さくて透き通るように白い。まだ何も分からない子供の手だ。道理で。あんな密生した棘だらけの生け垣を擦り抜けられるのは犬と子供くらいで、あの長い列の中に、子供は私の他に居なかった。込み上げる笑いは、笑いにならず、喉に小さな石を詰まらせたように咳き込むばかりで、子供である事にただただだ嫌気が差す。それでも、笑えない笑いだけは残りそうなら、それが許せなくて、これから一切を放り出せないのだろう。死体は少しずつ汚れて行く。時間との戦いが始まっている。どうしたら終わらせられるのか。火だ、火だ。勿論、死体を焼くのは許されていない。死体に触れさせて、火を穢してはならない。よくは知らないが、多分古くからの教えだ。それで、物事が分からなくても許される子供の私が選ばれたのか、初めから仕組まれていたとすれば。考え過ぎだろうか。その私の考えなど及びも付かず、死体こそ、どう仕様もない程に、考え過ぎているように見える。きっと生きているだけではどうにも考え切れなくなって、それで思い余って死ぬのだ。死ねば、生きるままでは決して叶わない程に、幾ら考え抜いても、その際限まで行き当たらずに済む。それで、何時まで経っても何処へも戻れないのだろう。しかしそれこそ死ぬ者の望みであり、掛

け替えのない死の魅力であるに違いない。やっと笑えたか。いや、とんでもない。笑わずに済んだのだ。笑ってしまった後にか。そうかも知れない。誰とも口を利かないのは正しい。それなら、死体を汚すままなのも正しいが、為すに任せる訳にもいかない。木偶人形共が動き回るせいだ。それなら犬を探せ。凍った地面の下に埋まっているのが見えただろう、さっきまではな。何処を見ているのだ。何処を見ているのか探り当てようと、キョロキョロ見回す羽目に陥っているらしい。酷くなる一方で、首の骨がグニャグニャになりそうだ。

死体の顔が、歯を見せて笑い始めた。考え過ぎるのに飽きたのなら、死体には不本意でも、それはそれで喜ばしい（しかし誰にとって？）。庭の景色が、ぐっと身近になったじゃないか。木偶人形共のやってる事も、そうは苦でなくなった。時の経つのに、ビクつかずにも済んでいる。掌を見直すと、小さな赤いブツブツが幾つも出来ていて、それぞれが、溢れる間際の涙のように細かく震えた。死に顔の笑いを、掌に掬い取ったのか。いや、そうするように促されているのだ。二枚の薄っぺらな掌は、柔らかい蝋のようで、蝋細工の死に顔なら、その掌にも掬い取れたと見せ掛けられよう。重なり合う掌が反り返ると、暗い空に向かって笑うようだった。ずっと遠くから高い所を舞って来た、一枚の花びらのようにも見える。月足らずで生まれて来たのは、花盛りに、間に合わせたかったからなのだ。女の腹の中の居心地より、まだ肌寒い花の景色の方

に惹かれたんだな。などと、死んだ男の言葉が思い出された。その光りと風は、赤ん坊の男の肌を容赦なく傷めただろう。若い頃からこの死に顔と同じに皺くちゃの男の顔は、その皺だけで、花の季節を愛でて来たのだ。重なる掌から弾け出た右の小指が、死に顔の鼻先を掠め、そこに起こる小さな風に吹き曝されるようで、寒気が襲った。凍った地面が透き通り、上を向いた黒い犬のぺちゃんこの小さな顔が現れた。その瞳に映る暗い空に舞う、チカチカした小さな無数の輝きは、瞳の中ばかりでなく、黒光りする犬の顔の毛並みにも艶々と映って揺れる。振り仰げば、火だ。間違いない。

　その火は、庭の中では、硬い木で出来た操り人形の姿をしている。火であるからには、その熱が、どのようにか人形の動きに吹き込まれなければならない。熱は、何処から来るのか。それこそが、この庭の秘密でないとしたら、死んだ者を前にしては、私の熱が際限なく奪われるしかない。しかし私が熱を捧げる事は、口を利くよりずっとここでは重い罪で、あり得よう筈はない。熱病に冒されたように、口から赤い舌が出て息が上がり、苦し紛れに、両腕を伸ばして死体を押し遣ると、それは独りでにスルスルと離れて行く。凍った地面が、鏡のように磨かれたようで、少し先の浅い窪みで、死体は、向きを変えながら止まった。向きを変えたのは、私が二度と、それに近付けないのを知らせるためにも見える。水が欲しい。飲みたいのか、体に塗りたいのか、その中を泳ぎ回

りたいのか分からないまま、私は、熱を込めるように硬く握った拳を、その場に繰り返し叩き付けた。凍った地面を割ってしか、水は得られない。死に顔の笑いが、寝惚けたような顔付きになっていて、更にそれは、寝惚けている事に自ら戸惑い、狼狽えるような表情に変わろうとするらしかった。それは、私の地面を打つ拳の振動が、その顔の皮膚を震わせるせいなのか。私には聞こえないが、その振動で、庭の隅々までが、どのようにか響き渡るらしい。耳を塞ぐような素振りの木偶人形共が、その響きの元凶が男の死体であるかのように、その周りに集まり出し、やがて、湿った音を籠もらせて、互いの身を激しく擦り合わせた。死体は、それらの中に、すっかり隠されてしまった。

　独りではなかった。私と同じように、木偶人形共に囲まれたそれぞれの死体を、少し離れた所から眺める者達が、庭の中に幾らでも居た。ただ誰も、拳で地面を打ったりはしていない。直ぐに拳を解いた。庭中を響かせているのは、庭そのものの震えに因るらしい。何の力もない私が、水を求めるなど、まるで恥ずべき事だ。待てと言われた犬のように大人しく這い蹲って、体を休めていられるだけ有り難く思うべきだ。手こずっているのか、人形共の顔が歪んで来た。そう言えば、し忘れた事を思い出した。死体を庭に委ねる前に、その口の中に食い物を押し込んで置くよう、死に際の男本人から頼まれていた。そのために、林檎を一個、ポケットに入れて来たのに忘れていた。それで、死体は、

人形共に抗っているに違いない。抗うために、死体は息を吹き返していないだろうか。項垂れた首を捻って、片耳を地面に付けると、怖ず怖ずとしたその息吹が、地中から聞き取れた。耳に流れ込んだその音は、私の頭蓋骨をぬるぬると撫でさすり、次第に角を取って、私の頭蓋骨を、一個のすべすべした球にして、更にその球をどんどん磨き込んで、仕舞いには、掌の乗る程の小さなものにしそうだが、勿論、それではあべこべだ。そのように骨が磨かれなければならないのは、死んだ男の方だろう。息の根は、直ぐに聞き取れなくなった。まだ死んだままだろう男は、次の息を継ぎたがっているに違いないが、何かが足らない。

　死体に向かって躄り寄ろうとしたが、案の定、私の体は、あらぬ方に滑って、死体の周りを巡るしかないが、私は独りではなかった。私は何人も居た。数えれば数えただけ私の数は増えて切りがなく、数えるだけ無駄だった。どの私も、同じようにそれぞれの木偶人形共に囲まれた死体を見詰め、その周りを虚しく巡っていた。深く息を吸って、その最も深く息を吸った私を、一人だけの私に定めようとしたが、どの私も、まるで息が吸えない。息は何処へ行ったのか。地面に唇を押し付けて、チューチューと吸った。地面は、生温い苦い味の硬い石で、石の蒸気が、音を立てんばかりに噴き出ていて、私は噎せ返った。壁に囲まれ風もない庭の中は、すっかりその蒸気に充たされているに違いない。そ

れが私の冷え切った体に入れば、水滴のように固まる小石となって、肺はもう、それらの小石で一杯なのではないか。小石を全て吐くしかないが、吐けたとしても、どの私も、ただ石の詰まっていた皮袋でしかなくなって、私かどうかも見分けられなくなってしまうに違いない。死んだ男にしても、石の蒸気ばかり吸わされるのでは、却って息が詰まるだろう。その男は、木偶人形共を打ち払っていた。或いは、人形共に操られているだけか。そうしてまた目に出来た死体は、色艶も良く、ふっくらとしていたが、皮や肉があちこちで破れ、紫色に汚れた骨が剥き出されていた。人形共は、その骨の汚れが耐え難いかのように、段々と直に死体に係わるのを已め、死体を取り巻いて、石の蒸気に紛れるように、輪郭だけの揺らめく姿になった。

　水が求められているのが、痛い程分かった。庭に水を撒けば、石の蒸気ではなく水蒸気が立ち昇り、甦ろうとする者は息が継げるのだ。それが駄目なら、息を詰まらせて、死に直すしかない。私にはどうにも出来ないが、それについて、別に引け目は感じなかった。少しずつ石の匂いが薄れ、木の芽の匂いが拡がった。それは、私の肺に詰まった小石を溶かして、私に新しい息を吸わせたが、男の方には、その同じ効き目は全くなさそうだ。それは、男との最後の別れの時が近いのを、私に告げているに違いない。死に顔を覗き込もうとしても、もう何も見えては来ない。代わりに、痩せた黒い犬が、覗き込んでいるらしい。

私の吸う息は、木の芽の匂いに満たされていなければならなかった。微かに石の匂いが混じっただけで、息が詰まる。遠巻きの木偶人形の輪郭は、石の蒸気と練り合わされて、すっかり炎の形になっていた。そして私が息を詰まらせる度に、それは更に、尖った嘴を死体に向けて振り下ろす灰色の鳥の姿へと形を変えて行き、その目が一斉に見開かれると、群がって、死体のふっくらとした肉を啄み出した。それを眺める私は、独りだけの私だった。

何を感じ取る間もなく、紫色に汚れた骨の一式が、バラバラに転げるだけになった。その間もじっと動かなかった黒い犬の後ろに回り込んで、右手で犬の腹を撫でながら、犬の覗き込むままの辺りを、後ろから覗き込んだ。頭蓋骨はすっかり剥き出され、幾つかに割れてバラバラにされていても、死に顔だけは、そこにそのまま残されていて、私は、それを左手で掬った。掌に、男の小さな死に顔が浮かび出るままになったが、それは笑い顔でも寝惚け顔でもなく、どんな表情も受け付けない、一枚の薄い皮に、ただそれと分かるだけの目鼻を書き込んだようなものだった。見回すと、庭はさっきまでよりずっと狭く見えた。何人かが、それぞれ運び込んだ死体の黄色い布を剥がしたり、その剥き出しの死体を、少し離れた所から眺めたりしていた。鳥達に啄まれている死肉も見られたが、自ずと目が逸れた。私の傍らの犬は、細い尻尾を低く振り、そちらへとゆっくり駆けた。私は、男の死体を包んでいた黄色い布を拾い上げて、後ろ

を振り返った。壁の崩れて窪んだ所は見付かったが、そこは棘のある厚い葉で塞がれて、通り抜けられる隙間などない。私は、直ぐに目を閉じ、両腕を伸ばして黄色い布を頭の上に掲げたまま、木の芽の少しでも強く匂う方へと、蹌踉めきながらも進もうとした。しかし木の芽はどちらからも匂って、ただ無闇にふらつき回るだけだった。布を焼く熱い火が求められているのは明らかで、それを手に出来ない事に、引け目を感じないではいられなかった。私の体の熱を炎に変えるにはどうすべきか。その答えに行き当たるまでは、行く手を闇に閉ざしたまま、足の向くに任せて闇雲に進むしかないのか。

　その闇にはしかし、小さな孔が幾つも空いていて、その一つ一つの中に、空の彼方まで続くそれぞれの景色を見せ、目を凝らせば凝らしただけ、それらの景色はどんな細かな所までも明らかにされるようで、その細かくなる程、どれも男の死に顔に似て表情を失い、遂には蒸気のように消えようとはするが、更に奥の細かな所に纏わり付くようなまま、決して消えはしない。それを掻き消すには、ポケットの中の林檎の他に頼れるものはなさそうだ。しかし、もう使い途のない林檎こそ、数え切れない程の小さな孔ばかりで出来た塊で、ぼんやりした闇などよりも、死に顔に似たものを、どれ程多く隠して持っているか知れたものではない。それが腐って干涸らびて、林檎の匂いも全く抜けて、何であるか分からなくなるまでは、私は、私を閉じ込めるだけの数知れない孔を持

ち運びながら、庭の中を歩き続けなければならないだろうか。いや、林檎がどうなろうと、孔は孔のままではないのか。林檎が孔の塊なのは、死に顔と同じに、表情を受け付けないものになってしまっているからではないか。そしてそれが、林檎ばかりの事でないとしたら。

　左手を顔に近付けて、そっと目を開け、掌だけを見た。浮かび出る男の死に顔の土色の頬の奥に、林檎の干涸らびて何だか分からなくなったものが、僅かな湿り気を帯びて、静かに含まれているように思えて仕方なかった。そのガサガサと硬い肌に林檎の匂いを僅かでも嗅ぎ取りたかったが、辺りの強い木の芽の匂いばかりが、酸っぱさを増して行く。もう用なしの私は、疾っくに庭から外へ追い払われてしまっていないだろうか。掌の死に顔から目を離す替わりに、再び目を閉じた。（二〇〇四年七月二十四日）

*　*　*

（山と積まれた瓦礫だが…）

　山と積まれた瓦礫だが、一つ一つ手に取って馴染むまで撫で回せば、どれも瑕一つない工芸品と見紛って、汚れも汚れでなくなる。硬い尖った三角の羽を付けた小さな虫達が薄暗い中を飛び交い、うるさい羽音は波打つ鎖のように繋がって、それで何かを縛りたいが縛れずに苛立っているようだ。虫の目付きは皆怯えるようで、縛りたいのは、その怯えさせる何かに違いない。今のところは、そいつは何処かで気絶するかどうかしているらしいが、何時目を醒ますとも知れず虫達の焦りを募らせている。瓦礫の山の天辺には、曇った硝子玉を鏤めた銀の椅子が危なっかしく乗っていて、その座面の裂け目を虫達が盛んに出入りする。椅子の背には細長い鏡が斜めに立て掛けられ、虫達は、その鏡の方を向いては、羽を大きく反らして羽ばたきし、彼らが在り来たりのものでないのを誇るかのようだ。虫の数の夥しさからして、巣は、座面の裏を突き破って拡がっていそうだが、椅子の脚の下の底の見えない深い崖が、鏡に青っぽく映っているからには、瓦礫の山の天辺から向こうは綺麗に削られているに違いなく、その削られた瓦礫と一緒に、巣の大半は取り払われてしまったかも知れない。

　手紙には、何処かにあるスイッチを探してそれを捻るか、スイッチがないと分かったらそれを新たに作って目的を遂げるよう、依頼されてある。目的とは、瓦礫の山を何処かに退ける事か、虫の駆除か、それともまた別の事なのか。文

面の下に続く三枚の図が手掛かりだろうが、幾ら睨んでも、円天井の設計図か、そうでないなら大きな楽器の断面図にしか見えない。円天井なら、造る手順を示しているようだし、楽器なら、時代を追って順にそれが複雑になって行った様を示しているだろうか。どちらにしろ、瓦礫や虫の群れとの繋がりを見出せないなら、未だ隠されたままのものを、先ずは探し出さなくてはならない。

一度手に馴染ませたものは、また瓦礫に戻すのは惜しいので、足元に一纏めにした。手を離れても、それらは瓦礫には戻らず工芸品だった。虫達は近寄ろうとせず嫌がるようだった。時間が許すなら、全ての瓦礫を手に取って、ここを工芸品の山に変えられるだろうか。最後の瓦礫が工芸品に変わった瞬間、また全てが瓦礫に戻ってしまいそうにも思えるが、その時はまた、始めから遣り直すものを楽しめそうでもある。ただ、虫達には迷惑だろう。手に馴染んだばかりのものを、試しに瓦礫の天辺の銀の椅子目掛けて抛り投げてみた。途端に、その近くの虫に限らず皆元気をなくし、何とか飛んではいるが、惰性だけで宙を彷徨うようで、羽音は今にも已みそうになった。抛り投げたものが瓦礫に紛れて見分けが付かなくなったにも拘わらず、虫達の元気は戻らず、力尽きたものから瓦礫の上に落ちて、その隙間に転げ込んで行った。そうして、虫の姿が殆ど消えて暫くすると、瓦礫の山は、機の熟すのを待ったかのように、一斉に沸き立つ虫の羽音で震えた。虫達は、隙間の奥に留まるままで羽音ばかりを響か

せた。新しく拾い上げた瓦礫は、工芸品になるどころか手に馴染むのさえ拒み、重い瓦礫のまま、指の何箇所かを深く傷付けた。
　震える瓦礫の山は、崩れて来そうな気配もある。差し招く者が居たので、取り敢えず従おうと足を踏み出すと、瓦礫の山が丸ごと回り舞台に乗せられたように回り出し、後少しで山の裏側の断崖が見える段になって、測ったように止まった。差し招いた者が、目の前で苦情を並べ立てた。山が回ったのではなく、その者に引っ張られた私が、山の端の方へと滑るように回り込んだだけだろう。手紙を見せると、直ぐに苦情は已み、態度が一変し、寛いだ顔付きで、もっとよく見える所を知っているのでそこへ行こうと誘って来た。「お前の家なら断る」と言ったが、彼はただ、「そう言わないで」と言った。そう言っただけで、そこはどちらを向いても彼の家で、どこにも逃げ場はなく、実際、瓦礫の山は、その全体の輪郭までよく見えるようにはなった。しかしどうやら私達は、瓦礫の天辺に乗っているのと同じような銀の椅子に、それぞれ腰を下ろしただけのようだ。
　「これでどう転ぼうと、こっちの負けはない。これまで色々と見て来た限りでは。後は、何を考えたところで愚かなだけで、恐れに身を委ねてしまえば、詰まらない考えなど浮かんでも、巧く纏まらない内に消えている。何も難しい事はない。恐れだけは誰も見捨てないからで、そうしかならないんだから」と、

少し苛立つような笑顔を作り掛けて、棒読みのような早口で彼は言った。そして、ポケットから銀の細い鎖を長々と取り出し、それで自らの膝から下を、楽しそうに丹念に椅子の脚に縛り付けた。同じような銀の椅子が、少し離れた所にもう一脚ある。座面は裂けていない。誰も腰掛けていないし虫が集っている のでもないが、そうしてただ空の椅子としてそこにある事を、その椅子自らが恐れ戦いているようにも見えた。瓦礫の山は震えるままで、それで、羽音の凄まじさに変わりないのは知れたが、ここに届く限りではそれはずっと遠い音に変わっていて、細い煙の一条が、吹き流されるように伝わるだけだった。それでもその細かな音の繫がりは、私の耳には、やはり鎖のようだ。一方、彼は、まるで別のものを見、別のものを聞いていないだろうか。例えば、自らの成し遂げた業績を頭の中で順に並べて悦に入っているようでもあったが、ただそれを彼は、怠れば途端に罰を受ける義務として行っているのかも知れなかった。

彼の足元に落ちた手紙を拾って、図を見直した。円天井でも楽器でもなく、或る規則に従って描かれた、何かの軌道が描かれていると見える。その軌道の上を行くためには、三枚のどの図にも同じ所に記された軌道の中心点が、実際に何処であるかが知れなければならない。彼は、私にやや背を向けるように立ち上がっていて、初めの一歩を踏み出そうと、棒のように体を傾けた。衣服が磨り減っていて、薄い布を通して背中や尻の肌が透けた。椅子に縛り付けて膝

の関節が固められたままなのに、それ程歩き難そうでもない。そうして、真っ直ぐにではなく必ず弧を描いて、黙って辺りを行きつ戻りつする。見習って同じようにすべきか。彼も、中心点を突き止めたいのだ。私としては寧ろ、彼の動きを観察する方が、それを突き止められそうではある。彼の歩いた跡は、図の描く軌道に沿っていないだろうか。足が止まった。その歩いた跡を思い出しながら図を睨んでいると、彼の止まった所が、描かれた中心点に確かに重なる。そこはもう彼の家の外かも知れない。何故ならそこは、瓦礫の山とも、空いたもう一脚の椅子とも、まるで違う方向の、彼の視線の先に何があるか見当も付かない何処かずっと端の方だからだ。時々周りを睨め回すようにはしたが、彼はそこを動かなかった。中心点は定まったとしようか。彼は図に定められた通りの軌道を順に全て歩いて回った。それでさて、手紙の言うスイッチは何処か。何に使うスイッチか。相変わらず手掛かりは一つもない。彼のした事は何の役に立ったのか。

　細長い鏡を肩に担ぐ女の影は、その彼に後ろから近付こうとするのかも知れない。背中の輪郭が似ていて、親族であってもおかしくない。足を滑らせそうになるが、棒のように担いだ鏡で平衡を保つようだ。鏡は青く透き通った。それが蜜であるかのように、尖った三角の羽の虫の群れが、後ろから女に襲い掛かろうとする。その追い着けるようで追い着けないのは、虫達が、細長い鏡に

映る飛び回る自らの姿に、押し返されるせいではないか。虫の数は増え続け、瓦礫の隙間に隠れていたのが全て集まったかの勢いで、まるで宙に浮いて動く虫の山だった。女も、彼に近付いてはいるようでも側まで行けずにいる。それは、女が押し返されるからではなく、止まって見える彼が、実は地面を滑って遠ざかっているかも知れない。時々体を一回転させて周りを眺めるのは、どちらへどれ程動いたか確かめるためではないか。それなら中心点は動くのか。そしてそれは已むを得ない事なのか。それとも中心であり続けるためには、動いていなければならないのか。

　瓦礫に傷付けられた指が疼き出し、放って置けなくなった。何か指に仕事をさせて痛みを紛らしたい。立ち上がり、銀の椅子の背凭れを緊く握って揺すった。そうする内に、座面の真ん中に縦に一本裂け目が出来、中でその裂けた銀と銀の擦り合わさる音が鳴る。何故それが銀の擦れる音に聞こえるのか分からないが、段々と耳に馴染むと、耳の奥が鎖で雁字搦めにされるようで、椅子を揺するのを已めようと思うが、もう手の指は、耳の奥のその音の命令にしか従わないらしい。見直すと、遠くの彼は、どうやら見付けた中心点を後にしたようで、右に左に体を傾けながら、先程よりも大きな弧を描いて歩みを進めており、また何かの軌道の上を行くようだが、手元の図に描かれたのとは、はっきり違っていた。多分、次の段階に入ったのだ。もう幾ら彼を観察しその軌道を

追ったところで、手紙の図だけが頼りの私は、混乱させられるだけだろう。そしてどうやら、彼一人ではなかった。浮いた虫の山に見え隠れする彼に似た体格の男達が、やはり両脚を銀の椅子に縛り付けて、彼のように大きな弧を描いていた。椅子を揺する手が止まったが、銀と銀の擦れる音は、耳の中で鳴り続けた。

　私の耳の奥に硬い石が埋まっていて、銀の音はそれが目当てに違いない。銀の椅子の座面が裂けたように、私の眉間から生え際、更に頭の天辺に向けて縦に裂け目が出来、裂け目の奥に、銀の細い鎖に縛られた棘棘した緑色の光る石が覗いた。私の側に来ていた女の、しゃがみ込んで丸くした体に立て掛けられた細長い鏡に、そんな私の姿が青っぽく映るのだった。目を欺く仕掛けが、鏡に隠されているとも疑えたが、その疑いが更に酷い私の姿を差し招くか知れず、疑う素振りさえ表に出すべきではない。鏡の後ろから、女の丸みを帯びた白い手が伸び、その指が、鏡に映る中で、私の頭の裂け目の縁を撫でた。私は頭を少し揺らして、指をその裂け目に入れ易くした。取り出そうとするのかと思ったが、女の指は、そっと緑の石を抓んで回そうとするらしい。それも回り易いように、私は首を少しだけ逆向きに捻った。女の指は、その腹で石を縛る銀の鎖の凹凸を楽しむように、繰り返し撫でた。ここは男の家でなく、私の家だ。いや、家よりももっとずっと、私にだけ近しい所に違いない。近し過ぎて、却

って見知らぬ所に迷い込んだようでもある程に。

「彼の側に行きたいのでは」と私は、目下の者に気を配るように言って、女に見せる積もりで、鏡に手紙を映した。女の二本の指は、頭の裂け目から抜かれて、三枚の中の一番単純な図に触れた。そしてその図の線を、二本の指を開いて跨ぐようにし、紙から一度も指を離さずに隅から隅までなぞり、その行き着いた中心点で止まった。始めに彼の進んだ軌道であると改めて確かめられはしたが、それは、彼のような行動を促すための、規範となる軌道を示す図などではなく、何かの形を描いたものであり、それを彼は、自らの行くべき軌道と勝手に解釈して、なぞったものではないかとも思えた。女の指が少し複雑な二枚目の図に移るのを待ったが、指は動きそうにない。多分動いてはいけない訳があって、その訳を取り除けるのは、私しかいないらしい。

「あの彼とは偶々行く方向が同じだけで、どちらかと言うと少し迷惑した位です。そしてやっとここまで来られました」と女の声が鏡の後ろからした。こことは、私の所という意味か、それとも女の行こうとした先に偶々私が居合わせるだけか。知りたかったが、こちらから謙るようでそれは尋ねられず、替わりに「あの彼とはどの彼でしょう」と尋ねた。女の二本の指が、水底から浮かぶように図から離れ、また私の頭の裂け目の縁を撫でて来た。一度目はすんなり許したが、二度も指を突っ込まれるのは堪え難い。指の動きに抗って頭を揺

らした。それでも女の指は、泳ぐ魚が急に向きを変えるように裂け目の縁を撫で直して、直ぐに中に滑り込んだ。しかし緑の石を巧く抓めず、裂け目の中は、縺れる女の二本の指に、徒に掻き回されるしかない。恐らくは、石を縛る細い銀の鎖が纏わり着いて、女の指の動きを思うようにさせないのだ。鏡に映っている筈のその様は、女の腕に遮られて見えなくなっていたが、私の頭の中で起こっている事であるなら、それ位の見当は付く。それでも相変わらず、女の体は斜め後ろ向きにしゃがみ込んで、鏡の奥の顔はこちらを向こうとしない。

「あなたにいらして貰おうと来たんです」と女の声は、少し狼狽えるようだった。「私じゃなくて…」と私は直ぐに応えて、それに続けて私の頭の中の事を言おうとしたが、それを言い当てる言葉が見付からなかった。「裂け目の中の銀の鎖に縛られた緑の石が目当てなんだろう」と言えば良さそうだが、それでは、それとは全く別様であるかも知れない頭の中の気配を取り逃がしそうで、思い留まった。「それに取って代わるあなたなのに」と、次の女の声は潜められた。それを追い詰めるように「ではあなたの指の求めるものは？」と私は言ったが直ぐに悔やんだ。その言葉は、鏡に映る姿だけでない私の頭の中の多くの事を、明らかに取り逃がしていた。その問いに答えられてしまっては取り返しが付かないが、女は「それは…、それは…、」と先を続けたげに言ったきり口籠もった。私は機会を逃すものかと「図はまだ二枚ありますよ」と話しを逸

らそうとした。「夢の中でなら」と女の声は、私の言葉を取り消すような強い調子になった。「…思うように言えたでしょう。でもあなたは眠らずにいる。待てるだけは待ったのです。手紙の図をなぞってみて分かりました。あなたは眠るのを自らに禁じていらっしゃる。ただ禁じるだけで、そう出来る筈の事でもないのに。何処でそのような術を…」私の口元が弛んだ。

「笑われますか、そう」と言ったきり声は途絶え、女のもう片方の手が伸びて鏡に映り込んだ。そのとりわけ指先に向けて銀色が映ったが、輝きはなく白さを見紛っただけかも知れない。「あの彼の後を追っていなかったなんて嘘を、どうして吐くんですか。彼に追い着けないと分かってから、偶々目に入った私に狙いを定めたんですよ。それをちゃんと見届けるのに、私は自らの血を流しました」と言って、傷を負った私の両手を鏡に映した。傷は傷に見えないまでに塞がり、その塞がった中の僅かな血の跡も、血であるより何かの汚れに見えた。女が笑う番かも知れない。「あなたは元々西からここへ来たんです」と、女の声はまた潜められた。中心点が何処だか分かった気がした。そんな気がするままずっと、ただ足の向くままに進んで何時か足が止まれば、中心点に行き着けているのではないか。そして女が鎌を掛けているのも分かった。「今更、何処が西やら東やら。西がどっちか分かったとして、私にその来た方へ戻れと？」「ええそう。どうやらほんの少しだけ、夢をご覧になりたい気分が戻ら

れたようですね。」

「さっき目を醒ましたばかりなのに」と私は、真面に取り合っていないのを示そうと、態とのように女より更に声を潜めてみた。「あなたは、さっきまでずっと眠らずにいたのを忘れてしまっているのです」と、女の声は少し明るくなったが、私には耳障りだった。鏡の中で、銀色を映す女の手が私の片手に触れようとしていた。逆に私の方から、女の二本の指をきつく握って鋭く捻った。抗って引っ込もうとする女の手の甲が、鏡に当たった。鏡は、薄い膜で出来ているように、柔らかい小さな波をゆっくりと折り重ねた。それで私の姿は訳の分からないものになった。波はゆっくりしている分だけ、なかなか収まりそうにない。鏡の奥から、女がこちらを振り返りながら姿を現すのが分かったが、自らの姿が元に戻るのを見てからでなければ、私は、鏡から目を離す気になれなかった。その私の姿は、入り交じって行くばかりの波に切り刻まれて、概ね横に引かれた無数の線の集まりの、色取り取りに動き続ける塊になっていた。

「あなたが出来る限りの事をなさるなら、私はあなたのために何でもします。予めそう決められているのは、お忘れでしょうが、あなたもご存じだった筈なのです。いや勿論、忘れられて良かったのです。それで、あなたは何一つ悪事をなさらなかった。あなたは約束を守られた。ご自身で眠りを禁じられるようになるまでは。少しも恐れなくて構わないのです。気付かれておられないかも

知れませんが、あなたの息遣いはとても荒い。どんなありもしない危険の中に、ご自身の身を思い浮かべておいでなのですか。約束を果たされたあなたに、守ろうとして守れるものも、守るべきものも、もうありません。ですからどうか、どのような恐れについても、もうお忘れになって頂きたいのです。」

何処かで口を挟んで、鏡は持って行かないで欲しいと伝えたかったが、女の話しが途絶えると、その気は失せた。私の姿である筈の動き続ける線の塊が、その目の前から消えていた。高い方を見上げて視線を固めた。私の姿が、そのほんの一部でも、指先だけでさえ、直に私の目に入るのを避けるために。私は、全身線の塊のまま取り残されてしまうかも知れない自らの姿を恐れた。そのまま腰を落とした積もりで、躄りながら周りを手探りして回ったが、鏡も椅子も見付からなかった。或いはただ線の塊であるなら、手探りなども出来ないだろうか。見上げた方は、何が現れるのでもなく、ただ虚ろだった。目もまた線の塊の一部なら、視線を固めるまでもなく、映り込むものを黙って受け入れるしかないか。

「ご覧になれますか、あんなに」と声のする方に、斜めを向いた女の丸い背中が見えた。女は真っ直ぐに立ち、長い片腕で低い方を指し示している。その背中に、背丈より高い細長い鏡が立て掛けられているが、何も映ってはいない。

「あの人達です。あんなに…」と言って、女は懐から薄い布を束ねた帳面を取

り出した。柔らか過ぎて扱い難そうだったが、低い方に見えるものを写し始めると手の動きは少しも滞らなかった。低い方は遠過ぎて、何かが微かに動くらしい他に私には何も分からなかったが、帳面に描き出される図には見覚えがある。あの彼と似た男達の、弧を描いて動き回る軌道に違いない。すっかり興に入って頁を捲るのももどかしそうに、女は次々に図を仕上げた。その足元が何時の間にか、色取り取りの線が隙間なく入り交じって、女と鏡は、鮮やかな模様の刻々移り変わる筵の上に乗っているようだ。「あの人達は何をしているのです？」と誰かが尋ねた。女は、少しだけ目を離し口元を弛ませた。

「しているのではなく、し損なっているのでしょう。それを誰かに知って欲しくて。いえ、知っては欲しくないんでしょうけど、ただ知られるしかないとも分からずに、ああしているのです。それが分かるなら、し損なっているとも分かって、已めてしまうか、何か他を考えるでしょうに。」「已められずに、他の考えも浮かばなかったら？」とまた誰かが尋ねたが、答えはなく女の手だけが動き続けた。「そうか、だから描き写しているんですね」と誰かは決め付けた。聞き咎めるように女の手が止まり、肩越しに鏡の方を振り返ると、線の筵が激しく模様を変えて段々と縮んで行く。そのままそれが、女の足の下に埋まってしまうのを恐れて、私はそこに身を投げた。尋ねた誰かは私でなくてはならない、そのためにも線の筵は私の姿でありたかった。

動く線は女の足元からすっかり消え、片手で支える鏡を斜めに覗く女は、鏡に映る私の姿を認めたが、私には何も見えず、鏡の前に立つよりは、女の足の下で虫のように踏み付けられて身動き出来ずにいる方を望んだ。女は、帳面の一頁目を開いて鏡に映し、私の姿を見詰めた。図だけははっきり見えて、それを私が読み解くのを女は求めているに違いない。図は、し損なったまま眠ってしまい、目を覚ましたくても覚ませずに歩き回るしかない男の息遣いが、曲がるばかりで安らおうとしない入り組んだ線から聞こえて来そうだが、それをそのまま言って、女に伝わるだろうか。寧ろそれと逆を言わなければ、女は聞く耳さえ持たないのではないか。逆とは？　例えばこうだ。「眠らずにいようと、彼は動き回らずにいられなくて、誰かに写して貰おうと遠い地面にその軌道を描くしかのは、眠りへの恐れを取り除きたいからで、その望みを託せる者が現れるまでは、新しい軌道を描き続けるしかないでしょう。」

しかし頁が捲られ二枚目の図が鏡に映っただけで、私の言葉は何も言ってないに等しいものになった。図は、幾重もの複雑な形の葉を押し固めたような一個の野菜に見えた。その見知らぬ野菜を探し求めているのだとすれば、誰にしろそれは遠い旅をして来た余所の土地の者で、その探し回る軌道が、探す物の形を描いてしまうのも、私のまるで知らない気候風土のせいと位にしか思えない。これもまた、それを言っても女に伝わりそうになく、逆を考えなければな

らない。「眠らずにいるには疲れずにいる事で、それで彼はずっと動かずにいて、ただ余りに動かずにいて疲れて眠くなりそうな時、ありもしない物を探す振りを庭先でしていたのが癖になって、つい遠出するような事になってしまったんでしょう。でも眠らずにいるには、その方が良かったらしい。野菜はその土地に言い伝わる眠り薬で、見付かる筈もないでしょう。」

　頁が捲られ三枚目の図が鏡に映ると、私はまた何も言ってないに等しくなった。それは出鱈目な線でびっしり埋まって図とも言えない程だが、一枚目に似た息遣いが聞こえて、見入る程、出鱈目な線など一本もないと分かって来る。目を開けていられない程の強い風に向かって真っ直ぐに進もうとして、虚しく狭い中を行ったり来たりし続けた男の歩いた軌道だったが、それだけではない。胸に秘めるものが、彼の足取りを定めさせない。道連れとはぐれ、それを探すために引き返すのを自らに禁じていても、足はその名を呼び易い方を向いてしまう。そうして何時の間にか彼は、そのはぐれた者の家族を見舞うためにだけ、強い風に向かって行くに違いない。眠る事は、その恐らくは二度と会えない道連れの面影を、風の中に置き去りにする事だ。その逆を言ったところで、女に何が伝わるのか。そうして黙ったままいても、頁が捲られた。一枚目にそっくりだった。それからまた頁が捲られると二枚目とそっくりで次は三枚目とそっくりで、また一枚目に戻って、捲れど捲れどその繰り返しになった。

「先を見られないのです。同じ所を捲り直すしかありません」とやっと女の声が聞けたが、それは上から響き落ちて来た。私は、或いは少なくとも私の耳だけは、やはり女の足の下に踏み付けられているらしい。「勿論、私のせいですね」と、その声の出所を探る積もりで言ったが、声は、周りと何の繋がりもなく鏡に映されて、消えた。声が鏡に映るなら、例えば大声を張り上げて鏡を揺さぶれるだろうか。女は鏡を持ち上げ、肩に水平に担いだ。鏡面は上に向けられて、その恰好のまま低い方へ女が駆けて行けば、細長い鏡は風を切って、翼のように浮力が付きそうだ。「鏡は置いて行って下さい」と大声を張り上げた積もりが、何処にも聞こえる気配はない。それでも私は「せめて手紙は私に返すべきでしょう」と続けた。「あれは誰が書いたのか、まだ分かりません」と、背中を向けた女の声が返って来ただけ、私はほっとしたが、それが響き落ちて来なかったのは、私の耳がもう女に踏み付けられていないからであるのなら、却って気に懸かる。上を向けられて見難いが、鏡の中はひどく揺れていないだろうか。

「あなたは決して急いでいる風には見えない。それどころか、他のものが急ぐようでも、決してそれに惑わされず、あなた独りはゆっくりしているようにさえ見えます。それでも私には、付いて行けない程、あなたが急いでいるように感じられてしまうのです」と、私は女に言った。いや、女が私にそう言った

のか。一体どちらがどちらに付いて行けないのか。それが分からない私は、さっき女に言われたように、少しだけ夢を見たい気分にでもなっているのか。「見えなくなってしまいました」と女は、さもしおらしい声色を使った。確かに、遠くで微かにでも動くらしい何かは、私にも見えなくなって、低い方も高い方も見分けられなくなっていた。「消える前に全て描き写せたんだから」と言う私の声は、何処にも聞こえていないようで、「全て描き写すなんて誰に思い付けるでしょう」と返って来た声も、何処で聞こえているか知れなかった。青く透き通っていた筈の鏡の中は、濁って泥を浮かべたようにしか見えない。

　初めて女の衣服に目が行った。ただ一重の飾りも折り目もない筒形の布を纏うだけだ。あの彼と同じで布地はひどく磨り減って透けていたが、その奥に体の線は現れず、肌の色も全く浮かんで来ない。その腰の辺りに静かに触れると、ただそれだけで、そこだけ布は裂けて捩れた。その裂け目の長さも幅も、鏡の中で女が指を挿し入れた私の頭の裂け目とぴったり同じではないか。その直ぐ前に跪いて、それを間近に見ようとする者は人の姿をしていた。それが私なら、私はもう線の塊ではない。直ぐ後ろに人が来れば気付きそうだが、女は身動き一つしない。ゆっくり息を吐き掛けると、裂け目は更に捩れて丸い穴を見せた。その奥に私は、銀の鎖に縛られた緑の石を見て取りたかった。そうすれば、また暫くは女は私から離れずにいようとするだろう。私の目に映る緑の石が、女

には、なくてはならないに違いないからだが、緑の石は現れなかった。

　目に映ったのは、手紙の一枚目の図だった。女の体がそこにある筈なら、腰の肉の奥の辺りに、その図は、はっきりした線でこちらに向けて描かれていた。女の肉の見えない虚ろな中に、その図はどのようにそこに浮かんでいられるのか、触れてみない訳には行かない。穴の縁を撫でる、恐らくは白過ぎて銀色に見えてしまう二本の指が、ゆっくりと拡げられた。その拡げられたままで指を穴に入れるには、指は先ず輪を描くように傾きながら裂け目をなぞって、穴の形を少し引き延ばさなければ叶わないだろう。その見当で指の向きが変わろうとすると、指の股に、細い微かな陽が差し入って来た。指と裂け目の角度が僅かに狭まり、陽が指を掠めて薄っすらと照り返し、その指の上で滲み拡がる気怠そうな金色の光りが、逆さまの馬のような形に現れた。二頭、重なるように並んで、西に向かって帰ろうと空を駆け上ると見えた。陽の差して来る方角に違いなく、そのようにして私は、西を見付けたのだった。

　「これでもう鏡を譲り渡すべきでしょう」と私は言った。女に言うべき事が初めて、寸分違わず述べられたのではないか。しかし「あと手紙も…」と急いで付け加えなければならなかった。応えるように女の肩は傾いたが、鏡は乗っていなかった。私にはそれで良かった。望めばその望む所に、私を導くものを映す鏡が、先回りしているだろう。女の体が頽れたが、足を滑らせたまま走り

去るようでもあり、その先の少し低い辺りに、女が描きたくても描けなかった様々な図柄の、水に姿を変えて止め処なく溢れ出る泉が、暗く小さく蠢いて、盛んに女を誘っているに違いなかった。身を投げてそこに頭をすっぽり浸せたなら、図柄の湧き上がる音に閉ざされ、もう何も見ないままにずっと、女に感じ取れる以上のものが、女に与えられ続けるだろう。それでもまだ、金色の光りを滲ませる私の二本の指は、女の腰の布の穴の縁を拡げるままだった。逆さの馬は一足先に帰路に就いたらしいが、その帰路が、更にそれに加わる変化を許そうとしないかのようだ。

　腰に纏われた布切れを残して、女は私から離れて行くようでもある。それとも離れて行くのは、腰の布を切り離してその先の泉に向かう女の影だけだろうか。確かめようと、掠める陽差しを振り払ってでも、指は、穴の縁から螺子を切るように穴の奥に向かおうとするが、穴は却って塞がり掛けて、鋭い重みを指先に掛けて来る。その痛みを伴う感触を忘れなければ、女が泉に求め得るのより更に果てもないような図柄の描き方を、私の指は、知れるままでいられるだろうか。ただ眺めるだけでは得られなかった図の秘密に、今私の指は触れているに違いなかった。ただ穴の縁を離れてしまって、それを忘れずにいられるか、その何程かの証しがなければ、迂闊に指を動かすべきでない。西を見付けた事が助けにならない筈はない。こんな時こそ、その真っ直ぐ先に据えられた

鏡が、私を導く景色を映しているだろうが、どちらが西なのか。逆さの馬に去られては、手掛かりは何もない。と言って、見出された方角が見失われたのではなさそうだ。どうしたらそちらを向けるか知らされていないだけだ。見出されたのが西だけで、他の方角についても何も分からないでは、私独りで西を指し示せないのも当たり前だ。

　泉は、女の影に覆われるようにして、その女の影と共に掠れて萎み掛けた。穴の縁の指に掛かる重みが急に失せ、四角い布切れがするりと地面に落ちて低い方へと滑る。その布の穴が目玉のように見えると、布は平べったい白い生き物のようで、枯れたらしい泉の残した窪地の底に、身を隠したいのかも知れない。女の剥き出しの白い腕が窪地の手前で降ろされて、生き物は女の手に掬われた。その怒りを湛えるように見開かれた穴の目に、女の二本の指が突き立てられた。白い生き物が最期の痙攣を起こすようであるより早く、女の体が、腕や脚や胴までも折り畳むようにその場に倒れ込んだ。白い小さな布切れがただ両手だけを覆う他、女は裸だった。近付こうとすると、女の着ていた筒形の服が足に纏わり付いて、それより進むのを妨げた。焦って足掻く内、両足共を、その服の腰の辺りに開いた穴に突っ込んでしまったらしく、罠に掛かった獣のように、私はそこを動けないばかりか体を寝かす事も出来なくなった。

　僅かな光る気配に釣られてそちらを向いた。その瞬間の頬を掠めて私の項か

ら背筋や腋に纏わり付く生き物のような後味の悪さは、無防備な女の姿を軽はずみに視野の外に押し遣ったからだろうが、その後味の悪さが、それを私にどうにも出来なくさせた。或いはただ、時を後戻りさせられないのに、四六時中その時を見張ってはいられないと気付かされる度に味わう、いつもの後味の悪さの、その味がいつもと少し変わっていたに過ぎないのか。その変わったにはそれなりの訳があるだろうが、それを穿鑿し出せば、更に別の後味の悪さが次々に控えているのを知らされるだけのようで、それこそが後味の悪さの正体にも思える。真っ直ぐ行った遠い先に、垂直に立つ細長い鏡が私の方を向き、その左右を揺らめく青っぽい灰色の影のようなものが、鏡を支えるらしかった。幾ら遠く離れていても、闇と見紛う暗い壁の中に一つだけ開いた小さな穴から覗くようにして見れば、その遠くのものを、直ぐ間近からのようにくっきり見られるのを、私は知っていた。或いはそれは、西を見付た際に、こちらから頼んだのでもないのに、授けられた技かも知れない。ただそうして鏡を間近に引き寄せても、映るものが一つも捉えられず、それが私の目のせいとも、そこに何も映っていないからとも決め兼ねた。それに比べ、その左右を揺らめく影の方が、余程その姿を鮮やかに私に晒した。左右に揺らめくのではなく、別個の二つが両側で鏡を支え、交互に青くなったり灰色になったりを繰り返している。その見掛けに従い、直ぐ側にそれがある積もりで、両方に手を差し伸べてみた

が、二つの姿には何も加わらない。代わりにか、私の両手は無闇に熱くなった。
霧のような小雨が、静かに冷たい風に流れて来た。心なしか、二つの姿の、色の入れ替わる速さが増すようだ。私は、両腕を拡げ、両掌を風に向けて器の形にした。両手の熱は収まらないが、そこに雨水が溜めるまでは、熱さを耐えなければならない。
「女の顔に振り掛けてやれ。」
「そうか、女は死んだんだな。」
掌で揺れる水は、透き通る炎のようだった。拡げた翼を前で閉じ合わせるように両腕を振り出し、その二つの水を、直ぐ側の積もりの何も映らない鏡に向けて投げた。「やったぞ」「いやだめだ」「やったぞ」「いやだめだ」と、向きの違う二つの声が行き交う。声のどちらかは青く、もう片方が灰色に違いないが、どちらがどちらかは速過ぎて分からない。しかし言葉も色も速くないのか。或いは、私の知らない何かが働いて、その速さを捉えられずにいるのかも知れない。いや、声に着いた色を見て取れた試しもないなら、声の色を見分けようと出来たのは覗き見た御陰とも喜ぶべきか。尤も別に望んだ訳ではない。声は続いたが、段々と交わらなくなり、それぞれの色の細長い壺の中にでも収まるように、どちらも窮屈そうな独り言になり、その言葉が直ぐ様打ち

消されずにいるのが辛そうにも聞こえ、遂には、「やったぞ」の中に「やってないぞ」、「いやだめだ」の中に「そうだそれでいい」の響きが、こっそり忍び込ませてあるのまで聞き取れて、声はただ、自らが空気を震わす音であるのを求めるだけで、色が着くのは仕方ないにしろ、それで何かを言い当てたりするのを嫌うらしいが、元々そうであったのか、私がその声の言おうとする事に応えられないせいでそうなってしまうのかは、知りようもない。

　小雨を運ぶ風が過ぎて、別の生温かそうな雨粒の、疎らに地面を打つ音が続く。音は、途絶えたかと思うとあちこちで出鱈目に繋がって、多分私を酔わせようとするのだ。私はまた、翼を拡げるように両腕を翳し、掌は雨を受ける形を取っていたが、大粒過ぎるせいか、偶に掌に落ちても水気は全て撥ねた。その両手は熱いままだったが、穴の縁を拡げた二本の指先だけは、熱さを免れ、却って何も感じない程に冷え切っていないか。その右手か左手かは分からないのに、鏡の灰色の側だとは分かったが、青と灰色が左右を絶えず入れ替わっているからには、どちらかに定まる筈もない。冷え切ったながら、塞がろうとするあの穴の重みの鋭い感触を、指先はまだ憶えているだろうか。先ずはその時の痛みを取り戻す事だ。冷え過ぎて感じないなら温めるのだ。右か左か分からないまま、見掛けは直ぐ側の鏡の表面に、指先を何度も突き立てるようにした。鏡には何も加わらず、指先も冷たいままだが、空いた方の翳されたままの手が

固く握られ、その高い位置からして、掴んではならないようなものを掴んでいる恐れもあった。放そうにも放せないのは、その何かを外から掴むのではなく、その内から外へと力を掛けて掴んでいるかららしかった。指の全ての関節が逆に曲がって手の甲がすっかり隠れ、反り返った掌の表面だけを見せる、のっぺりとした逆の握り拳が思い浮かんだ。痛みかどうか分からないが、私が感じ取れる以上のものが、そこに包み込まれていないだろうか。それが何か思い浮かべようとして、繰り返し思い浮かぶのは、どうしても最後まで見届けられない或る図柄ばかりだった。最後どころか或いは最初の線から何も見えていないようでもあり、それなら何故それが図柄かも怪しい筈だが、もしそれが何かの図でないとしたら、例えば私の人である姿なども、恐らくは酷く見難い夥しい線に引き千切られて、始めから互いに結び付きようもないものとして、後戻り出来ない時のあちこちにばら撒かれてでもいそうなのだ。それが、少なくとも私にとって図柄であってやっと、それを見る私の姿は、或るこの時の中に収まれもするに違いなく、そのためにそれを、図柄としか見て取れないのではないか。

　何も映らないまま、鏡の中の隅々までを、透き通った炎が満ちている。その直ぐ脇の、それぞれ灰色と青の細長い壺に閉ざされた中で途絶えた二つの声が、炎から伝わり出た熱で燃やされていて、直に壺ごと灰と化して粉々になり、それを蹴散らす青くなったり灰色になったりを繰り返す二つの影が、その上で踊

るように絡み合った。鏡の表面に突き立てるようにした筈の私の指先が見当たらないなら、二つの影は、その二本の指先の形を変えた姿にも擬えられるだろうか。それなら二つの影は、或る図柄を描き出そうとして絡み合うのではないか。影は、燃え滓となった声が撒き散らかっている地面を盛んに引っ掻いて、そこに次々に似た図柄を描き重ねているに違いないが、どれも拙くあやふやに見えて、直ぐに掻き消されてしまっても惜しくはない。ただ、そうして踏まれる燃え滓が再び熱を持ち、そこから僅かに甦る声を、私は聞き取るべきかも知れない。しかし耳で聞くには、遠過ぎてどうにもならない。指先が憶えていなければならない、塞がろうとする穴の重みの感触の他に、それを聞き取れそうなものはなさそうだ。指先が形を変えた姿かも知れない二つの影が冷え切っているなら、鏡に満ちる透き通った炎の熱は、そこに伝わらないのか。影の中に、あの鋭い感触が甦る気配はない。

　鏡の中を炎が動く。それなら炎は、全く透き通っている訳ではない。いやまるで透き通ってはいなくて、鏡が何も映さないのは、炎に遮られてに違いない。二つの影が、地面の拙いばかりの図柄に見切りを付けるかのように、踊りを已めて抱き合うまま、鏡の方に沈み込むように身を擦り寄せた。影は、鏡の冷たさを感じ、逆に、鏡の表面に、影の僅かな熱が移ろうとするようだ。互いに蜷局を巻き合うように一つの姿に溶け込んだ影は、青くもなく灰色でもなくなり、

細長い鏡を縦に背負って、それをずっと遠くから見詰める私の方へ遣って来ようとしている。その道程がしかし、真っ直ぐに見えて真っ直ぐでないのは、鏡が様々に向きを変え、時には全く裏返りさえするので分かる。背負われた鏡が裏返るなら、影も私に背を向けて私から遠ざかるのだ。決してただ向きだけを変えて、こちらに進んでいるのではない。何故なら、向きが変わる度に、影と鏡は、その位置を上下に振らし、大きく見えたり小さく見えたりを繰り返すからだ。それなのにそれは、何かの図柄を描くどころか、ずっと同じ速さで平らな所を、真っ直ぐ私の方に近付くように見えてしまう。そう見えるように私が、影の動きに応じて、その見る向きを変えるべく、影よりも何倍も素速く絶えず動き回ってでもいるのか。或いは、私と影との間に、歪んだ波形を様々に入り組ませたレンズでも置かれているのか。或いはまた、とても私には思い及ばない程の単純な仕掛けにでもよるのなら、穿鑿するだけ無駄だった。しかし、その影と鏡の真っ直ぐにしか見えない軌道と私との間の何処かに、或いは、何か単純な仕掛けが係わる何処かに、或る図柄が描かれていなければならないだろう。いやそれも、単純過ぎて私には思い及ばない、図柄でさえないものかも知れないが、無駄な穿鑿でしかない。

「掴んではならないものを掴んでいる。放せ」と、私は、私か影かに言った。私か影かは、「何も掴んでいない。掴める筈もない」と、私か影かに言い返し

た。何れにしろそれは、誰が何をする事についてなのか。掌の反り返る裏返しの拳を握って物を掴めるなら、私は死んでいるのではないか。或いは、私の死体そっくりの私の抜け殻がそのような掴み方をするのを、生き抜けた私が、見てしまうのか。私はただ、私の抜け殻へ赴こうとしているだけで、そうしてしまうのは、その抜け殻に係わってしか、生きる術を見出せないからではないか。私は、その抜け殻の手に、その抜け殻を丸ごと掴ませようとして、その全身の姿を求めても、求められずに、その似て非なる図柄の影に煩わされているばかりではないか。生き抜けた私に、抜け殻の何が知れよう。その殻の中に嘗て収まっていた中身の、その居心地の感触、つまりは、私に思い起こさせる、そこを抜ける前の自らに対する感じ方が、精々の手掛かりでしかないが、無駄な穿鑿を蒸し返している。

影と鏡は、私を行き過ぎてしまったに違いない。私は、鋼を捻るような力を込めて、やっと後ろを振り仰ぎ、より高い方へ進むそれらを見上げ、見失わないために、仰け反ったまま全力で後退っていたが気休めで、見えるのは、見上げるどころか限り限り見下ろしてやっと見えて来る低い方に、じっとしている人の姿の抜け殻一つだけだった。訪れない私を待ち兼ねるように、その姿は、燃え滓の欠片を抓み上げて息を吹き掛け、その縁に、透き通る火に似た僅かな声を点した。その抜け殻の全身の輪郭が、闇の前に漂って輝く糸のように晒さ

れた。闇は、枯れた泉のツンとする匂いに覆われていた。その底に流れ込んだ雨水が、一枚の掌に掬われたように溜まり、そこに、甦った声の僅かな明るみが鈍く映えて、浮かぶように見えた。その大方は地下に染みて、残り僅かの雨水を接げるものが何であるかを知るのは、水に映える声の明るみだけに違いない。それを、鏡に映して耳を傾けられでもしたら、せめてその声の、それがまだ声であるのか、或いはその抜け殻に過ぎないのではないのかと、自らを問う声だけでも、聞き取れるだろうか。

　とそのように問う者こそが、枯れた泉の底に流れ込む人の姿の輪郭となって、雨水に接ぎ合わさるようだった。私がそれを見下ろす限りでは、その輪郭は首から下だけで頭を欠いていた。私が、自らの体の首から下を見下ろすのか。私は生き抜けたのではなかったのか。或いは、欠けた頭を補うのが、溜まった雨水であるようなら、私のものではないだろう。そして輪郭は一つではなかった。それでも、雨水を接いで重なり合い、一つの輪郭が、段々と激しく形を変えながら細かく震えているように見えた。

　その輪郭の数をか、数える声がする。数もまた図形で表されるのだ、と私は思った。数というものがそもそも、或る日誰かによって描き出され、その全てを誰にも知られないまま伝えられて来た、一つの図形かも知れない。果てもなく続くと見える形が、図形としての数の姿として現れた。数える度に声は、そ

の形の内から外へ向けて掴むように、しっかりとそれを包み込んだ。包まれる形はその度に違ったが、段々と一つの姿に収まろうとするらしい。雨水を接ぐ人の姿の輪郭は、もう数えられない程だが、その収まって行く数の姿に抗うのを決して諦めないかのように、増え続けた。その激しく震えるばかりのような様も、数を表す一つの図形とも見えたが、独りでに出来上がってしまうなら図形に似たものでしかなく、そうであるならそれは、数を拒む全く別の図形が表される時を、ひたすらに希ってそうしているのかも知れない。

　雨水が全て地中に吸われた。跡に残った一枚の掌のような窪みに、声の明るみは尚も点ったが、水を接いだ輪郭は全て呆気なく絶え、数えるものをなくした声は、行き場を失って揺らめくばかりのようでありながら、その向くべき方向を、目の眩むような確かさで見出していないだろうか。とそのように問う者も、水や輪郭の後を追った。再びそれ一つだけになった人の姿の抜け殻は、枯れた泉の中を燃え滓の欠片を集めて回った。声は決してその方を向かなかった。拾い上げた燃え滓に息を掛けても、声は二度と点らず、燃え滓そのものが細かな塵になって吹き消され、その辺りの燃え滓が尽きると、人の姿もそれと同じ事になった。それは、声がその時になって初めてそちらを向き、それを一吹きに吹き消したに違いなかった。そうして声は、その向くべき方を向いた。

　方向は一つではない。私はその方向を、一からではないにしろ順に数えられ

て、声はその度に、青と灰色から作られる違った色を見せるだろうから、その果てのなさに飽きたりもしない。図形は知らない。泉に至り着けずに倒れた女の事を憶えていて、その晒されて干涸らびた体を用いて色々と身の安全を図ろうとする者などが、図形について詳しく知っているだろうか。女も恐らく同じ遣り方で身を守った筈だが、私は要らない。屍にお呼びが掛かるのは、数えるのに飽きた者同士が、その疲れた顔を晒し合うしかない場面でだけだ。声が絶えて数が止まると、止まった数だけが何度でも数え直された。それだけを私は待ち望んでいた。数は、声のように違う色を見せない。素振りだけで、数え直してなどいないからだ。それが、彼らにとっての屍のように、私の身を守った。知らない数が喉を溢れて吐き出されると、それは、一斉に沸き立つ虫の羽音のように、辺りを征服して行くようだった。　誰も座らなかった空の椅子を探した。

（二〇〇四年十二月二十七日）

*　*　*

（花畑の方から滲み出る霧雨が…）

花畑の方から滲み出る霧雨が、炎を黒く見せる。男が焼かれていて、炎は濡れた裸の女に抱かれて守られ、傍らに独り立つ男がそれを見下ろす。低い空は昼を過ぎても暗いままで、炎は凍りそうに見える。風の唸る乾いた音が響いて来て霧雨を吹き払うと、そこは空っぽな賑やかさに少し明るくなって、焼かれていた男が、立って炎を見下ろし、見下ろしていた男が、炎に焼かれていた。炎は虹のように透け、それに倣ってこの世界が透けて行くのを、焼かれる炎を見下ろす事になってしまった男は願った。やはり自らが先に焼かれるべきだと、それを願えなくもないが、今更叶わないのは明らかで、黒い炎に包まれる自らの姿は、世界が透けて行くより速く見失われた。焼かれる事になった男の方はもう、何かを願える筈もない。或いは願いはその焼かれる姿によって叶っていたが、それを彼は、何一つ叶わない果てに願ったに違いない。広く開いた扉から、風の音を接いで薄く眩しい陽が流れ込んだ。見下ろす男の体は冷え切って、疎らな周りの人の動きにさえ、自らの命を吹き払われそうで震えたくなったが、震えは来なかった。代わりに焼かれている男を気遣った。しかし焼かれる男に何を気遣うのか。炎はごく当たり前に熱く、ゆっくりとでも滞りなく、焼かれる身を灰に変えている。空気は乾いて常に入れ替わっていた。裸で黒い炎を抱いていた女は、今は、捩れたままの細い服に全身を締め付けられ、透けた炎を

見下ろす男の後ろで小さくなって、焼かれる様を怖々覗き込む振りをしながら、何処か違う辺りに目を遣っている。瞼の閉じ方を忘れたようで、採られるばかりの光りが、その目の底に溜まって透けて行く。時はそこでは、眠るようにして先にしか進まない。

　焼かれる男の首が曲がっていたが、女は勿論、それを見下ろす男も、それには見向きもしなかった。焼かれる男自らの仕業ではないか、などとも囁かれそうだ。男と女の二人だけは確かなところを知っていて、他の者達は、炎に包まれる姿によって初めてそれを確かめられるだろう。穿鑿する目付きは巧みに隠されるようなまま、一行は広い扉の方へばらけて行く。付いて行こうとする男女二人の、老いて痩せた足は動かなかった。

　傾いた花畑は荒れているようでもあったが、季節が幾らか早いせいもある。それでもちらほらと見える開いた花を、私は、頼りない足取りで追った。近付くとそれらはどれも、風に吹き晒されたせいでカラカラに乾き、花の色と形のまま枯れたに等しく、それを恐れ戦くかの傍らの蕾の瑞々しさは、却って私の目を背けさせた。私独りだった筈が、尖った感じの小さな人影が畑に入り込んでいて、足を滑らせては動き回る。滑った足に削られる地面は、傷付けられたように白く煌めいた。何かを探しているにしても、何なのか私には分からなかった。狐の絵柄の紫色っぽい靴を履き、立ち止まるのが根っから嫌いには違い

ない。子供だろうか。それも遠過ぎて分からない。花畑の広さばかりが目に迫って押し倒されそうだが、狐の絵柄の靴の跳ねるような動きに支えられた。その狐の絵柄は、もう何処へか抜け出しているらしい。遠い小さな靴に狐の絵柄の見えてしまう方が怪しい。その絵柄は、私にずっと古くから知られていたのではないか。

跪いていて、膝にぬるぬるした地面の感触が伝わる。柔らかいすべすべした生地の服が、何着か乱雑に重ねて敷かれ、その上に乗る私は、膝が滑って地面の傾く方に倒れ込みそうなのを、上半身を無理に拗らせて危なっかしく堪えていた。子供を呼ぶ、布のように柔らかい声が届く。別の人影が、花畑と狭い川を挟んだゴツゴツした岸辺を動いている。狐の絵柄の靴を履く影は消えていた。気配からして後ろに回り込んだようだが、振り返るより、それが近付いて来て私の体に触れるのを待ちたかった。岸の人影のこちらへと走り寄る姿は、寧ろ遠ざかって、その遠ざかる方だけは、赤っぽく明るく霞んでいた。狭いが渡れない川なのだ。それを私は、足元の服を一着翳して振り回せば、岸辺の人に伝えられそうに思えて、そうしようとした。それより早く人影は、自らの白い上着を脱いで、私の方に大きく振り翳した。それで私は、私の体を覆うのがほんの僅かの布切れでしかないのに気付いて、恥じ入った。それは直ぐに、そのような姿にさせられた怒りに変わったが、そうしたのは私かも知れず、恥

と怒りが頑なに膨れて交ざり、収まり所を失った。岸辺の人は、上着を脱いだ下に、また同じ白い上着を着重ねているように見えた。

　川は二股に分かれ、一筋は岸辺の人を更に遠ざけて赤く霞ませ、こちらに回り込むもう一筋は、花畑の端を縁取って途中から地下に潜ろうとする。その先の、花畑と乾いた砂地の境がぼやけてしまうのが気に障った。後ろを向いたが狐の絵柄も人影も見付からず、乾いた砂地の、川の直ぐ側からずっと遠くまで、疎らに低い木が生えて花を咲かせ、ぼやけた境界ばかりが何処までも続くようだった。木はどれも酷く傾いて、細いが数の多い枝は殆ど砂地を這っていた。小さな人影はその木のどれかに隠れていて、風を受けた枝の揺れる様は、私にそれを探すよう促すようだった。膝の下の服を一着、引っ張り上げた。色は着いていたが、生地が薄過ぎて何色か分からず着る気が失せた。もう一着引っ張り上げて重ねると、白っぽい虹が動き回るような色が現れたり消えたりする。ただ、一着ずつなら服の形を手に取れたが、二着重ねては、どうしても服の形が見えて来ない。仕方なく、取り敢えずそれを頭から被ってみて、体に感じ取れる布の感触を頼りに服の形を探す事にしたが、そうしながら膝を滑らせた。仰向けになって、その生地を通して見る逆さの景色は、花も木も砂も水も、一つ一つがバラバラに、何処となく真下に向かって尖っているように見え、更にそれらが組み合わさる景色全体は、垂直な巨大な矢印のように地下を目指して

いる。分かれて行った川岸の赤っぽく明るい筈の辺りは、寧ろそこだけ目立って暗く黒々と霞んで、じわじわと私の景色から剥ぎ取られた。腹這いになって上下を元に戻しても、景色は、ただひたすら地下にのめり込もうと更に切れ味鋭く、真下に向けて尖って見える。私は立ち上がれなくなり、仰向けと腹這いを繰り返して、無理にも交わろうとでもするように尚も服に袖を通すのに拘った。

　川が地下に潜り始める辺りに向かって、透けた服が一列に、蛇行しながら花畑の傾斜を滑って行く。じたばたする私が、それらを順に押し出していて、私の体もその列に乗り、花畑を川の方にゆっくりと降りている。そう気付くと体は自ずと腹這いで固まり、地面はもう傾いていないのか、そこで止まって、磁石の針のように降りて来た方に頭がぐるりと振れた。列の始まりでは服はまだ重ねて敷かれ、そこから間を開けず一着ずつ流れて来るのが見える。そこに、剥き出しの白い脚が、逆さにぐるりと回るように持ち上がった。私と同じように、何とか服を着ようと藻掻いている者がそこに居る。合わない服はさっさと放って、着られる服を着ようとしているのなら、私より巧い遣り方だ。しかし最後まで合う服が見付からなければ、裸で放り出されるしかない。そうして蛇行する服に身を投げて、服を掻き集めながらでもこちらに降りて来ようと、着られる服はないのだから、私を通り越して最後には川に落ちて仕舞うのも仕方

ない。

　真下に尖る景色の中に押し出されたままなのが怖くないのか。後ろを振り返らないでなら立てるだろう。しかし迂闊に立ち上がるのもまた怖い。腹這いのまま戻れたら良いが、頭から服を被ったままだ。両腕を拡げ櫂で漕ぐようにしたが、滑る手応えしかない。いや、私は何もしていない。腕はもう、溶けてなくなったかのようだ。被った二着の服は恐らく、幾つも結び目を作ったり綴じ合わされたりして一繋がりの閉じた袋になり、私の全身をすべすべした布地の感触で包んでいて、そののっぺりした感触が、腕だけでなく脚や胴体の動きまで感じ取れなくしてしまっているに違いない。何時からそうだったのか。事によると蛇行する服の列にしても、目に触れて来るその生地の表面の、白っぽい虹が動き回るような綾に過ぎないのではないか。兎に角動こうとすると、私を押し込める袋の、複雑に接ぎ合わされたようでもつるりとした卵に似た形ばかりが頭に浮かぶ。袋に留まらず、私の体の形も、布越しに触れる地面の凹凸も、これから出逢う何もかもまでが、卵の形に成ってしまいそうで、卵の形ばかりの所から遣って来て、またそこへ去って行くしか能のない私なのだと決め付けなければ、溢れ返る卵の形に耐えられそうにない。他の形を思い出そうとすると吐き気がして、堪えられず数珠繋ぎの透けた卵の形を次々に吐いた。服の列か布地の綾か定かでないが、その蛇行するのだけは卵の形を免れているのが、

キラキラと輝いて見えて、吐いているのを少しだけ忘れられた。

　吐くのではなく、吐かれているらしい。卵の形のどれかが、私を卵の形の中に吐き、卵の形の一つになった私は、その形の中にすっかり紛れた。どうやらその私は、蛇行する流れに乗せられている。それともその流れを、傍らで眺めるだけか。そうだとすると、他の卵の形は殆ど全てそこに流れ込み、私だけがその外に居て卵の形でなくなっていそうだ。私独りで蛇行を止められないなら、助けを求めるしかないが、その求める先は卵の形ではない。卵の形が幾ら寄って集っても、蛇行する流れに逆らえないのは今見ている通りだ。見詰める内、時々表面にうっすら花柄を染めたものが流れ過ぎるのは分かったが、それらだけは、卵の形かどうか見極められない。それを掬い取ろうとする人影を、私は捉えようとした。それも私と同じに流れの外に居て、流れを眺めているに違いないが、私には流れの外は見えず、如何にも掬い取られそうな整った花柄を目で追い、それが流れに呑まれる刹那の、流れに映る人の形を探った。人影は気配もないが、消えた花柄は確かに掬い取られ、流れより少し低い所に綺麗に重ねられている。それは段々と流れに食い込むように積み上がり、遂には流れの向きまで変えた。その辺りでだけ、卵の形がいきなり別の形になって、そこで刺々しく脹れる流れは、私の体を揺さぶり傾けているに違いない。何とか流れの外に目を向けて、巧く重心を取らなければならないが、微かに見えたらしい

流れの外には何もなく、却って足場を失い、流れの向きとも花柄の積み上がる向きとも交わらない方へと、私だけが吸い込まれて行った。

　蛇行する流れに手足を絡ませて獅噛み付く人の姿が、流れに翻弄されるまま上になったり下になったりし、時々体勢を整えては素速く片腕を流れの中に伸ばして、花柄を掬っている。流れはそこで途絶えていた。まだその先、或いはそれは地下に潜るのかも知れないが、その人の姿によって堰き止められているように見えた。綺麗に重なっていた花柄が崩れ、螺旋を描きながらばらばらに拡がろうとする。人の姿は、今にも流れの終わりの中に逆さまに落ちて行きそうなまま、巧みにそこに留まり、真っ直ぐな片腕を流れに逆らって突き上げた。卵の形が何処からも吐き出されなくなり、蛇行が僅かずつ逆流し始めたかの表面には、どんな形も柄も現れなくなり、流れも見て取れなくなった。逆さまの人の姿が助け起こされた。その自らの腹を覗き込むと、そこに別の人の姿が嵌まっていて、助け起こしたのは、その嵌っている姿の他にない。細長い体で渦を巻くように丸まり、その真ん中の小さな頭だけが突き出され、口から花柄を吐いている。助け起こされた人の姿が、その吐かれたものを掬い取ろうと腹の下に掌を添えると、腹の中の人の姿ごと外に押し出された。腹に大きな穴を開けた人の姿は、そこを満たすものを求めて体を投げ出し、体を寝かせたまま蛇行に腹の穴を擦り付けようとするが巧く行かない。蛇行がその形を活かして、

じっとしたまま身を躱すようだった。穴から押し出された人の姿が、ぎこちなく立ち上がってそれを跨ぎ、小さな頭で振り返ると、暗く沈んだ色の蛇行は、流れの跡を残すだけにも見えた。

　その口はもう花柄を吐かなかったし、見渡しても、螺旋を描く花柄も何処かに吹き散らかされている。両手の人差し指を交わるように踊らせて、宙に何かの柄を描くようだが、なかなか形に成らない。それと向き合う別の人の姿が、やはり両手の人差し指を踊らせて、その出来掛かる形を悉く切り刻んでいるからで、その指の動きは、ずっと鋭く必ず左右対称でどんな柄も適いそうにない。それともその指もまた何かを描こうとして、向き合う指にそれを妨げられているのか。二人は少しずつ近付いている。指同士が当たって動きが何度か途切れると、腹から押し出された方は、諦めて両腕を垂らした。もう一人は伸ばした腕を相手の肩に乗せ、その背中の後ろで指を踊らせた。その指の間から、透けた花柄が螺旋を描いて零れ落ちた。その花びらの一枚一枚は薄い刃のようで、花柄は順にその下の、白く細長い柔らかそうな背中に、薄い独楽のように回りながら突き刺さって埋もれて行く。その背中がゆっくりと螺旋を描こうとする。背中だけでなく首から足までが螺旋を描いて相手の胴に絡まり始めるが、絡まるより、相手の鳩尾の辺りに全身を捩じ込ませたいらしく、相手もその為すに任せるようなら、二人の思いは同じだろうか。輪郭だけなら二人はもう貼り合

わされて殆ど一人に見えるが、脹れた腹に目を遣れば、その人の姿をした輪郭は、何か別のもので拵えた見せ掛けで、その腹の脹れた形に身を乗り入れて蜷局を巻く者だけが、ただ独りでそこに居る人の姿に見える。その姿は裸で、そこだけが肌色なのだと分かる。それを腹に収める、人の姿の輪郭に過ぎない方は、ただ暗い色としか分からない。その裸の姿の何処にも、男らしい色と形が見当たらないなら、女らしさが見当たらなくても、それは女にしておくしかない。

　女なら、蜷局を巻かずにも済むらしく、絞るように丸い形を歪ませて、そこを抜け出そうとするらしいが、精々が腹の脹らみを卵の形に浮き出させて、それをぐらぐらと回すのがやっとだ。そうなってしまうのは、女にしておかれた訳が、人の姿の輪郭を保つためで、そうであるなら、その見せ掛けに過ぎない輪郭を描いた別の人の姿が、そこに影を落としていないだろうか。しかし女は決してそうなるのを許さないようで、自らだけが人の姿であるためなら何でもしそうだ。五枚の花びらが萎えるように、人の姿の輪郭は大の字に仰け反った。独楽のように回りたそうで、それを女は恐れるらしく、卵の形に浮き出るのは控え、真上に向けて突き出された腹の輪郭の中に寧ろ沈み込もうとする。女の体は、萎む五枚の花びらの奥に包まれるようになって、その丸い形を潜ませた。そうして女の形を隠すために現れる形は、少なくとも花の形には似ていないが、

新しい形を見付けるためには取り敢えずどのような形が相応しいかを、あれこれ探っているような形には似ていそうで、どうやらそれは、声を出したい形らしい。しかし女を包むものは、声など出せる筈がないと嘲笑うように、それを易々と妨げて、何処か行く先が決まっているかのように歪に震えた。

　その歪さの向く方に、何着か透けた服が、水底に泉を潜ませて動く水面の綾のように散らばって揺れる他に何も見当たらないなら、その見えるだけのものを震わせて、まだ見えないものがその震えの陰に潜んでいるかも知れないようにしなければならないが、そうするには、女を包むものの震えは歪過ぎるようで、歪さの影が、散らばる服の裾に僅かな模様を飾り付けるのが、やっとのようだ。その模様も透けて見難いが、裾の揺れるのをそっと押さえているのかも知れない。服は順に、風よりももう少し硬い脹らみを孕んで、水面で浮き彫りにされたように動きを止めて行く。その形はどれも何処か尖った感じがして、少しでも傾けば、その角度のまま水の中に切れ込み、沈んで消えてしまいそうではないか。そして初めの一着がその通りになり、後も続く気配だった。女を包むものは、それを止めなければならないが、またも震えの歪過ぎるのに妨げられて、服の数は少しずつ寂しくなって行く。どうやらその度に、女を包むものの表面に、消えた服の裾を飾った模様が乱雑に写し取られ、女を包むものの形も、何処か尖った感じになっている。女を包むものは、その尖った感じに身

を添わせるようにして、確かな行く先に狙いを定められた。そうして、恐らく最後に残る筈の、最も遅く脹らみを孕んだ服に向かい、それとの隔たりは段々と狭まった。目論見通り最後の一着になり、それに触れそうにまでなる。と、その下に隠されていたもう一着が剥がれ落ちて、そちらに気を逸らされる。その隙を狙って、現れたばかりの服は、女を包むものの下に滑り込んだ。触れそうで触れられない内に、また次の透けた服が剥がれ、先の服の下に滑り込んで重なった。その繰り返しで透けた服が何着重なっても、透けた一着にしか見えず尖った感じもない。女を包むものは、その重なる中にゆっくりと沈んで、その中に包まれたいらしいが、下に向きを変えようとしただけで、そこに入り組んだ模様が刻まれ、上面の生地はざらざらと硬く歪み、透けているかどうかも分からなくなった。

　それでもどのように透けるのなら、何処か決められた方を向いて透けていそうだ。その透ける様は、重なり続ける服の、或いは同じ時に付いたかも知れない、どれもほぼ同じ辺りの瑕のようで、それは、服の重なりの厚みをはっきりと見せた。上面の一着だけでなくその下に重なる服も、もう透けるばかりではない。その服の重なるのが已まなければ、瑕の繋がりは深くなるばかりの筈だが、服の重なりの中でその瑕だけが透けては、深さは見て取れない。女を包むものが、その透けるのを当てにするなら、透けるままにその深さをどのよう

にか捉えなければならないが、やはりまた歪な震えに阻まれるしかなく、そこに自らを滑り込ませて瑕を埋める望みなど端から虚しそうだ。

　代わりにその深さを測ろうとする人の姿の首に、女を包むものは、その首を締め付けるようにぶら下がる。その人の姿は、女を包むものが触れようとして触れられなかった最後の一着を片腕に引っ掛けて、重なる服の瑕より少し遠い辺りに、じっと動かない目を向けているが、その目は、動かないまま地面を巡っていないだろうか。その人の姿が、重なる服の周りをゆっくりと巡っているのだ。そこを離れたくても、女を包むものに首を掴まれて離れられないのかも知れない。片腕に引っ掛けた服が、裾を地面まで垂らして足の運びを隠すので、突っ立っているだけに見えてしまう。いやその服だけは、裾を僅かな模様で飾り脹らみを孕みはしても、まだ瑕一つなく透けるままではなかったか。それがどうして足を隠せるのか。女を包むものの表面を溢れそうな模様が、その影を映すように流れ出て、透けるままの筈のその生地を汚して曇らせているに違いない。

　その人の姿は、鎖に繋がれたように同じ所ばかりを巡り続けるので、そこに小さな環の道が出来た。その人の姿はずっと、その環の、自らと向き合う側に目を凝らしていて、環の形を刻んだのは足ではなく、その目だったかも知れない。環は歪みのない円で、その精確さは内側の縁を薄い刃のように見せ、中に

囲われた服はどれも、脅されたようにまた透けようとし瑕は見失われた。その人の姿は、首にぶら下がる女を包むものを、空いた方の腕で引き千切ろうとして、却って首を絞められた。女を包むものは、ギリギリと捻れながらその首を真横に曲げた。それはもう脹れた太い縄のようで、中の女は、その縫り目から搾り出されるしかなく、逆に、女を包んでいたものに巻き付く形で綺麗な螺旋を描いた。女を包んでいたものは、それでも首を絞め続けたので、形としては女もそれに加担するしかない。その人の姿は、脚を隠す服を引っ掛けているもう片腕も使って、首を絞めるものに抗った。それで服は環の外にふわりと飛んで、戸惑うように波打った。そのように宙に漂わせるのは、その服を着たい女かも知れない。隅々まで細かな模様が刻まれた服は、透ける筈の生地を曇らせるままだった。環の中で重なっていた方の服にもうすっかり透けて、一着の服の形をしているかさえ覚束ない。逆にその中に、すっかり透けるのを辛うじて拒んでいる瑕が、ただ一つ、形を現していた。最後の望みを託すように、曲げられた首がそちらに向いた。その人の姿は、その瑕を、それとだけ極狭い中に閉ざされたかのように、有り得ない程の間近で見た。当然、それを見るのは片目で、もう片方の目は、その見られている瑕に違いない。或いはその瑕の中に片目が潜んでいたのかも知れない。何れにしろ、ねっとりした涙の膜で覆われていそうなその尖った目が、女の目なのは明らかだ。目と目は、探り合うよう

に見交わすのを已めない。

はっきりさせるには、その目を磨き出さなければならないが、どちらがどちらをか。その人の姿は、足を止めている。剥き出された脚は、長い間歩けずにいたように痩せて、皺だらけで酷く老いて見えた。それをそう見るのは、女の目だけに違いなく、その目は、その脚の立つ環の道に狙いを定めていた。環の何処かを裂いてしか、その外に出られないだろう。環の内側の縁の何処かに、僅かでも必ず瑕が見付かる筈だ。女の描く螺旋は、細いバネが細かな伸び縮みを繰り返すように震えて、もう何にも巻き付いていない。そう見えるのは、もう片方の目だけに違いなく、その明ら様に挑むような目は、女の描く螺旋の伸び切った先に狙いを定めている。しかし女の目には、自らの姿は、狭い環の中に窮屈に埋まり込んで蜷局を巻き、はち切れそうな白い肌から幾重もの脂の匂いの滲み出すものだった。匂いは決して環の外に漏れず、ただ内へと入り組んで重なり、何か別の匂いさえ環の中に染み込ませそうだ。女でない方の目は、自らの人の姿を見失った。いや、首の曲がった人の姿なら、環の道の途上で倒れていて、その首を縄のように絞めた女を包んでいたものを、胸の下に押し潰している。それなら見失われたのは、それを見ているのが、女でない方の目であるという事に違いない。それでもその目が何かを見たいなら、女のもう片方の目であるしかない。女でない方の目で見られるものがなくなっているのだけは、

そこに見えて来そうだ。

　自らが勝っている、もう片方の目を従えたと、それで女の目は確信出来た筈だが、それで得られるものは何とも見窄らしくはないか。そんな筈はないと、女の目は辺りをまさぐった。それとも蜷局を巻く女の肉がまさぐるのか。女にまさぐれるのは、環の中だけで、つまりは自らの肉をまさぐるだけだ。その中に埋もれるしかない女の目は、潰れて、脂の匂いの染み込んだ肉の一部になってしまっているかも知れない。その蜷局を巻く白い姿が、丸々全て女の目であるように見えて来た。それをそう見るのは、もう片方の目であるよりない。しかし、その見る目は、自らが女の目か女の目でないかを直ぐにも見極めなければ、何一つ見続けられないと分かったがどうにも出来ず、潰れた肉片のように直ぐに環の外に弾かれ、一着だけ残された服に飛び散って、幾つかの小さな青っぽい染みになった。青味はじわりと赤くなる。腐るせいでも干涸らびるせいでもないなら、女のせいだ。女が、青と赤のどのように人の目に授けられたかを、思い巡らしているからに違いない。青は赤から生まれ、赤は青から生まれ、その青は赤から生まれ、その赤は青から生まれ、そうして青と赤は、互いの起源を互いに拠る事で、人の目に映るまでの鮮やかさを備えたのではないか。そうでないとしたら、そうでないとしたら…

　環の中はただ白い。蜷局を巻く女の肉とも、脂の乗った女の肌とも見えない。

それをそう見るのは、女の目だけでも、もう片方の目だけでもない。そのそれぞれの見たものが重なって、そう見えるらしい。ではそれが重なるのを、どの目が見るのか。そんな目がないなら、目でないものによって見られているとされるしかない。環の上に俯せに倒れている人の姿は、環の中に身を乗り出そうとする恰好で、その斜めに向けた左胸を、環の内側の縁に押し当てている。その縁の刃のような鋭さを求めるのか。それともその鋭さの先の、環の中の白さが求められているのか。環の縁を深く食い込ませた胸から、真っ白な小さな花柄が次々に環の中に流れ出し、ゆっくりと内に向かう渦を巻こうとする。しかしそれは直ぐに拒まれて、花柄の一列は、渋々そうに揺れながら環の上に打ち上げられた。環の中が波立つ海であり、花柄が漂流物でもあるように。環の道の途上で、なくした自らの目を探す女が、何もない空を手探りしている。その手が、環の外側を向いて限り限り環の外側の縁に立つ人の姿の脇腹に触れた。その人の姿も、自らの目をなくしていて、頑なに環の内側を向こうとしないのも恐らくはそのせいで、動かないまま女の手を払った。その女の片手だけが急に重くなって道の上にぽとりと落ち、それに靡くように女の体が続いた。女の体は、片手と比べれば柔らかそうに脹れた影のようで、道に這い蹲って、頼り切るように片手に擦り寄った。片手は黒っぽく輝き出し、そこに吸い込まれる薄い影のように女の体は消え、その片手だけで女はそこに居られる。それを楽

しむように女の片手は踊り、指がコツコツと道に硬い音を立てた。音は、環の縁に立つ人の姿に届く筈で、その人の姿は、音から逃れようと、両腕を水平に拡げて環の外に身を投げる恰好になった。殆ど裸で、下は全て剥き出されている。咄嗟に身を覆う両手は、環の外に一着だけ残された服を知らずに掴み取っていて、その生地の素肌に触れる勢いのまま、その人の姿は、服を頭から被った。ほぼ全身が覆われた。道の硬い音が遠ざかるが、それはその人の姿が、環の縁に沿って動いているからかも知れない。初めて後ろを振り返ると、直ぐ足元で、片手だけの女が、ガリガリと音を立てて、打ち上げられた花柄を掻き集めている。目を逸らそうとしたが遅い。もう自らの身内の何処かにその逸らしたい目を導き入れていては、それに従うしかない。女は片手だけではない。それどころか片手は殆ど目立たなくて、肌の透けた大きな体が、捩れてはピクピクと細かく跳ねている。透ける肉の中は魚のように動き回る花柄で満ちていたが、どれも色は汚く濁って見えた。その肌の真ん中に黒光りする手の形が浮き出たが、それは、その形のままの女の片目に違いない。人の姿は、すばしこい水中の魚を手掴みする要領で、腰を落とし、女の体を囲うように両腕をそろりと拡げた。すると思い掛けず、纏っている服の隅々まで刻まれた細かな模様が、肌を隠すのではなく、寧ろその模様の一つ一つの中に、それぞれの体の部位のありのままの形をレンズのように拡大して見せているのが分かった。下半身も、

裸の時より更に克明に目の前に剥き出されている。しかしそれは、どの目の前にか。いやその前に、そうして剥き出された体のどの部位も、同じようにのっぺりとしてただ汚れているだけで、その色も形もどのようにも表されていないではないか。それともその表されようのなさで表された様こそ、ありのままの体の色形であると認めるしかないなら、それは、ただ辱められるために暴かれた裸の姿であるよりなさそうだ。布に覆われていない手足の先だけが、それらしい形をして獲物に挑み掛かる体勢を続けたが、女の片目は、その自らの手の形を擦って消すように、悠々とまた花柄の肉の中に消えた。そしてそれだけで、服の模様の一つ一つの中に剥き出されていたものも、ただのっぺりと汚れている見掛けはそのまま残して、体の部位のありのままの形であるのを已めた。そうなると裸ではなく、裸をなくした事を恥じなければならなかったが後の祭りで、その消しようのない恥ずべき汚れだけが、女の肌との間に漂うようだった。それは、それを嫌う女の肌によって、汚れであるとされてしまっているだけかも知れないが、女の肌がそれを受け入れてしまえば、なくされた裸は、愈愈取り戻されようもなく何処かに置き去りにされ、女によって繰り返し汚され続けるに違いない。

誰かの腹が空いていた。いや全く違う。そして腹が空いているのもそれが違うのも一瞬で過ぎた。それを捕らえて切り開いて中身を知り直したく、執濃く

一瞬を追っていた。それは、何周も巡った環の道の終わりに逃げ込もうとしている。追い詰めたのか。と、そう思う一瞬がまた過ぎ、環の道はそこで大きく裂けた。裂け目の手前の沈み込んだ方に居て、跳ね上がった方を見上げる人の姿は、確かに一瞬の形をしていたが見るからに抜け殻で、その纏っている服を脱がせば、形をなくしているのも直ぐに暴かれそうだ。腹を空かすとはそう言う事か、と誰かが思った。女かも知れない。他に名乗り出る者もなさそうなら。或いは女は、そうしたいだけかも知れないが、そうしたいとは、何をしたいのか。しかし裂け目の幅は、その何をかしたがっている女に比べて明らかに拡がり過ぎている。いやそれより、女がその裂け目から環の外に流れ出てしまっていないだろうか。そのように裂けた環の中にこそ、止め処なく溢れる女の姿は、あって然るべきなのに。環の中から目を逸らせるならそうしたいが、そう出来ないのをただ一人嬉しがるのが、私だった。ずっとそこに居たかは定かでないが、周りが私のために変わるのを、じっと待っていたらしい。そんな私が嫌われ拒まれる程、私は環の内側の歪んだ輪郭にのめり込んだ。或いはそこは環の内側ではなく、歪んだ曲線の外に閉め出された私のためだけの隠れ処かも知れない。そうして私はまた、あちらともこちらとも示された事のない方へと、攫われてしまわなかっただろうか。腹が空くのも全くそれが違うのも一瞬で過ぎるのが、至極尤もであるとだけ思われた。

そのそれ一つ切りの思いを引き取らされ、嫌々環の道を辿らされるらしい人の姿が、その行く手の少し離れた先の、これ見よがしに荒っぽく拡げられた道の裂け目を見詰めている。酷く腹の空いているのは分かったが、食い物の代わりにそこを根深い痛みが満たし、それを元にして力は幾らでも湧いた。力は痛みを痛みでなくし、力だけが腹に満ちた。それは空回りしてだけの力で、何にも触れられないし、何からも触れられず守られもするだろう。そしてそれが決して女に出来る芸当でないなら、その体の何処にも男らしさが見当たらなくても、その人は男であるしかない。男は先ず、裂け目より手前で彼の行く手を塞ぐ者の肩を掴んで引き寄せようとした。その者は、裸をなくした事を暴かれるための服を着せられていて、それもまた、女には出来ない芸であるので、その者は男であるしかない。しかしその服の隅々まで刻まれた細かな模様だが、空回りする力の男の目に、それが模様と映るだろうか。目の前に、服を着せられた男は無防備に長々と横たわった。いや服を着せられていると、どうして見えるだろう。そして裸もなくしてもいるのであっては、その何を見られるだろう。その身の丈にだけ見覚えがあるなら、その身の丈の精確な長さを道の裂け目の手前に据えようとしているだけではないか。それでも男は、道に横たわる身の丈だけの姿を見下ろすのを已めようとはしない。それは、環の道の終わりに向かって歩き続ける二人の男の内のどちらかの影に、目を向けたくないからに違

いない。その影の唱え続けるただ一つの言葉の、その繰り返される声の響きだけを、空回りする力の男の耳は、微かな律動として辛うじて捉えなければならない。目は背けられても耳を塞ぐのは許されないなら、それは、空回りする力が、耳の働きを必要とするからでもありそうだ。

　環の道が閉じた。裂け目が塞がれたのだが、裂け目の形は残った。その形の中を、道はまたどのようにか環として巡ろうとするらしい。そこを行く人の姿は、唇の色を消す程に口を冷たく閉ざしていた。空回りする力の男は、その口からの声をこそ聞きたかったのだという思いに駆られたが、それとは隔たるばかりで、どちらもが小さくなって行く。裂け目の形の奥に閉ざされた人の姿が、独りだけで、環となって続く道の後を追っていた。その纏う服にも隅々まで細かな模様が刻まれていたが、それはその人の体の何も暴いてはいない。男の耳の奥で、どうしてなのかと尋ねられると、そう尋ねられただけで、その人が服を裏返しに着ているからだと分かる。それなら、その細かな模様がレンズのように拡大して見せるものも、内と外が裏返って、その服の外に拡がる裸のままの世界か、或いは裸をなくした世界の拡がりが、その人の肌に向かって暴かれているのだ。どれ程の事柄が、その肌に映り込もうと彼方からも遣って来て、窮屈に競い合っているだろう。空回りする力が、その競い合いに駆られるように盛り返し、服の模様に絡んで来る。世界中から遣って来てそこで競い合う事

柄が、空回りする力と同じものであると誰かに分からせたいらしいが、同じである筈はない。そこから遠い所で、空回りする力の男は、その力も失い、もう一人の男の身の丈の記憶だけの前に取り残された。

　環の道へは追い着けそうにない。替わりに裂け目の形を追ってはその裏側をなぞり、遂にはその裏の形に体を擦り付けるだけのようだったが、その積もりでも、裏返しの服の粗く硬い凹凸が邪魔して、裂け目の裏側からずり落ちそうなのを、やっと堪えているだけなのだ。そしてその布地の凹凸は、裂け目の凹凸と激しく擦れて、繋がり合って行くようではないか。その人の姿は、着ている服の内側を、自らの体がそこに包み込まれているか確かめたいように、覗き込もうとしていた。裂け目と服の凹凸が、直に境目も分からない程に一繋がりになるのは明らかで、それに連れて変わってしまうだろう自らの体の形をよく見て置かなくてはならないが、何処を覗いているのだろう。体は、服に包まれる中ではなく、その外の服の裏返された側に、丸ごと食み出していないだろうか。体に限らず、服が何かを包むとすれば、裏返された外の側を包むに違いない。その裏返された服はもう、裂け目の凹凸の中に包み取られて動きが取れず、まるでその服が、服の背丈を超える裂け目の形をぴったり纏っているようだ。それでも服は服であるなら、飽くまで裏返された外に向かって、裂け目を纏っているのかも知れない。しかしそんな事は、何処が境目か分からなくなれば、

どうでも良さそうだし、もう人の姿もそこにはない。

零れた小さな玉でも拾うように、地面の小さな花を摘もうとしていた。見回しても人の姿がないなら、そうするのは私であるしかない。いや、そうしようと出来るのは恐らく女だ。それも、私の知らない柔らかい指をした女だけに違いない。私は女でないから、それは私ではないが、居ない女に代われるのは、やはり私かも知れない。それなら私は、それを妨げる方に回りたい。花など見たくもない。何処からか何処かへ、玉のように花柄は確かに零れ続けていると分かったが、それはもう終わっているかも知れないのに、何によってそうと知れるのか。花柄の形が全く思い出されない。花柄とは私の知っている女の事だったか。それとも、その女が何かを顔より高く掲げる時、その女と何かが組み合わさって出来る形が花柄だったか。それとも、それを裏返すか逆にして出来る、まるで違う形だったのか。それとも、その違う形に触れようとする私の知らない女の、光りの方に崩れて行く影のような姿だったか。そのどれとも違うような、零れ続ける花柄は失われなかった。それに背を向けて落ちるように、急な斜面を急ぎ足で駆け下りる痩せた人の姿が、その先の暗い方に呑まれた。裏返しの服の破れた半分が、ふわりと浮いて、川の水にゆっくり流されるように少しずつ沈んで行く。裏も表もなくなるのは水のせいだろう。そして細かな模様も消え、生地は人の肌のようにのっぺりした。水は、ほんの僅かずつ

その生地に染みて、そこに直ぐに次々にまた細かな模様を浮き出させるが、それは今消えた模様とは違っていた。そのどれとどれを比べても同じ形はなさそうで、そのようにバラバラでありながら、どんな模様が描き出せているかまるで見て取れないが、そうであればこそ、決して外からの力に左右されない、模様以外の何ものも受け付けない模様に思えてしまう。そしてその新しいもの程、順に奥へ奥へと描かれ、その色形を目を凝らしてやっと見て取れば、一つとして掠れているものはない。その中で溺れているのは誰か。湧き出る模様は、その誰かの隠れる処にいきなり流れ込んで来て乱れ舞っていた。それともその模様の夥しさが、模様自らを溺れさせるのか。模様は、その湧き出るのを止められる花柄を求めて、湧き出すのを已められないのかも知れない。

　花柄は人の姿だ、と思い出された。それで全ては繋がって行くようだったが、繋がってしまえば、そのまま閉ざされて全てが遠ざかってしまいそうだ。花柄が人の姿であっても、肝心の花柄の形が甦らなければ、人の姿まで却って形を失う。生地の奥に湧き出るのは果たして模様なのか、やはり考え直すべきだ。それらは、何かの形を取ろうとして、互いに絡み合おうと湧き出すのを已められないもの共の姿に過ぎないのではないか。せめてその絡み合おうとする形でも見て取れれば、そっくりそれを花柄の形にしてしまえそうでもある。水に溶けたように、半分に破れた服の形は失われ、形といえば、水の動く形だけにな

った。水の形は、暗い方を向いて跪き、片腕に似た出っ張りを斜め下に伸ばした。その腕の形の届かない直ぐ先で溺れているのが私だった。しかし溺れていては何も出来ない。私であり続けるのも難しいし、それが初めから私でないのも、幾らかは確かであるしかない。いや、水の形しかないなら、確かさは水に独り占めされていて、私であるもないも、少しも確かさには与れないだろう。その私の代わりに、また水とは別に確かさに与れるものがあるなら、何に不足もなさそうだが、それも私と同じで少しも確かではない。しかし水に何の確かさを保っていられるだろう。確かさは幾らでも水の外に振り撒かれるのではないか。いや、水にさえ確かさを保てなくて、確かさの何を問えるのか。

　それならこれも少しも確かさとは関われないが、水の形は、私が溺れていたより先へと動いていた。肝腎な事はもう終わっていて、水は、その終わりにそれなりの見栄えを与えるために、その周りに並べて飾りになりそうなものを探しているらしくもある。私には近寄れない所で、湧き出すしかないものが湧き出していた。水だけがそこへ近寄れた。それによって私は、そこへ近寄れない自らを見失いさえしなければ、私であり続けられるのかも知れない。水はまた跪いて、そこを覗き込む形になった。その水に守られていた明るみに、湧き出すものの形が照らされるに違いない。それらは水の中の暗い方に映って、初めだけゆらゆらしていたが、直に硬い表面に覆われるように動かなくなって、何

処かへ落ちるように消えて行く。いや、消えるのではなく、消える様を私に見せれば、却って消えていた姿を現すのではないか。少なくとも私には、そのようだった。私の方から、それらに近寄るべきだった。それらと私の間に、まだ人の姿になっていない人の姿が、一本の柔らかい細い線のように流し込まれたのかも知れない。それは、水の求める、終わりを飾るものにもなりそうで、恐らくは、その人の姿を掬い取ったのは、その水の明るみに違いない。その人の姿は、現れた他の姿を全て、水の暗い方へ退けて近寄れないようにした。それからその人の姿は、自ら望んだように、その姿を水の明るみに曝したに違いない。そしてその人の姿は、そのまだ人の姿にならない形を、自らの中に様々に見出しては水の形の脇に並べるらしい。花柄がどんな形であれ、決してそこには近寄れないだろう。一方、水にはまだ、それがただ一つの頼みである程に、形が求められていた。それはしかし、水に知れているだろうか。水は形を求めて動くだろうか。そのような水の当てのなさに導かれて、まだ人の姿になっていない人の姿は、まだ人の姿にならない形を少しずつ見失って行かなければならないようだ。

　その人の姿はただ、水が遮るその向こうに、形を求めるしかない。それは、水が遮るその向こうの求める形に自らの姿を矯める事でしかなく、そうしようと、その人の姿は、撥ねたり捻れたり震えたり自らを様々に変えて、定まらな

い形を描き続けた。そうして自ずと選び取られるように、一つの姿でなければならなくなった。それは、一つの形に囚われずに踊り続ける姿だったが、或る一つの形だけは必ず避けられてもいた。その形とは、人の冷たい灰になった姿を見詰める形で、避けているからには、その人の姿にはその形は決して見えない。その見えない形を慰めるか楽しませるために、その人の姿は踊ろうと出来るのではないか。しかしその踊る姿は何と見窄らしいだろう、とその人の姿は思うしかなかった。そう思う人の姿は私たっだが、その私は、その人の姿から拒まれてもいた。或いは拒まれるまでもなく、私はその人の姿によって、私でなくなっているに違いない。いや先ず私を拒んだのは、私自らではないか。私のそのようにした事が、その人の姿となって、私はその人の姿とすり替われもするような身振りで、その姿に纏わり付くのを已められないのではないか。

その私の姿が、その私の姿の首を断ち切ろうとしていた。その方が、踊るよりも、見えない形を避けるのに確かであると思えて仕方ない。それが確かに確かであると分かる筈もないが、それも確かでないなら、その確かな方に賭けるのが悪い選択であるとも決め難い。私の姿の首は何度も何度も断ち切られ、その度に繫げられた。いや私の姿は少しもそんな事をしていない。その私の姿は自らの姿にその首を見出せていないからだ。しかし首がもしもうなくて、誰に首を断たれ何処へ持ち去られたにしろ、その私の姿は何も失いはしない。或い

は失われたものをそこに見出す私以外の者が居るだろうか。それを知るためにその私の姿は、自らの首を断ち切る振りを已められないのではないか。

　そう信じる私の姿が、球体の閉ざされた内面に体液を塗り込めるように、腕と胴と脚を静かに柔らかく拗らせて、少しずつ向きを変えて踊っていた。上も下も分からなくなって宙に浮かびたかったが、その私の姿が、人の姿である限り無理らしい。しかし浮かぶための宙など要るだろうか。踊りの動きが閉じた球体を描けるなら、上も下もなくなるのではないか。それらしくはある。しかしそれは、閉じてもいなければ球体でもない。踊りは何も起こさないし、踊っているらしくあるに過ぎない。その信じる私の姿が、冷たい灰になった姿を見詰めるらしく、見詰められていた。そう見詰める姿によって初めて、私は一人の人の姿に、なり得たし踊っているらしくもあれたが、その見詰める姿から姿を消す事は決して出来そうになかった。その私の姿はもう、私ではなかった。その見詰める姿に見詰められるだけの姿だった。

　そうして私でなくなる事によって、その私の姿は、見詰められる事から愈愈逃れられなくなったが、見詰められるままなら、どのような私でない姿にも姿を変えて、何処へでも消えて行けた。ただ消えては行けても、その消えた先でまた姿を現すしかないのだから、その姿を終わりには出来ない。その私の姿の現れた先は、必ずそれまでと断ち切られていて、それによって何度でもその私

の姿は私でなくなり続けた。そしてその都度、見詰め直されなければならなかった。決してその先へ送られる事も、その先から迎えられる事もなく、またその私の姿が、それを見詰める姿を何処かへ送る事も何処かから迎える事もない。それなら二つの姿は、二つで一つなのではないか。しかしその一つであっても必ず断ち切られている。そうして断ち切られても一つだった。それなら逆に、何故それは二つの姿であり得るのか。その私の姿がただ見詰められて、辛うじて二つの別の姿になれるのだろうか。いやなれるどころか、二つでなど初めからあり得る筈もなかったからこそ、その私の姿は、私ではなくなって、見詰められるだけの姿に留まるしかないのではないか。そこにはただ一つの事しかなく、それは一つのままに断ち切られるしかない。断ち切られて二つに分かれ、それぞれが別の一つになれるのであれば、断ち切られる事が繰り返されたりもしないだろう。

　そう信じる私の姿が、そう信じさせた私の姿を、何処へか知らずに済む方へ送っていた。その私の姿はもう、見詰められていないのかも知れない。私の姿を見詰めていた姿は、逆に、その私の姿でない私によって見詰められていた。そしてそれは、私の姿を見詰めてはいなくても、見詰められなくなった私の姿を見詰めてはいた。それを私が知る事によって、その私の姿は、私の姿を見詰められなくなった姿の方に帰って行く事も出来る。その私の姿は、そうしただ

ろうか、しなかっただろうか。分からない。その分からない事で、その私の姿は、私の姿を見詰められなくなった姿を、何処へか知らずに済む方へ送って行けたのだろう。そう信じる私の姿は、そう信じるしかないのを嘆くべきかも知れない。見詰められもせずに、その私の姿は何処へ行けるだろう。その私の姿はずっと、その私の姿を妨げる力だけに導かれていたのではないのか。その力が、私の姿を見詰められなくなった姿を送らせてしまう。しかしその力ももう、それで用済みなのかも知れない。その私の姿は、その力を呑み込むようにして、自らを見詰めようとしてみた。そうしようと出来た自らを、その私の姿は祝うべきかも知れない。その自らを祝おうとする私の姿は、それを祝うものを招き入れ、その私の姿はそれに応えられるだろう。

　そう信じる私の姿は、何処へか知らずには済まない方へ送られていた。その私の姿は、いやそうであるなら、そこが何処か知られないままで、どうして私の姿を認められるだろう。そしてそう認められないなら、誰がそう認めないのか。認めないのが私の姿であるしかないから、その私の姿は、まだそこへは送られていない。そう信じる私の姿が、招き入れられたものを眺めて、その眺められるのを信じられずにいた。その信じられずにいたものの姿は、自らとその招いたものを消し去ってしまうしかない。ただ眺めだけに後が引き継がれ、それはそこを拡がりながら、何処へか知らずに済むか済まないか知れない方へ送ら

れていた。そこでもそれは眺めであって、それに出来る事も幾つかありそうだった。眺めは先ず、眺めである自らを祝って祈るようだが、それに応えようとするものはなく、応えようとしてもそれを決して許しそうにない。どのようであろうと私の姿をも、それは許さないだろう。眺めは何も許さないから眺めであり、それが祝われるなら、眺めの他の一切が呪われてはいないだろうか。そう信じたくない私の姿が、何処へか知らずには済まない方へ送られていた。そこは、ただ私の姿を許さないためだけの所で、送られてしまえば、私の姿は、私の姿とは別の何かであるしかない。

　私の姿とは別のそう信じるその何かは、それをそうさせた力を弱め、そこにあるその力の元を打ち倒していた。私の姿は甦った。そう信じる私の姿は、何処へか、どうやら必ずそこでなければならない方へ先を急ごうとしていた。そして必ずそこでなければならないために、その私の姿は、私を捨てていた。その姿は、その姿であるそこを通り過ぎようと、その姿であるのも已めようとする。そこは通り過ぎられなければそこではないし、通り過ぎられてしまえばまたそこではない。その姿も、その姿でなくならなければその姿ではなく、その姿でなくなれば、そこには何もない。それでもその姿は、その姿で有り続ける。急がれている先が、そのまた先へ先へと、その姿を送り続けるからだ。そう信じるその姿は、そう信じた決心をも、先へ先へと送り出していた。或いは、決

心などする前に、そう信じなければ先を急ごうとも出来ないと分かっていたなら、そのようにその姿を導くその先を、更にその先へと送り出しているのかも知れない。そのようにその姿がその先に導かれているのなら、その姿とその先は、導き導かれる違いの他は、そっくりではないか。その姿の先は、その姿を導く姿なのではないか。

　そう信じるその姿を先へと導く姿は、その先を急ごうにもその先がないのを知らされなければならず、先のないその姿は、姿でもなかった。それでも何かではあるその何かは、それが何かを知ろうとするしかない。或いは、それを知ろうとも出来ないのかも知れないが、そうであっても、何かを知ろうとはするしかない。いや、それもどうだか分からない。しかし知ろうとも出来ないなら、どうして分からないと知れるのか。或いはそれも、知れてはいないのかも知れない。それなら、その知れない姿を、そこに導き出そうとは出来ないだろうか。しかしそのためには、その先がなければならないが、先はないままだった。

　先がなくても後ならある筈だ。そう信じる何かから、そう信じる姿が導かれた。しかしその姿はそれを、ただの思い込みで、そうは信じられないと知るしかなかった。それでもそれはそう知った姿ではあり続けて、そう信じる姿は、そう信じられなくなっても、そう信じる姿を、次のそう信じる姿へと受け継がせて行けた。それはその先に違いなかった。そのようにその先は導かれた。そ

う信じるその姿は、もうそう信じなくて構わないと知らされていないだろうか。そう知らされたと信じる姿は、何も求めずにでもただただ振り返り続けたが、それはその先でも後でもない方へだった。そのようにしてその姿は、それと似たものを探していた。似たものは、似続ける事によって受け継がれるのではないか、その証しが求められていた。先でも後でもない方はその求めを拒んだが、その拒絶こそが求められていたとしたら、その姿は何も求めずに振り返り続ければ良い。そう知れたその姿は、もう振り返りはしないが、その姿をその導かれるべき方へ導いて行けた。そしてそう信じる姿はもう、そう信じなくても済んだ。その姿は、どちらでもない方へ向きを変えた。その姿は、向きを変える度に、どちらでもない方がその姿を迎え入れようとした。その姿は、その誘いを乗り越え、どちらでもない方にも更に知られていない方を向こうとした。その知られていない方を向けるのは、その知られていない方から来たものだけだ。その姿は、どうしたらそれになれるのか。

　そこへ、知られていない姿が来た。それはその姿には知られなかった。知られていない姿は、それでもう消えて良かったので消えた。その知られていない姿の消えたい姿を纏った、それを知らされない姿は、その姿をも知れない。その自らを知れない姿は、消えた知られていない姿に、それを知らないまま自らを委ねるしかないだろう。その姿は、それを知らされないまま、その姿を知らさ

れる方を向いていた。そしてその知らされる姿を知った。その姿は知らされるだけで、その姿は尚それを知らないままの姿であるしかない。そうしてその姿は、知られていない姿になった。いや、元々そのような姿に戻ったのかも知れない。

　その姿はその姿を知っていて、それがその姿の全てだった。それは、その他の知られていない全てと結び付いて、その姿を知られていないものにしている。とすれば、知られていないものは何もない。ただしかしそれが、その姿に知られる全てでもある。その姿はそれを知るだろうか。いや、その姿は問われない。誰に問えるのか。しかしそれもまた問いではないか、たとえ問いは問いを生み続けるが故に無力であるにしても。そのようにして、その姿は知られなくなった。

　その知られなくなった姿は、それでもその姿を知っていて、それがその姿の全てなのだった。その姿は、終わりを知らず、終わりを知らないのも知らず、だからそれはその姿を知れるが、その知れるのをその姿は知らない。それは知る事の内に入らない。だから終わりは知られない。とそのようにして、その姿は終わるだろうか。或いは終わるのではないようにして、その姿をその姿に還すのだろうか。それでももしその姿が向きを変えられるなら、それは、それをそれに還すのを已めて、またそれでなくなれるのだろうか。そうかも知れない

その姿は、そう知れるのをその姿の全てに出来るだろうか。しかし知れるも知れないも、何の係わりがその姿にあるだろう。そのようにしてその姿は、それをそれに還す事も出来る。

　そのようにしてそれは姿でもないが、元々のそれに戻っただけかも知れない。それは、それをそれに還すまでもない。いや、それをそれに還すのがその全てかも知れない。それは知られないし、知られないとも知られない。そのようにしてそれは、そのような姿であるのかも知れない。しかし姿とは何だったのか。なぜ姿だけは還って来るのか。余りに明らか過ぎて答えようがないか、そうでなければ、もしそれに答えがあったなら何も始まりはしなかったのか。それならそれは、そのような姿としてその姿であるしかない。ただそれでもまだ、そのような姿でないものを、その姿は求めるだろうか。求めるとしたらその他にはないが、それを求めてその姿がその姿であり続けるなら、恐らくは何も求めなかったのだ。それともその姿にはもう、求められるものは何もないのか。そうだとして、その姿は何も求めずにいられるのか。その答えの顧みられないまま、そのような姿だけが、自らに求められもせず、そのようにあるしかない。そのようにしてその姿は、そう信じたいだけかも知れないが、何も信じようとせずにもいられる。しかしそれでは、それはそれに還されてはいない。（二〇〇五年四月十六日）

（女ばかりほんの僅かずつ見覚えのある顔が…）

＊

＊

＊

女ばかりほんの僅かずつ見覚えのある顔が、どれも何処か三角形に取り憑かれたようなおかしな顔になって、震えるかのように縮まろうとする体で蠢めいている。その中を細い白い棒のように擦り抜けて、誰かが指し示した小さな虹を振り返ると、私はもう空を傾かせていて、低く傾いた方からの冷気を真っ直ぐに受けなければならない。そうなってしまっては女達はもう女ではなく、二本の細い棒を縄で組んでそれに服を着せただけのものでなければならない。冷気に背けた私の体は、丸い穴に嵌り込みそうで、その覗き込んだ何もない中に私は、ただ裏返されただけで未だ女であるらしい姿を見ようとしてしまう。それを避けて冷気に向き直るなら、私は空を速く飛ぶ鳥のようであるべきではなかったか。垂らした両脚をぶらぶらさせてその私を眺めている少年に、私の姿が飛ぶ鳥のようであるかを尋ねた。少年は裸の全身を真っ黄色に塗られ、まだ

乾いていない絵の具は爪先から滴り、それが降り掛かって私の翼を重くし、速く飛ぶどころか私は地べたを這い回るしかない。骨だけは残したい、と私は少年を仰ぎ見て嘆いた。地べたに滲む強い酸が私の肌を溶かし始めているからだ。棒に過ぎなくても女の服を着せておけば女のようには見える者達を呼び集めると、彼らは彼らだけでコソコソと話しを合わせた。少年を降り立たす場所を作る相談に違いない。

　それには昨日まで女だった犬を一匹殺さなければならないが、その犬が見付からない。彼らの服の裾が鉛のように重くなる。それを軽くする仕方を知るのは私だけだが、彼らは私を踏み付けてさえ私に気付かない。逆さの犬が礫にされた。しかしそれは犬ではなく、犬の毛皮を纏わされた小さな女の屍骸でしかない。いやそれは女の屍骸でもなく、ただそれに似せられた木偶でしかない。それで構わない。肝腎なのは中身よりその犬らしい外見なのだから。しかし少年はその前に降り立とうとはしない。彼は寝床が欲しいのだが、その寝床は私が生きた雌犬を引っ張り込んで独り占めしている。私の溶けた肌が、その雌犬の毛にべっとり付いて、犬は息絶え絶えに仰け反るしかない。それは少年の愛犬で、私を見下す彼の目は私を睨み殺そうとしている。私は女の服を着た棒切れ共に一斉に踏み付けられて長く呻いた。それでやっと雌犬が彼らの目に留まり、寝床から引っ張り出されて殺された。その前に少年は降り立った。私は諦

めて体の向きを変え、何もない穴に嵌り込もうとしていた。

　改めて覗き込まれた穴は、何をどれだけ蓄えても埋まらない程に広そうだし、実際私の知り得ない物までが脈絡なく幾らでも収まっていそうだ。中で際立つのは、高く掲げられた黄色の絵の具の捏ね回される塊で、それだけは恐らくは穴の中にあるべきではないので、そのように際立たねばならないに違いない。私はそれらに背を向けるしかなく、そのようにして背を向けた方に直ぐさま落ち込んで行くのも分かった。どちらを見てもグリグリと盛り上がる形のものばかりで、穴らしい形は何処にも見付からず逃げ場はない。黄色の絵の具の塊だけが同じ高さに見上げられ、掌に錘を握っていたので、体を秤にしてその黄色の重さを量った。そうした積もりだったが、溶けた自らの体の肌を掌に掴み取り、その拳を振り上げただけだ。腐った肌など要らない、体全体を差し出せ、と絵の具の塊を掲げる恰好をする者の、私を詰める声が聞こえた。それは犬の毛皮を脱ぎ捨てた木偶で、その表面には細い黄色の曲線が隈無く彫り込まれている。同じ絵柄が私の体中の肌にも彫られて、溶けていた肌が硬く引き締まった。もし他人に知られたら、誰も追って来られない独りだけの場所に逃れてさえ生きてはいけないだろうと思える程、私はその刺青を恥じた。そして私はもう、そのような場所に逃れてもいるのだった。

　目は閉じられない。見渡しただけ同じ絵柄が先へ先へ彫り込まれてしまうの

を避けようと、木偶に体当たりを試みた。しかし向かって行ったのは私ではなく私の形をしたつるりと白い木偶で、私はそれを眺めながら、黄色の曲線の彫り込まれた木偶の名を呼ぼうとするだけだった。つるりと白い木偶は、見直すと長らく私を匿った穴の形をしていた。それを私の形と見紛ったのは、私がまだその穴から出て間もないからだ。その穴の形の木偶は、組み合うのも叶わず、黄色の曲線の彫り込まれた木偶に吸い取られるようにして消えた。それでも穴の形だけは残り、私はその中に木偶の名を吹き込んだ。木偶はもう、絵の具の塊を掲げてはいない。その解き放たれた黄色は辺りを満たして、元々その黄色だけがあって、そこに後から様々な形が呼び込まれて初めてこの世界が出来上がったかのように、黄色はそこに馴染んでいた。

　木偶は私に呼ばれた名を拒んで、自らを「白く丸く真珠のように出来上がったもの」と呼び、私を穴の形の中に引き入れた。肌の彫り物が消されて私の全身はつるりと白くなったが、その見掛けの奥の何処かに刺青はそっくり残されていると思えて仕方ない。私が穴の形になって行くに連れて、木偶の腹の裂け目の奥に白く輝く水の湧くのが見えて来た。それはしかしそのまま木偶の内に流れ込んで、溢れる気配はない。穴の形は、穴そのものが、それより大きなものの内の何処かに陥没して行くようだった。私はその陥没した中で、水に触れる感じもないままに溺れた。私を溺れさせるのは、陥没した中を覗き込む木偶

の目なのだ。その小さな目の中で白い水が速い渦を巻く。その水は私から奪い取ったものではないか。その水に守られて私は今まで生きて来られたのではないか。木偶は自らの頭の後ろから手を差し入れて、その目の奥の水を一撮み取り出した。それは木偶の掌の上で玉になってコロコロと転がり、その一雫が跳ねて私の片目を射たのかも知れない。その痛みで私は、全身をバネのように大きく傾かせて陥没した中から転げ出そうになった。しかしどうやらそれは私の半身で、もう半身は更に深く陥没した中に搦め取られるらしい。木偶はそのどちらかを抱き上げて、自らを飾り付けるように、その胴に巻いた。抱き上げられなかった方の私の半身は、黄色の中から木偶の影の振りをして現れたものによって取り去られた。

　いや、そのどちらの半身も私ではないし、私とは似ても似つかない。私はその、木偶の影の振りをするものだった。それでもそのようなもののまま、私は陥没した中で木偶の目に覗かれて溺れてもいた。それも、木偶よりも木偶らしく、息の継ぎ方も忘れて突っ立ったままで。溺れて藻掻こうとすればする程、愈愈ただ突っ立っているしかない。見渡せる限りの黄色は私を救おうとしていたが、ただ木偶だけがそれを拒んで私と黄色を隔てた。私の目の向く先でその黄色は褪せて、別の色が流し込まれれば、黄色はそれに混ざるのも叶わずに退くしかなさそうだ。そしてそれが私の目にだけ褪せているのも明らかで、視界

から逸れようとする辺りでは、黄色が滾々と湧き出し、一旦褪せた色をまた激しく輝かせていた。であるなら私は、その褪せた色の中でだけにしろ、溺れる理由はない。私は目の向く先の褪せて行く黄色の方へ泳いで進んだが、進んでいないのではという疑いも増す。木偶はまだ私を覗き込むだろうか。進みながらそれらしい方を何度振り返っても、木偶の姿は捉えられなかったが、私の目を逃れようとする気配だけが微かに残るようで、木偶がもう側に居ないとも決め兼ねた。振り返らずにおこうとすると、それに抗議でもするように、その木偶の気配の残る辺りが扇のように静かに裏返った。

眠りから覚めたような感じが一瞬襲ったが、もっと酷い眠りに囚われて、僅かな自由まで奪われたようでもある。何が私なのか分からないし、それを苦痛とも感じられない。寧ろその感じられない時間が直ぐに過ぎ去るのではという予感が苦痛で、その予感を振り払えないまでも苦痛を紛らすには影の振りをするしかないが、どうやら扇のように裏返った辺りに器の底の水のように呑み込まれて行くらしい私には、ただそのようであるらしい以外は許されていないらしい。眠りの事がまた気になり出した。眠りから覚めたのか、別の眠りに落ちたのか。それとも覚めたきりなのか、眠るきりなのか。或いは、そのような事を気にするのは、影の振りをしていたものであって、私はその影の振りをするものとは違うまた別のもののようでもあり、その事がどのようにか関わってい

そうな何かに身を苛まれているのかも知れないが、それを感じようにも術はない。

　半身と半身とに分かれて激しく投げ出されたように横たわっているらしい。それは私ではないかも知れないが、二つの半身が震えるかのように起き上がろうとしているのは間違いなかった。どちらにも色はないが、片方は全身にびっしりと細かな曲線を彫り込んでいて、もう片方はつるりとして瑕一つなく、どんな汚れも受け付けそうにない。半身ずつなのは首から下で、顔だけはどちらも一人前だが厚みはなく、正面に向けられていないので顔付きにどれ程の違いがあるか分からない。その両半身は、やっと膝立ちになって少しずつ縮まろうとするように、彼らを隔てる小さな鋭い裂け目を覗き込んだ。彫り物をした方の顔が段々と黄色に染まり、それに連れて、つるりとした方の顔は赤味を増す。私は躊躇いなく赤い面を選んだ。すると赤は、色とは別の何かだった。赤が仮に色の一つに収まっているのは禍々しくも奇妙で、そこに何か謀が企まれていると見えた。今の今までその赤について迂闊にも何も考えず、調べようともしなかったのが悔やまれた。そのように初めて知れた赤だったが、それを選んだからと言って、その顔の半身が私に成る訳もなく、その赤をどうにも出来ない不甲斐なさを思い知るだけだ。

　不意に苦痛紛いのものが走り、その見掛け倒しであるのを見抜けてもどうに

も出来ず、それに刺し貫かれるのが取り敢えずの私であるよりないなら、私はその紛い物の苦痛に刺し貫かれた自らを棒か何かのように引っ掴んで、それを裂くようにその場を退いた筈だった。それから私は長い間赤い色を、それがどんなものだったか思い浮かべられなくなるまで探し回り、何時の間にか、全身を包める赤い布を纏っていた。そしてその私は、雌犬に水溜まりの水を遣っている少年の姿を見下ろし、小さな長方形の花びらの黄色の花を手にして、それでそっと唇を微かに撫でてから、その花と雌犬とを交換しようと少年に持ち掛けていた。交渉が纏まると、少年はずっと連れ添った愛犬を売った自らの行いを悔いて翻筋斗打ち、底無しの水溜まりに身を投げた。水面に長方形の黄色の花びらが一枚、渦の中心でくるくると回り、頭を垂らす雌犬はそれに黒い鼻先を近付けて動こうとしない。女が後ろから声を掛けて来たと思うと、女は私の体から赤い布を剥ぎ取って自ら纏い、叫ぶような笑い声を立てて男を誘う科を作った。直ぐに同じように赤い布に身を包んだ女達が、喧しく寄り集まって来る。ただそれでも私は赤がどんな色か思い浮かばないままだったが、この女達の次に私の目に触れる赤からは、その色を目に焼き付けて、何時でもそれを思い浮かべられる筈だと訳もなく信じられた。

　裸の私は、私の体より大きな雌犬の腹に獅噛み付き、水溜まりから雌犬を引き離そうとした。前脚が水を引っ掻き、犬の全身の毛が段々と濡れて行き、冷

えて強ばる体の私は、そこを頑として動かない犬にただぶら下がるだけのようになった。女達が面白がってそれぞれに犬の背中の毛を毟り取り、それを一度口に入れて吐き出すと、それは仄かに赤味の差す鳥の羽になって辺りに舞り、温かい風が吹いてそれを私の濡れた身に纏わせた。女達によって私の体は犬から引き剥がされ、手足を取られて、女達の思うようにされた。その私の姿のただ赤くしか見えないのは、何とも無様ではないか。そうして女達は私を踊らせている積もりらしい。まるで木偶だ。

「まるで木偶だ」と私が声にして言うと、私の耳元に一人の女が、「あなたは今、自らの名を呼んだ、分かりますか？」と囁いた。どういう意味か尋ねようと振り向くと、赤い布を纏った木偶ばかりが折り重なっていて、私は負け惜しみのように、それに向かって「成る程、そういう意味か」と吐き捨てたが、その虚ろな声が何の意味も分かっていない事しか表していないのは明らかで、その声が私を何処までも辱めるようだった。「二度と声など出すまい」とそれは声になった。「何故だ」とそれがまた虚ろな声になってしまう。私は耳を塞いで、態と何事かよく分からない事を次々に思い浮かべた。それは一々声になって、耳を塞ぐ程、口から溢れ出す生卵がボトボトと地べたに落ちてそれらが私の腹の中でヌルヌルと掻き回されるような感じに囚われた。その生卵らしきものは私の腑が形を変えたものではないか。だとするなら、直に私の腹の中は

全て地べたに吐き出されるだろうが、それを恐れる気持ちだけは声にならなかった。生卵は止まった。それともただ、腑が全て吐き出されてしまっただけか。

耳を塞ぐ四つん這いの私は、一から出直しだと思い自らを鼓舞するためにそれを寧ろ声にしたかったが、腑を全てなくしたから、出そうにもその声はなく、手を耳から離すと、両腕は鳥の羽のように拡がって風を孕んだ。赤い私の姿は、水に溶ける紙のように失われた。眼下に見下ろされるのは、二つに裂けて啀み合う、しかしそれきり何も起きない景色だった。その二つはしかしどう違うのか。どちらも命の気配のないのっぺりとした緩やかに丸みを帯びた硬くも柔らかくもなさそうな表面が続くだけなら、何のために啀み合うのか。互いに己の有り様を隅々まで暴かれてしまうのが憎いのか。他に色も形も見当たらないが、風に乗る翼にはそれは幸いで、何か目に留まれば均衡を失い、裂けた真ん中の暗い辺りに墜ちるだろうか。いや色も形もあるのに私に見えていないだけなら、墜ちる機会を奪われた翼は何時までも、木乃伊になってまでも、飛び続けるしかないのか。裂けている二つの景色は、片方が赤く片方が黄色に違いなく、その差が作り出す影が何処かに延びているに違いない。そんな望みはしかし、飛び続ける恐さから逃れたいためのものでしかない。そんな誤魔化しでなく、腹の底からの叫び声に縋り付き、出来るならその声で風を真っ二つにでも切り裂きたいが、声はない。

そう見えてしまうだけなのか、どちらも、私の冷たく脹れた腹を狙うべく上を向いた、延び続ける刃のような景色ではないか。二つの景色は少しずつ古びて汚れて、その刃が毀れるように段々と朽ちて行くのなら、その刃の毀れる程、それに触れて裂かれる腹の肉はギザギザで形の定まらない酷い傷を負うだろう。しかしそのような傷を色々に思い描いて、順々に想像の肉に重ねて刻み込んで行くのは、掛け替えのない慰めでもある。その重なり過ぎて、もう刀傷だか何だか分からないような肉の姿は、楽しげにダンスでも踊るようで、何時の間にか私もまたその肉の乱舞に溶け込んでいて、ヌルヌルと踊り狂う自らの姿のみを追っていた。その内に、毀れだらけの二枚の刃は、私の疲れて強ばる両腕の翼と見紛われ、風に乗る事と肉の中で踊る事とが混ざり合い、その混ざり合った中から垂直に上に向かう力の漲るのを感じるが、その力は、風に乗る事も踊る事も、何れは禁じてしまう力に違いなかった。その力は何かに似ているが、その何かは私の生まれる遥か前に疾っくに失われ、誰もそれを私に教えられないようなものかも知れない。その似姿だけでも、せめて目に出来るなら、他に何もなしで遣って行けるだろう。しかしそれをその似姿と私に見分けられる筈もない。精々が、私に目に出来るものの一切を、その似姿の面影と見做す事にでも賭けるしかない。しかしその賭けもその勝ち負けは定めようがなく、得るものがないなら徒労は負けに等しい。それとも徒労のみが残るなら、他に何も

失わなかった事を以て勝ちが導かれるだろうか。いや他に何も失わなかったと、どうして決められるのか。寧ろ賭けた瞬間に、もう一切が注ぎ込まれていて、それを取り返す術がないなら、賭の結末を待たずにもう何もかも失っているのではないか。しかしそれを恐れて賭けないでいたとして、何が残り何が出来るのか。何も出来ないのなら、否応もなく、もう疾っくに私はそれに身を賭していないだろうか。

　そうさせられていて、今更何を始められるのか。知らずもう始まっていて、始まったからには、それに見合う終わりの定まっていない筈はない。ただ見えたと信じられるものだけをその終わるまで見るだけに他なく、始まりと終わりも、初めから何もなかったのと同じに閉じ合わさるに違いない。もし仮にそうした見通しが外れているとして、それで何が失われ何が得られるのでもないし、その見通しもまた似姿の一つの面影に過ぎないなら、それに拘る理由もないのかも知れず、それへの拘りを捨てたところで、始まりと終わりの途中に置かれた身を捨てられるのでもなさそうだが、やはり束の間でも声が欲しい。腑は再生しない。

　或いはその似姿の面影の端なりを僅かなりとも震わせられる声を、一度位は何処かで聞いていなかったか。欠けているのは、それを思い出す力か。それともやはりそれを聞いた体験そのものか。景色が二つに裂けているのは、そのど

ちらとも定め難いからではなのか。いやそれは、二つに裂ける事によって、そのような声を聞き取ろうとしていないか。そしてその声が、私などに与えられる声ではなく、その似姿の面影の裏側辺りに籠もって、その似姿の面影を揺り動かす声のようなら、二つに裂けた景色は、自ら耳となって自らの声を聞き取ろうとする姿に違いない。閉じていたのでは耳ではあり得ず、聞き取ろうとする耳であるには、裂けて開かれていなければならないからだ。しかしそんな二つの景色はもう私の前から消えていて、踊り狂っているにしろ、その私自らの姿も見失われ、風と肉の混ざり合うだけの中に漲る力に、ただ屈しているらしかった。更にその風と肉も掠れ声のように消えて行くなら、風に乗る事や肉に溶けて踊る事も、もう禁じられたに違いない。そしてその力が何に似ていようと、それについて、私はもう、何も知りたくはなくなった。その似姿が私の前に現れるなら、私は身を捨ててでもそれから逃れたい。それより私は、確かめようもないが、自らが既にその似姿にされているのではないかと恐れた。しかし確かめようがなければ、その恐れからは逃れられないし、その似姿かも知れない自らを、何時まで経っても振り払えずにいなければならず、その身を捨てるのも叶わない。

　その捨てられない身は二つに裂けようとして、　自ら耳にでもなりたいのか、二枚の刃の羽のように開かれる姿を求めていた。　しかしそれは、求めても求め

られないまま、ただ緩やかに下って行く扇のように拡がりながら引き延ばされて行くだけらしい。そしてその引き延ばされて行くそれは、ただそのようなものであるしかなく、そこに、私の姿のみならず私に知り得たものの何の面影さえ見出せない。そんな面影などもう要らないのか。要らないのだ。力の似姿かも知れない自らへの恐れが、それを要らなくさせているのだ。そう決め付けた上で私は、極幼い頃を除いてずっと蔑ろにして来た化粧を無性にしたくなった。私に知り得たものの面影を、幾らかでも色形として出来る限り我が身に引き寄せて表しておきたい。それは十分過ぎるという事はなく、出来る限り厚く厚く塗り込めた化粧が望まれた。それには先ず土を焼いて、その土台となる顔面を手に入れなければならないが、土などある筈もなく、それに替わるものを私は、扇の拡がりから掴み取っては捏ね回す振りをし、唾を吐いては混ぜ合わす振りをした。そのヌルヌルした中に、逆さにされた白く輝くツルリとした体を丸めた人の小さな姿が、何尾もの小魚の跳ねるように現われては消えた。その人の姿が絶えると何も残らなかったが、扇の拡がりの表面を小魚達はクネクネと緩やかに泳ぎ下り、そこに糸のように細い黒い筋を何条も描いた。筋は小魚が見えなくなっても忙しく揺れ動いて止まらず、滲むような赤と尖るような黄色に段々と色分けされた。それに連れて扇の拡がりが熱く焼けているのは明らかで、扇の形はその末広がりの方の両縁から段々と内に丸め込まれて狭く縮み、持ち

運びさえ出来そうに見えて来る。その熱に、突き出た脳天を炙られて、叫び声を上げる逆さにされた木偶が、私に助けを求めているのかも知れなかった。取り敢えずその逆さなのを直そうとしたが直らないのは、それが、硝子のように透き通った、容易く手に取れそうになくゴツゴツした塊の中に閉じ込められているからだ。叫び声に聞こえたのは、その透けた表面に映り込む白い小さな輝きの泳ぎ回るような点滅だったろうか。その点滅を追ってベロベロとその塊を舐め回す舌ビラが、極彩色に彩られて見えた。その舌に乗った唾の流れが何処か遠くの光りを受けて様々な色を輝かすだけかも知れないが、私の化粧への欲望はそれで満たされるようで、自らが力の似姿であるにしても、それへの恐れは失せて行くと感じられた。

恐れが失せたのではなく、極彩色の唾を纏って突き出される舌ビラこそが力の似姿であり、それに気圧されて恐れさえ抱けずにいるのではないか。そしてその舌ビラは、他に何もないなら、縮み続ける扇の拡がりから益々激しく放たれる熱の、炎のように揺らめく先端であるしかない。それは舐め回すだけでなく、透き通った塊に刺し入って中を搔き回すようでさえある。逆さの木偶はその熱に溶けるように、その脳天の突起だけを更に大きく膨ませて残し、木偶としての姿を失った。その突起としてだけの姿は真っ直ぐ下を指し、真上に突き出される舌ビラと真っ向から向き合うと、透き通ったゴツゴツした塊はもう溶

けて消えていて、それなら二つは直に触れ合っていなければならない。扇の拡がりのようだったものはもう、両縁からすっかり丸まって、二本の細い筒を揃えて密着させたようでしかなく、扇の要だった方を鋭く尖らせて、縮む限界を超えたのか、縦に裂けて二本の真っ直ぐな細長い角（つの）の形に弾け飛んだ。熱も何処かに弾けて舌ビラは呆気なく消え、木偶の脳天だった突起だけが真下に突き刺さって砕けた。砕いたのは、唸りを上げて転がり続ける二本の硬い角に違いないが、ただそっと触れれば二本共温和しくなった。角は、巨大な直角貝のまだ化石に成る前の貝殻に見える。その殻の奥の方にまだ何か潜んでいそうであり、何としても掻き出さなければならない。中が狭過ぎて掻き出せないなら丸ごと砕くしかない。それで二つを激しく打ち合わせても欠片一つ落ちる気配もないが、その突き上がるような響きは、真珠のように出来たものを呼ばわっているとも聞こえ、それに応えようとするなら、その響きの先の空白を真珠のように出来たものと見立てるしかない。

　そうしてそこに姿を浮かび上がらせた実際何で出来ているか分からない真珠のように出来たものは、土を焼いてそれを割って鋭利な形にした白っぽいものを振り翳す者達に、執濃く追われていた。彼らの手足の敏捷な動きは、振り回される刃のように空を唸らせ、全身がそれぞれに精確な音を奏でる楽器のようではあったが、音の鋭さを競い合うばかりで旋律は拒まれていた。それでもそ

の音の集まりは、何処か知れない遠くの穴か何かの空気を震わせて、そうして出来たか細く冷たい響きを、間を置いてでも微かずつ、こちらへ向けて漂わせていないだろうか。それを聞き取れるのは、二つの尖った貝殻の狭過ぎる穴の奥だけに違いなく、それも片方ずつでなく巧く二つが組み合わさってだけ聞き取れそうだが、激しく打ち合わされるままでも、その響きを聞き取ろうと出来るのか。白い焼き物の破片を振り翳す者達の目当ては、その響きを聞き取る尖った貝殻である彼らの体の音を、一つの旋律に乗せるだけの技倆を身に付けられるのだと、当て込んでいるに違いない。しかし、その響きの元である彼らの体の音を途切れさせないために、真珠のように出来たものを追い回すしかないなら、そのようなままどうして貝殻にまで行き着けようか。それとも彼らは、貝殻の穴の奥にまで真珠のように出来たものを追い詰めて、そうしてまでも尚そこで音を奏でるために、ずっとそれを追い回していられる術を心得てでもいるのか。

　木偶の脳天だった突起の砕けた細かな破片の一つ一つが、また硝子のような塊を纏おうと、透き通ったドロリとしたものをその表面から滲ませていた。それを、体を玉のように丸くして丁寧に抓み上げて自らの脳天の割れ目に落とし込んでいるのは、つるりとした白い木偶で、それを私の姿と見立てても何の障りもなさそうではあるが、それの私の姿となってしまっては何か居たたまれな

く、真珠のように出来たものが呼ばわれている方を後ろめたく窺い見なければならない。その私の姿から見ると、そこからは何かに見立てられそうな何ものも浮かんでは来ない。白い焼き物の破片を振り翳す者達の目にもそうらしく、彼らの体は入り乱れ狼狽えるばかりに見える。割れ目の中は直に破片で一杯になり、透き通ったドロリとしたものが溢れて、項を伝って白い木偶の体を少しずつ包んで行く。それに連れて木偶は、体を玉のように丸くするまま段々と体の動きを鈍らせ、やっと抓んだ破片も少し持ち上げては落としてしまうようになる。その一度抓まれて落ちた幾つかの破片は、透き通ったものをそれまでに増して激しく滲ませ、透けた玉になって脹れて行き、中に閉じ込められた破片は、段々と逆さにされた木偶の全身の形を帯びた。それらはつるりとした白い木偶ともうそれ程大きさだけは変わらないが、どれも頭だけが酷く大きくて体の半分程がその脳天の突起だった。

　その間も直角貝の二つの貝殻は誰かに激しく打ち合わされ、真珠のように出来たものを呼ばわる響きを鳴らし続けていた。見立てられた私の姿は、白い木偶から去っていた。私の姿は、真珠のように出来たものを呼ばわる声の発せられる辺りに移ろうとしているのかも知れない。そうさせまいとする力が、私の姿の輪郭を炙り出そうとするようだ。その輪郭によって先ず私の二つの目が、何ものの輪郭も浮かんで来なかった辺りに描き切られた。もうその目から逃れられな

いのかと思うと私には、あちこちに散らばって漂う透き通った塊に閉ざされた逆さにされた木偶が羨ましく見えた。つるりとした白い木偶だけが動かないが、それはもっと羨ましい。私は漂えも出来ず動かずにも居られない。両目は有り得ない程に硬く冷たかった。打ち合わされる二つの貝殻の突き上がるように響いて震えるままの、その狭い穴の奥を見抜こうとするための、硬さと冷たさなのだ。それを備えた目だけが、激しい動きや震えや響きを突き抜けられる。その両目はしかし点のように縮まって溶けて流れて消え、その目から逃れられない私はただ後を追うしかない。二つの貝殻を打ち合わせているのは、振り翳していた焼き物を捨てた者達だった。貝殻を強く握り締められる者だけが力を益々漲らせ、それを囲んでやっと貝殻を掴む者等を段々に弾いて、それぞれの貝殻がただ一人ずつの手に取られると、それはもう打ち鳴らされなくなった。それを手で取った二人は、元々その貝殻の穴の奥にずっと身を潜ませていた者だったのではないか。そしてそれぞれの貝殻の奥に籠もる二人が結ばれたなら、それによって生まれる筈の私ではなかったか。溶けて流れた私の点の目が、針の穴のように狭い貝殻の奥を覗き込めたのか、中は奥に行く程に白く澄んで明るく空っぽに見え、その白く澄んだ明るい空っぽを、目の力を目一杯振るえば取り出せるのかも知れなかったが、私は迷わずその中に身を捩じ込ませた。空っぽは呆気なく失われ、拒まれた私は、待ち構えていた硬く冷たい私の二つの

目に激しく突き当たって、その両目の間の狭い割れ目の奥のずっと曲がって行くまま果てのないような透き通った細い通路を、水のように順々に満たして行かなければならなかった。

　その細く曲がって延び続ける水の、その後を影のように追う似姿にだけ力は漲って、他の姿を悉く弾き消し、その消された跡のそれぞれに僅かずつ残る肌理細かな白い粉のようなさざめきが、真珠のように出来たと見立てられたままの辺りに集められるのなら、それらのゆっくりと一塊に成ろうとする姿がそこに求められた。しかし固まろうとするのは何か。消されたものの姿か、その後にやって来たさざめきか。水を追う水の似姿にそれは明かされなければならないが、その明かされそうになる度にその塊に成り掛かる姿は弾けて消えた。そしてそのせいで水の似姿はもう水を追えていなかった。それでその影のようではなくなって、それでもそれは水の似姿なのか。しかしそれがどのようにかそこにあり続けるのなら、水の似姿であろうとなかろうと、一塊になろうとするのが何であるかは明かされなければならない。いや、水を追えなくて、何かを弾き消そうにもその前に立ち現われるものがなくて、一塊も何も求められようがないではないか。それでもそれだけがそのようにそこにあり続けるのは、恐らくは、その姿を弾き消してくれる他のものから遠ざかり過ぎてしまったからだろう。それならもうそれは水の似姿でなくて少しも構わず、自らをどのよう

にも呼べる。しかしどう呼べるだろう。期待を込めて他の呼び名を呼び求めてみても、その叫びとなったものはただ、何の響きも返さない空っぽを呼ばわるだけではないか。その叫ぶ姿の何処に水の姿を見て取れるのか。水に似ても似つかないまま水の似姿と自らを呼ぶしかなく、しかしそうであるならそれは、呼ばれるものとしては水の似姿と別のものではありようもない。

　その脇を、一回りして戻って来たかの透き通った通路が曲がる音を軋ませて行き過ぎると、自ら水に成る術が水の似姿に備わるようだったが、それは穢れた衣を脱ぎ捨てるように直ぐに捨てられた。その捨てられたものが何の響きも返さない空っぽに沈むと、そこを目指すかの数え切れないもの等に繰り返し熱く密に呼ばれ、その呼ばれるままに止め処なく切り分けられてあらゆる方向に伝わってそこを満たそうとするようだ。いや水の似姿がそれを捨てたかどうかが既に怪しい。脱ぎ捨てる振りをして、その脱いだものの方に、自らを丸ごと流し込んでいたのではないか。そうして水に成る術と共に数え切れず切り分けられた水の似姿は、空っぽの何処を経巡っても熱く呼ばれ続けるだろう。それを誰に聞き取らせるべきか。それに相応しい耳を持つ者を求め、水の似姿は空っぽを経巡るに違いない。いやもうそこは空っぽである筈もなく、水の似姿は自らの内に収まって、そこには目に見えない程の小さな明るい点が満ちていた。水が満ちている証しなのだ。するとその触れられるのを恐れるように、水はそ

こから逃れようと脹れながら泡立ち、行き過ぎた通路の水を呼び戻すためのように、それに向けて叫ぶための形を取ろうとするようだが、それに抗うように、小さな明るい点は、それら同士の間の微かな位置のズレさえ嫌うかのように、一つとして動こうとしない。それらに隙なく閉ざされて、望む形の得られない水は、自らの力を当てにするしかないが、力の漲っていた面影もない。

　それでも数ある点の内、或る一つの点とその直ぐ隣の点の隔たりだけが僅かに開いたに違いない。その二点だけが目を射た。いや目をではなく、そちらへ水が流れようとする光りを射た。しかし逆に水を拒んで押し返そうとする光りであるなら、水はその光りの似姿となって常に光りを逸れる方へとばかり流れ出るしかない。二つの点は光りを射たのでもなく、水の描く線の僅かな曲がりの軋む音にでも映った、水底のうねりの艶めく様か何かを射たのかも知れない。何れにしろそのようにして水は光りから身を躱して自らの流れの内に逃れ出られた。更にその直ぐ隣だった点とそのまた直ぐ隣の点の隔たりが僅かに動いた。どう動いたか分からないがその新しい二点だけが、外に拡がり伸びるようにドロリと滲んで、その中に数え切れない点を揃えて含んだに違いない。それらの点が滲みを生んで、光りに通じるように見せ掛けては光りの届かない方へ通じているらしい。そう見破った積もりになっているのは、その体の半分程が脳天の突起である逆さにされた木偶共で、その木偶共は、それを閉ざす硝子のよう

な塊を一切纏ってはいないが、恰もそれを纏って中に閉ざされているかのように脳天の突起を真下に向けて動かず、残りの全身を玉そっくりに綺麗に丸めて、玉の形を誇るように真上に掲げている。木偶共は水の流れから光りの似姿を盗んだのかも知れない。光りの届かない暗い中に落ちて、水は全て消えていた。

　その消えた水に僅かでも浸される兆しが差すなら、それに抗うように玉の形の木偶共の逆さの全身は、弧を描く緩く斜めに滑る列を成して、互いの隔たりを縮めようとするが、そうし向けているのは消えた水の他にない。その証しを探ろうと玉の姿を端から順に細い刃で切り開くのが光りの似姿なら、そうし向けているのが私で、その私は真珠のように出来たものを口に二つ含んで舌で転がすのを、已めたくても已められなくなっていた。二つの真珠のように出来たものが、目を除く私の全身を、その中に閉ざしていると思えて仕方ないからだ。それなら真珠のように出来たものは私の目の傀儡であるよりない。光りの似姿が切り開いた木偶共の体の内側から、疎らに黄色の点が輝き出たが、私の目はそれを直ぐに光りの似姿が仕込んだ紛いものと見抜いて、そう見抜いてしまえば私の目は役目を終えたかのように光りの似姿に押し潰され、却って光りの似姿に乗り移れた。それで二つの真珠のように出来たものが裂けると私の口も裂け、細かく飛び散った唇の肉が光りの似姿に降り掛かり朱に染まり掛かるのを、消えた筈の水に濡れた木偶共の脳天の突起を闇雲に擦り付けては洗い流そうと

する、つるりとした白い木偶の姿が、光りの似姿の前に現われた。その木偶は両の掌の中に一つずつ、裂けてなどいない真珠のように出来たものを握り締めていた。或いは二つに裂けたのは光りの似姿の方か。そしてその一つは黄色を拭い落とせずもう片方は赤色を拭い落とせず、それならもうどちらも光りの似姿である筈もなく、自らをそれぞれ細かく切り分けて混ざり合い、切り開かれた木偶共の体の内側へバラバラに落ち込んで行くしかない。それによって傷口を接合した木偶共はまた綺麗な玉の形に徐々に戻るが、その傷の僅かにずれて閉じない様は見逃されようもない。その玉の形が一列に並び、それぞれのどれもそっくりな傷口を辿って滑らかな線が引かれそうになるが、途切れて揺れて繋がりそうで繋がらず、その様は裂けて唇を失った筈の私の口そっくりだろうか。

　それでもその描線に抗う揺れを一々読み取るのに、どれ程か私は励んだに違いない。傷口を辿ったとはまるで見えない一本の真っ直ぐな細い道が、鮮やかにそこに整えられたのだから。或いは励んだのは私でなく、玉の形を支える木偶共の脳天の突起の連係だったか。その答えを求めるようにつるりとした白い木偶が両腕を拡げてその道を横から抱え込み、開いた掌から真珠で出来たようなものを道の両端に転げ込ませたとも見える。それを確かめられないまま私は、その真珠で出来たようなものが口の中に落ちて欲しいと願わずには居られず、

開きっぱなしの口を真上に向けるしかなかった。まるで木偶だ。そう思うしかないなら私は、その真珠で出来たようなものと釣り合うために、唇にばかり特に匠を尽くした、一体の木偶と何処が違うのか。やはり口は裂けてはいなかった。その伸び切って僅かに上下の突端を反らせた歪な環を描く唇だけは、何より古くからのそのままに、ただ一つ常に抜きん出た新しさを誇って他の何とも比べようもなく揺るがない。

　或る世界というものが知られ得るなら、それは色と形からではなく、過不足なくその唇から出来ていなければならない。とそのようにその唇は、僅かな震えさえ時の外に凍らせて、自らを現わそうとはしているのだった。しかしそうでありながら、その誇らかな唇の色と形は、真珠のように出来たものへの期待によって色でも形でもなくなり、そうして唇としての姿を失いながら、真珠のように出来たものの色と形をもなくさせていた。それでしかし、それは世界と知られ得るのか。その色とはどれなのか。それがそれなのだ、とそれでもその唇の姿を失ったものは、唇の姿であったものとしてそのように自らを示してはいる。まるで木偶だなどと誰が誰に言えるのか、とそのように問う誰かが呼び出されてさえ、呼び出されたと知らされもせずにそこを去るしかない。そのそこに、左右の耳が刃のように上を向いて寄せ合わされ、唇の姿であったものとしての世界を見詰めているのなら、耳に耳と知れる色も形もあるのは、

それが何かの色と形を見て取るためであり、だから耳だけは、知られ得る世界とは切り離された汚辱の中に沈んで、世界に色も形もないと見抜けている。ただ見る力に恵まれても、その威力の発揮される世界を、そこを通して映していると知らずに映しているだけでは、何も見ていないのと変わらないだろうか。いやそうであればこそ耳は世界をありのままに知り得て、その耳の知り得る事に拠ってだけ、世界の全ては色も形もなしに、そのようなままにあり得るに違いない。

その耳と世界とが、それが耳と世界であるために、長方形の一枚の黄色の花びらでなければならなかった。それは逆さに舞い昇って、水溜まりの底無しの方へと、もう一つの自らである自らの似姿を求めなければならない。その似姿は、聞き取られようとされてだけ求められる。聞き取られてしまえば色も形も失い、初めから求められてもいなかったとされてしまう。それを防ぐためにだけ水溜まりは底無しなのであり、そこに姿を眩ませていられる限りの似姿なのだ。そう知り得るのは長方形の黄色の花びらしかない。花びらは自らの色と形のを音にして水に溶かし、底無しの方からの微かな反響に望みを繋ぐ。その底無しへ降りて行く長方形は、僅かずつ歪んで凹みを幾つも孕み、黄色を僅かずつ濁らせる。しかしそれが自らの似姿との係わりを示すものでないのは、その角度次第で凹みにうっすら赤味が差すので知れた。段々とその赤味は水の中に濃

く流れ出て、花びらの耳を塞いだ。そうして花びらは、その色も形も底無しの方へ奪われてしまう。

　それでも花びらを離れた長方形と黄色が、底無しの筈の底にまで届けば、否応なくその花びら自らの似姿を捉えるだろうが、それを聞き取る耳を置き去りにして来てしまっては何とも覚束なく、替わりに長方形と黄色は楽器のように互いを打つか擦るかして響きを奏で、それをその似姿に聞き取らせようとするのかも知れない。その似姿が聞こえない振りをするのは承知の上だが、その振りこそ、似姿が自らの色と形を聞き取る証しだろう。しかしただ聞き取られてしまうだけの長方形と黄色では、折角間近にしたその似姿の身振りをどうにも出来ず、却ってその身振りのせいで掻き消されてしまわないだろうか。そうしてそれが似姿に知れる筈もない。似姿が色でも形でもないなら、色と形の失われる事について知れる筈はないのだから。そして長方形と黄色が失われては、たとえ色でも形でもない似姿であろうと、そこに現われようがないのも明らかだ。花びらに置き去られた耳は、それを見ただろうか見なかっただろうか。どちらに賭けても花びらは花びらで、しかもその色と形が失われているのにも変わりはなく、そのようであって、それはそこにある花びらであり、決して何かの似姿ではない。しかし何かの似姿でないとしたら何なのか。せめて何かの似姿のようにでも出来ていないのなら、それは何ものでもない。それを敢えて何ものの

でもないと主張するにも、何ものでもないものの似姿のように出来ていなければ叶わない。

そのただ何かの似姿のように出来たものを、私は、見て取るなり触れたりも出来る。その私も、取り敢えずそのような振りをする何かの似姿のように出来たものであればだが。いや私がそれを見たり触れたり出来るなら、そしてそのような私でしかないのなら、何も私は、私であるままでも、私の似姿のように出来たものであるまでもなく、ただ何ものでもないままに、そのただ何ものでもないものをそこに現わしめる力の似姿であるに等しくはないか。しかしそのような力が、嘗て何処かで振るわれただろうか。何ものでもないものにだけその力の知れたところで、その力にどのようにか似姿の備わる筈もないなら私はまた、ただ何ものでもないままに、そのような私に還されるだけではないか。それでもその私に、何かを見たり触れたり出来たとしても、その私はただ、何ものでもないままに私へと還されるものを追うだけであり、私に見たり触れたりされたものは、その私によって何ものでもないものに還されるだけではないか。それともそのような私は、見る事触れる事についても何も知り得ない私によってでっち上げられただけのものだろうか。私が何かを見たり触れたり出来るかも知れないようなものであるためには、私はそんなでっち上げをするしかなく、そのでっち上げをしている時にだけ私は私の拵えたものを、私と呼べ

たりもするだけなのか。ただそれでも力の似姿もが、そのような私と等しいだけのものかどうかについては、未だ何も示されてはいない。寧ろその力の似姿についてそれを何故そう呼べるのかも怪しい程に未だ何も明かされていない事が明かされて、その何も明かされていないものを、私にでっち上げられた私が、引き取れるなら引き取るしかないし、引き取れないのなら、でっち上げた私だけでそのような私へと還るしかないが、先ずもってその私は、その私にさえ顧みられるべき何ものも残していない。それが、考えられる最も増しなでっち上げであるかどうかも分からずに。

　それでも花びらは残る。何ものかへと失われる事はない。そうである一方で、或いはそうである筈もない一方で、花びらはそのようなそれを見もせず聞きもせず、それでも悪事など謀るように寸分違わず自らをその身に引き戻し、どのようにか花びらであった姿など跡形なく消し去って、その消し去った事も消し去られた後に、ただ見せ掛けの姿を誇ろうとするかにその姿を捨てて已まない、何ものかへと失われるばかりの花びらとして残る。そうして花びらは自らの似姿となれただろうか。

　そう問えるのなら、そこに花びらは残っていない。それに代わってそのような事情を独り知る、唇の姿を失ったものだけが、何ものへも失われてしまう中を、似姿に似る事のない花びらを求めているに違いない。それだけが、何もの

へも失われてしまうものを悉く従えて、自らの似姿に決して似ようとせずに残る。そうなれば、それは唇の姿を失ったものと呼ばれるべきでなく、ただ唇とだけ呼ばれれば済む。そのありようを過不足なく表す呼び名はしかし、残っていない花びらにだけ知られて、唇には知られようもない。残っていない花びらは、唇を唇と呼んで、何ものへも失われるものの中の花びらの似姿の悉くを花びらに決して似る事のないものに変え、唇の求めに応えようとするだろうが、それを知るのも残っていない花びらだけであり、そうであればこそその呼び名に相応しい唇であると、残っていない花びらは知らなければならない。

　そのようにして花びらは残る。それはしかし、失われるものは失われ、捨てられるものは捨てられ、それでも何かが残る事だけは残る、とそのように言い換えられる。そう言い換えられてしまえば、花びらが、残る事だけの方に残れる筈はない。それでも呼ばれる花びらなら、それは何かを呼ぶ事の徒労を示す印がそこに求められたに過ぎない。それならしかし、それを求める力のその力に決して似ようとしない似姿が呼ばれるべきではないか。似ようとしたところで似姿は似姿にさえ似せられない。これ程に徒労を示すに相応しい印もない。それが花びらと呼ばれるなら花びらは残る。そしてその残されるのは、何かを呼ぶだけでなく何かが残る事だけが残る事の徒労をも示す印が、求められているからであるしかない。それが花びらであるのは、初めから定まっていたので

なければ、途中でそれを定める力が定めたのだ。そうして花びらはその力に少しも似ないままで、その似姿になれただろうか。せめてその似ない姿の似姿になれただろうか。そう問えるのなら、花びらは初めから呼ばれてもいない。唇がただ一つ求めるのはそのようなものではないのか。そしてその求められるものが、そのように唇に求められているのを知るのなら、唇もまた、その知れたものに求められるものとして、唇の求めるもののように、初めから呼ばれてもいない唇であるよりないのではないか。それを示す印が求められなければならない、というのでもなく。（二〇〇六年七月二十四日）

逸話集

著者　u_

© 2006 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published